

無い部分を一層急いで上がり近づいて来た。

「アンドレーエ」と、公爵嬢マリイアは思った。「いゝえ、左様な筈は無い、左様だつたら餘り不思議だから」と、公爵嬢は思った、と、公爵嬢が左様思つた途端に、家僕が蠟燭を持つて立つて居た踊り場の上へ、深い襟が雪だらけに爲つた毛皮外套を着た公爵アンドレーエの顔と姿がヒヨイと出て来た。左様、それは、彼であつた、が、蒼く、瘠せて、顔には、前とは全然變つた、奇異に和らいだ、イラ／＼した表情があつた。彼は、階段を上つて行つて、妹を抱擁した。

「では、私の手紙を受け取り無かつたね？」と、彼は尋いた、そして、返答を待たずに——公爵嬢は物が云へ無かつたのだから、その返答は得られ無かつたのだが——振り返つて、後に居た醫師と一緒に（二人は最後の驛亭で邂逅つたのだ）、急いで二階へと駆け上がり、再妹を抱擁した。

「實に不思議な運命だ」と、彼は云つた。「可愛いマアシヤ」で、毛皮外套と外靴を投げ飛ばして、彼は小さい公爵夫人の部室の方へ行つた。

(九)

小さい公爵夫人は、夜間帽を着て枕の上に臥て居た。(苦痛は唯だ一寸の間止んだのだ)。黒い髪は、膨れた汗みづくになつた頬部に捲髪になつて、横たはつて居た。柔毛のある唇の微紅色の可愛い小さい口は開いて居た、そして、公爵夫人は嬉しさに微笑んで居た。

公爵アンドレーエは、その部室へ入つて行つた、そして、公爵夫人が臥て居た寢臺の足の方で、公爵夫人に向いて立つた。小兒のやうな恐怖と昂奮とで見詰めて居るキラ／＼した眼が、その表情は寸毫も變らずに、

彼の上に見据ゑられた。

「私は貴下がた衆皆を愛する、私は誰にも惡い事は爲無かつた、何故、私は苦むのでせう？、助けてください」と、公爵夫人の顔が云つて居るやうであつた。

公爵夫人は自分の夫を見た、が、自分の前に今夫が出て来た意味を呑み込ま無かつた。

公爵アンドレーエは、寢臺を廻つて行つて、公爵夫人の額に接吻した。

「私の大切な人」と、彼は云つた。これは、彼が公爵夫人に話し掛ける時に、前には、決して用ゐたことの無い語なのだ。「神様はお慈悲深い……」

公爵夫人は、尋ねるやうな顔、小兒のやうな非難の顔で、公爵アンドレーエを見詰めた。

「私は、貴下から助が得られると待つて居た、けれども、何も無かつた、何も無かつた、貴下からも」と、公爵夫人の眼が云つた。公爵夫人は、公爵の來たのに驚ろか無かつた、彼が來た理由を解さ無かつた。彼の來たことは、公爵夫人の苦痛とそれを軽くする事とは、何の關係も無いことであつたのだ。

陣痛が再始まつた、そして、マアリヤ・ボグダノヴナは公爵アンドレーエに部室から出た方が宜からうと注意した。

醫師が部室へ入つて行つた。公爵アンドレーエは出て来て、公爵嬢マリイアに出會つて、再その傍へ行つた。二人は、囁語で話したが、その談話は時毎に止められた。

二人は、待つて、聞き澄まして居た。

「おいでなさいよ、貴下」と、公爵嬢マリイアが云つた。公爵アンドレーエは再妻の方へ行つて、次の間に坐つて、待つて居た。一人の女が、恐れた顔で寢部室から駆け出して來た、そして、公爵アンドレーエを

見るとドギマギした。

●公爵は手で顔を隠して、そのまゝで五六分居た。可憐な、頼り無い、動物のやうな呻吟が次の部室から聞えて来た。公爵アンドレーエは立ち上つて、戸へ行つて、既でのことそれを開ける所であつた。誰か、戸を抑へて居た。

「入つては不可ません、不可ませんよ」と、恐れた聲が内部から云つた。公爵は部室の裡を歩き廻りはじめた。叫聲が止んだ。五六秒経つた。不意に、恐ろしい叫聲が——公爵夫人の叫聲では無い、公爵夫人に左様なに叫ぶことが能きるだらうか？——部室から聞こえて来た。公爵アンドレーエは戸へと駆け寄つた。叫聲は止んだ。彼は、孩兒の泣聲を聞いた。

「何だつて孩兒を彼所へ連れて行つたんだらう？」と、公爵アンドレーエは、初めのうち寸時は怪んだ。「孩兒か知ら？。何んな孩兒なんだ？……何故、彼所に孩兒が居るんだらう？。それとも、孩兒が生れたのかな？」

彼が、不意に、その泣聲の喜ばしい意味の全體を確めるといふと、涙で胸が塞がった、そして、窓縁へ兩腕を凭たせて、小兒が泣くやうに啜泣した。

戸が開いた。醫師が、上衣を着ずに、襯衣の袖をたくし上げたまゝで、顔を蒼くし、下顎をビク／＼させながら、部室から出て来た。公爵アンドレーエはそれに言語を掛けた、が、醫師は顛倒した態で彼を見て、一言も云はずに、行つて了まつた。女が一人駆け出て来た、そして、公爵アンドレーエを見て、戸口で躊躇つて止まつた。彼は妻の部室へ入つて行つた。

妻は、彼が五分前に見たと同なじ位置で、死んで居た、そして、見詰めたまゝで動か無い眼や、白い頬部

に拘はらず、細かい黒い毛で蓋はれて居る小さい唇のある可愛い小兒のやうな顔には未だ前と同なじ表情があつた。

「私は貴下がた衆皆を愛した、私は誰にも悪りい事を爲無い、それなのに、何ういふ事を貴下がたは私に爲ましたか？。さアご覧なさい」と、可愛い可憐な死顔が云つて居た。部室の隅では、何か知ら赤い小さい物が、マリイヤ・ボグダアノヴナの振へる白い手の裡で、鳴いたり、鼻風を吹いたり爲て居た。

二時間経つてから、公爵アンドレーエは、靜な歩調で父親の部室へ行つた。老人は最早何でも知つて居た。彼は、戸の傍に立つて居た、で、それが開くや否や、彼のさら／＼した年取つた腕が、子息の頸へ締付機のやうに、纏ひ付いた、そして、一言も云はずに、小兒のやうに啜泣を始めた。

三日経つて、小さい公爵夫人は葬むられた。公爵アンドレーエは、最後の別を爲る爲めに、墳墓の段々へ行つた。棺の裡でさへも、眼が閉ぢて居ながら、顔は同なじであつた。

「あゝ、何ういふ事を貴下がたは私に爲たのですか？」と、その顔が未だ云つて居るやうに見えた、そして、公爵アンドレーエは、何物か、自分の心から裂き去られたやうに感じ、最早到底直せ無い、又忘れることも能き無い罪が自分にあるやうに感じた。彼は泣くことが能き無かつた。

老公爵も、裡へ入つた、そして、實に穩やかさうに重ね合はされて居た小さい蠟のやうな手に接吻した、と、彼に向かつて、公爵夫人の顔は——

「あゝ、何ういふ事を貴下がたは私に爲たのですか、そして、それは何故です？」と、云つた。で、老人は、その顔を見るといふと、腹立たしさうに顔を背けた。

それから又五日経つと、若い公爵、ニコライ・アンドレーエーチの洗禮があつた。乳母が小兒を纏るんだ衣類を顎の所まで引き上げて居ると、僧が、鴉鳥の羽で、孩兒の赤い、皺の寄つた手や足に聖油を塗つた。孩兒の神父であつた祖父は、孩兒を落してはならぬと振へながら、打潰した錫の水溜を廻つて孩兒を持つて行き、そして、神母の公爵嬢マリヤにそれを渡した。水溜へ孩兒を溺らしてしまひは爲まいかといふ恐怖で、人心地もせぬ態で、公爵アンドレーエーは次ぎの部屋に坐つて、儀式の済むのを待つて居た。彼は、乳母が、孩兒を伴れて出て来ると、嬉しうにそれを見た、そして、乳母が、水溜へ投げ込んだ孩兒の髪を着けた蠟の片が、水に沈まずに、上に浮いて居ることを彼に話すといふと、意を得たらしく頷いた。

(十)

ドロオホフとベズウホフの決闘にロストオフの關係したことは、老伯爵の盡力で内分に済まされて了まつた、そして、ニコライは、覺悟したやうに、卒伍に貶される所では無く、反つて莫斯科總督の副官を命ぜられた。そのお蔭で、家族の他の連中と一緒に田舎へ行くことが能きずに、新な職務の爲めに夏ぢう莫斯科に引き止められた。

ドロオホフは癒つた、そして、ロストオフは、彼の養生中特に彼と親しく爲つた。ドロオホフは、彼を優しく、熱烈に愛して居た母親の家で臥て居た。ロストオフが好になつたマリヤ・イヴァノヴナは、自分のフエディアに對するロストオフの友情を見て、屢彼に自分の子息のことを話した。

「左様です、伯爵、彼は心が立派過ぎるんですよ、心が潔過ぎるんですよ」と、母親は、屢云つた「この

頃のやうな腐敗した社會ではね、徳は誰にも氣に入らずに、誰からも悪く云はれるんですよ。さア、ねえ、伯爵ベズウホフの方が善いんでせうか、立派なんでせうか、何うですね。フエディアは、彼の特質の立派な行き方で、彼の人を愛して居ます、そして、今でさへ、彼の人のことを一言でも悪くは云は無いんですよ。彼得堡では、巡查に向つての彼の悪戯、彼様云つた種々な冗談を二人は一緒にやつて、何でも彼でも二人は一緒に爲て居たんぢやありませんか？。で、ベズウホフは何の咎めも受けずに、フエディアが一人で、咎を悉皆自分で背負つて了まつたんですよ。その爲めにやア彼は随分な目に合つてるんですよ。復職されは爲しました、けども、彼を復職させずに誰だつて居られるもんですかね？。彼のやうな、祖國の勇敢な眞の子が戰場でもさう澤山あらうとは、私何うしても思ひませんねえ。で、今、何うなんです？——この決闘ぢやアありませんか？。今の人間に感情が寸毫でも、名譽の心が寸毫でも残つて居るんでせうか？。彼が一人息子だといふことを知つて居ながら、彼を喚び出して、彼様に眞直ぐに覗ふなんて、眞個に何とも云ひやうが無いぢやアありませんか。神様がお慈悲深かつたのを私どもは有り難く思は無ければなりませんですよ。で、それは悉皆何の爲めなんでせう？。ねえ、誰だつて今日日隠くしごとの無い人が有るでせうか？。ねえ、若し、彼の人々が、それほど焼くんだつたら——それは私にやア解りますわ——すつと前に氣が着く筈です、一年も續いて居たんですよ。で、さう爲て置きながら、フエディアは、彼の人の世話にも爲つて居るもんだから、戦かふ氣遣は無いと云ふところを見込んで、彼を喚び出すなんて。何といふ卑しいことでせう。何といふ惡黨らしいことなんでせう。私は、貴下がフエディアの心持を善く知つて居てくださるのを知つて居ますよ、私の親愛な伯爵、それが、ねえ貴下、心から私が貴下を愛する理由なんです。彼の心持を知つて、呉れる人はまア無いと云つて宜いんですよ。彼は、眞個に氣高い、神のやうな性質なんですからね」

ドロオホフ自身も、養生中、何うしても彼の云ひさうも無く思へる種々なことをロストオフに云つた。「世間の奴等は僕を悪人だと思つてゐる、それは僕は知つてゐる」と、彼は屢云つた。「で、奴等がさう思ふのは僕に取つちやア至極結構なんだ。僕は、自分が愛する人の外、何んな奴も知らうと思は無いんだ。けれど、僕が人を愛する場合にやア、前方の人を、その人に自分の生命も呉れてしまふやうな風に、愛するんだ、そして、他の奴等は、打つかり放題踏み潰してしまふんだ。僕にやア、大切な可愛い母親と二三人の信友があるばかりなんだ、君はその信友の一人なんだ、それで、他の奴等は、奴等が僕に取つて、役に立つか、意地が悪いかである限り、注意を拂つてやるんだ。所で、殆ど悉皆の奴等が意地が悪いんだ、特に女が左様なんだぜ。左様なんだ、君」と、彼は續けて「愛すべき、立派な、氣高い心の男には、随分多く、僕は出會つたね。けれども、賣り物の家畜で無い女といふなア——伯爵夫人も、料理女も、奴等は悉皆同様なんだがね——それは、未だ一遍も出會つたことが無いんだ。僕は、僕が女の裡に索めてる天使のやうな潔さと獻身に未だ一度も出會つたことが無いんだ。若し、さういふ女が見付かつたら、僕はその女の爲めに生命を獻じちまうね。けれども、さらの奴等は……」彼は、侮蔑の手眞似を爲た。「けれども、ねえ君、僕が未だ生命が惜しいと思ふとすれば、それは、僕を生れ變らせ、潔くし、高めて呉れるさういふ神のやうな者に未だ出會へるだらうといふ望みがあるので、生命が惜いんだ。けれども、君にやアそれは解かるまいなア」

「左様、僕には善く解かるよ」と、この新しい信友の影響を甚どく受けたロストオフは答へた。

秋になると、ロストオフ家は莫斯科へ歸つた。冬の初に、デニイソフも又歸つて来て、ロストオフ家に逗留した。ニコライ・ロストオフが莫斯科で送つた千八百〇六年の冬の初は、彼に取つても、家族ぢうに取つ

ても、最も幸福な、最も爽快な時節であつた。ニコライは、親の家へ自分の知つて居た若い男を幾人も伴つて来た。ヴェエラは二十歳の奇麗な娘であつた、ソオニヤは、咲き掛けた花の有らゆる美しくさを持つた十六歳の娘。ナタアシヤは、半分成人、半分小兒で、或る時は小兒らしい馬鹿々々しい所があるかとすれば、次ぎには、若い娘の懐かしさで人を飽くまで引き付ける所があつた。

ロストオフ家は、その時分、極く若い、極く美しい娘たちが居る家内には普通に起るやうな、戀愛を爲る特種な雰圍氣が満ちて居た。印象を受け易い、何時も微笑んで居る（多分は自分たちの幸福に對して、あらうが）さういふ若い娘たちの顔の間では、熱心な騒動のその渦旋の裡では、眞個に何の聯絡も無いが、誰に對しても眞個に親しげな、何でも直ぐ爲る心持になつて居る、希望に飽くまで満ちた、若い女の饒舌の裡では、歌謠と音樂の何の聯絡も無く響く裡では、その家へ来る若い男は誰でも、ロストオフ家の若い連中が彼等自身感じて居たと同様な、直ぐ戀愛を爲るとか、幸福にあこがれるとかいふ感覺を感じるものであつた。

ロストオフが家へ伴つて来た若者の間で、一番優れた者の一人は、ナタアシヤを除けては、家ぢうの誰にも好かれたドロオホフであつた。ナタアシヤは、ドロオホフのことでは兄と殆ど喧嘩を爲た。ナタアシヤは、ドロオホフは意地悪だと云ひ張り、ベズウホフとの決闘では、ピエールが善くつて、ドロオホフは悪く、そして、ドロオホフは恐ろしい、信實の無い男だと言ひ張つた。

「そりやア、私は何にも知ら無いんだけど」と、ナタアシヤはいこちな頑強で叫ぶのであつた。「彼の人は、意地が悪いくつて、無情よ。貴下のデニイソフの方が、ねえ、私好きだわ、彼の人は放蕩漢よ、でも、それでも、私彼の人が好きよ、私左様思つて居るのよ、私何うと云つて、貴下にやア云へ無いんだけど、彼の人は何でも計畫を立て、爲るんだわ、だから、私それが嫌ひなのよ。デニイソフの方は……」

「いや、デニソフの方は別問題だ」と、ニコライは、ドロオホフに比べると、デニソフさへ別に大したことは無いのだといふ意味を含ませた調子で、答へた。「あのドロオホフに何んな善い心があるか理解し無きやア駄目だ、彼の男が母親と一緒に居る所を見無きやア不可、實に立派な心なんだ」

「私其様なことは何にも知ら無いわ、だけでも、彼の人の傍ちやア何だか安心が出来無いやうなのよ、それに、彼の人がソオニヤに戀し掛つてるのを貴下知つてゝ？」

「何だ馬鹿々々しい」

『それは確よ、まア善く見て居て貰んなさい』

ナタアシヤの豫言は中つた。何時もは婦人には一向氣の向か無かつたドロオホフが、度々家へ來だした、そして、誰の爲めに彼が來るかといふ問題は直きに（誰もそれを何とも云ひは爲無かつたが）決定された——それはソオニヤの爲めであつたのだ。そして、ソオニヤは、決してそれを口へ出し得は爲無かつたが、それを知つて居た。で、ドロオホフが現はれる度毎に、顔を眞赤に爲た。

ドロオホフは、屢ドロオホフ家で食事を爲た。ロストオフ家の人々が行く演藝會は一つも外づさ無かつた、そして、ロストオフ家の必然何時でも行つて居たイオゲルの「少年少女」舞踏會に出た。彼はソオニヤに、向つて著るしく注意を示めした、そして、さう見詰められるとソオニヤが眞赤に爲らずには居られ無かつたばかりで無く、老伯爵夫人やナタアシヤさへ、ドロオホフのその眼付を見ては顔を赤く爲た程の強い表情を眼に持つて、ソオニヤを見たのであつた。

この強い不思議な男が、他の人に戀愛を爲て居たその陰色の姿の好い若い娘から與へられた印象を振り拂ふことが能き無かつたのは明瞭であつた。

ロストオフはドロオホフとソオニヤの間の様子がこれまでとは幾干か變つて居るのに氣付いた、が、その新しい状態が、何ういふものか、確然とは思ひ定められ無かつた。「奴等は誰かに戀愛してゐるな」と、ロストオフはソオニヤとナタアシヤのことを思つた。が、彼は、ソオニヤとドロオホフに對しては、前のやうに、極く平氣では居られ無くなつた、で、彼は家に居ることが少し稀有に爲つた。

千八百〇六年の秋には、誰もが、再ナポレオンとの戦争のことを話したし、而も、前の年よりも尙一層の熱心でさへその取り沙汰を爲るのであつた。人口一千毎から、現役に對する十人の補充ばかりで無く、豫備に對する九人の國民兵を出せといふ徵募令が出た。到る處でナポレオンが呪咀はれた。莫斯科での談話は、近々に起る筈の戦争のことばかりであつた。

ロストオフ家にとつては、戦争の準備に對する利害は、ニコルウシカが莫斯科にその上居る氣は無く、降誕祭休日後になつたら、デニソフと一緒に自分の聯隊に加はらうとデニソフの賜暇期の盡きるのを待つて居るばかりだといふ事實のみに集中して居た。出發が近寄つたことは、ニコライの遊を妨たけるどころでは無く、反つて、彼の快樂に一層味を加へたのであつた。

(十一)

降誕祭から三日目の日に、ニコライは自家で中食を爲た。それは此頃では珍らしいことであつたのだ。それは、ニコライの聯隊に加はる爲めに、洗禮祭後に、デニソフと一緒に出發する筈であつたので、ニコライの爲めの別離の晚餐であつた。ドロオホフやデニソフを加へて二十人が食事を爲て居た。その降誕祭休日の間程強く、戀愛や、戀愛を爲るといふ雰圍氣が、感ぜられたことは、未だ嘗てロストオ

フ家では無いことであつた。

「幸福であることの利那を見通すな、戀愛を爲、又、戀愛せられよ。それが、この世での唯一の實在な物なんだ、他の物は悉皆愚劣なことだ。そして、それが、われ／＼がこの世で氣を入れて居る唯だ一つの物なんだ」といふのが、その雰圍氣に現然と表はれて居た情緒であつた。

毎日々々、二頭立の馬の疲れ切るまで乗り廻しても、行くべき所招待された所を廻り切れずに居たのだが、今日も尙且さうであつた後で、ニコライは丁度食事時に家へ歸り着た。内へ入るや否や、彼は家の裡の戀愛のその烈しい雰圍氣を感じた、が、その外に、連中の裡の或る人々の間に行はれて居る奇異なモチモチした様子に氣が付いた。ソオニヤが殊に不安らしく見えた。ドロオホフも老伯爵夫人も左様であつたし、ナタアシヤも少し左様であつた。ニコライは、食事前にもソオニヤとドロオホフとの間に何事か有つたに違ひ無いことを見た、そして、彼の特質の精緻な本能で、食事中、その二人に對して、極く同情的に、且注意深くして居た。

その晩は、舞踏教師のイオゲルが、降誕祭休日の間、弟子の爲めに開く舞踏會がある筈であつた。

「ニコオレンカ、貴下イオゲルへ行か無い？ 後生だから行つて下さいよ」と、ナタアシヤが云つた、
「貴下には是非來て呉れと頼んだのよ、そして、ヴァシイリ・ドミトリイチも」(これはデニイソフであつた)
「行くことよ」

伯爵嬢のご命令とあらば、何處だつて私の行かん所があるものですか」と、冗談にロストオフ家に於てナタアシヤの騎士を氣取つて居たデニイソフが云つた。私はバ・ド・シヤルでも踊ります」

「時間があれば宜いんだがねえ。私はアルハアロフと約束したよ、彼家に會があるんだ」と、ニコライ

は云つた。

「で、君は？……」と、彼はドロオホフに振り向いた。で、その問を尋くや否や、彼はそれを尋くところ

で無かつたことを見た。
「左様、多分……」と、ドロオホフは冷然と腹立たしさに答へて、ソオニヤの方をジロリと見た、で、

再、倶楽部の宴會でピエールを見たとき全然同様の眼容で、睨みながら、ニコライをジロリと見た。
「何か面白く無い事があるな」と、ニコライは思つた、そして、彼は、ドロオホフが食事の後直ぐ行つて了まふと、尙一層その推量の中つたことを感じた。彼は、ナタアシヤに手招きして、何様なことが有つたのか尋いた。

「私貴下を探がしてたのよ」と、ニコライの傍へ駆け寄りながら、ナタアシヤが云つた。「私貴下に左様云つたでせう、でも、貴下は信じ無かつたぢやアありませんか」と、ナタアシヤは大得意で云つた。「彼の人

がソオニヤに申込を爲たのよ」
ニコライは、この頃はソオニヤのことは殆ど考へ無かつたけれども、これを聞くと、何物か自分の身體から扭斷られたかのやうに感じた。ドロオホフは、持參金の無いソオニヤに對しては、良い、而も或る點では立派な配偶であつた。伯爵夫人や、世間一般の見地から云へば、ソオニヤがドロオホフの申込を斷るなどは以つての外のことであつた。だから、ドロオホフの申込を聞いた時のニコライの最初の感情は、ソオニヤに對する絶望の憤激であつた。

彼は其所をグツと踏み耐へて、「夫りやア結構なことぢやア無いか、無論小兒らしい約束なんざ忘れて、申込に應じ無きやア不可」と、云はうと爲た、が、それを云ひ了へぬうちに、ナタアシヤが云つた――

「まア何うでせう。彼の女は断つたのよ、一も二も無く断つて了まつたのよ。彼の女は誰か他の人を愛してゐるからと云つてゐるんですよ」と、ナタアシヤは、寸時黙まつて居てから、云ひ添へた。

「うん、流石だ、俺のソオニヤは左様爲た筈だ」と、ニコライイは思つた。

「母上様は幾度と無く断ら無いやうにつて彼の女にお頼みなすつたのよ、でも、彼の女は断つて了まつたのよ。で、私、彼の女は、何でも一度云ひだしたら、何うしてもそれを變へ無い女だと思ふの……」

「で、母上様は、断わる勿と、彼の女に頼んだのだつて」と、ニコライイは、不満さうに云つた。

「左様よ」と、ナタアシヤが云つた。「ねえ、ニコオレンカ——怒つちやア不可いことよ——でも、私知つてるわ、貴下彼の女とは結婚し無いでせう。私左様思ふわ——何故左様思ふんだか解ら無いけども——でも、私確に、貴下彼の女と結婚し無いと思ふわ」

「いや、それはお前にやア分から無いよ」と、ニコライイは云つた。「でも、彼の女と話し度いもんだなア。ソオニヤは實に可愛い娘だなア」と、彼は、微笑みながら、云ひ添へた。

「左様よ、眞個に可愛い娘だわねえ。私彼の女を此所へよこすことに爲てよ」で、ナタアシヤは兄に接吻して、駆けて行つて了まつた。

ホンの一分位経つと、恐れた、ドギマギした、面目なさうな態度で、ソオニヤが入つて來た。ニコライイは傍へ行つて、手に接吻した。彼が歸つてから、唯つた二人限りで談話を爲、而も、戀愛を語るのは、これが最初であつた。

「ソフイ」と、彼はソオニヤに云つた。初めは、オゾくとして居たが、言語を進めるに従がつて、だんだん大膽になつて、「貴女が唯だ立派な都合の好い配偶を断るといふんだつたらだが——でも、彼男は、立派

な高尚な奴なんだ……彼男は私の信友なんだ……」

ソオニヤは彼を遮ぎつた。

「私断つて了まつたのよ」と、ソオニヤは急いで云つた。

「貴女が若し私の爲めに彼男を断つて了まつたんだとすると、私は何うも、私か……」

ソオニヤは又彼の言語を中途で断つた。恐れた、懇願する眼で、彼を見た。

「左様なことを云つちやア嫌よ」と、ソオニヤは云つた。

「いや、私は云は無きやアならん。それは、私の自惚かも知れ無い、が、それでも、云ふ方が宜いんだ。

若し貴女が私の爲めに彼の男を断つたのだとすると、私は貴女に全く眞實のことを話さ無きやアなら無いんだ。私は、眞個に、誰よりも貴女を愛して……」

「それだけで私には最早十分よ」と、ソオニヤは、顔を眞赤にして、云つた。

「いや、左様なことは無い、が、私はこれまで何千度と無く戀愛を爲た、そして、愛情と、信認と、戀愛の斯れ程強い感じは貴女より外のものに向つては、私は持た無いのだけれども、再戀愛は爲るには爲るでせう。それに、私は未だ若いんだ。私の母は好ま無いんだ、いや——實際——私は何の約束も能き無いんだ。

で、何うぞドロオホフの申込を考へて見てください」と、ニコライイは、艱然信友の名を口へ出して、云つた。

「それを私に云つちや嫌よ。私何の望も無いの。私唯だ兄弟として貴下を愛するのよ、そして、何時までも貴下を愛するのよ、私何とも爲て頂か無くつて宜いわ」

「貴女は天使だ。私は貴女に恥かしい、けれども、私は貴女を欺ますことがありは爲まいかとそればかり

「恐れるんだ」
ニコライは今一度ソオニヤの手に接吻した。

(十二)

イオゲルのは莫斯科での一番面白い舞踏會であつた。

さう、母親たちが、この頃覺えたばかりの所を行つて居る各自の男の兒や女の兒を見ながら云つた。さう、又、疲れて平たばりさうになるまで踊る男の兒や、女の兒たちが、云つた。さう、又、全く付き合ひの積りでその舞踏會へ來ながら、非常に面白くなる大きくなつた娘や、若者たちが、云つた。

その年は、その舞踏會で縁組が二口出來た。ゴルチャアコフの二人の可愛らしい若い公爵嬢が、其所で結婚の申込者を見出し、そして、結婚した。で、それが、この舞踏會を向一層流行らせさへ爲たのであつた。この舞踏會の他所のと異つて居た所は、主人も女主人も無いこと、及び總ての客に、稽古の切符を賣り、羽毛のやうに諸方はらく、飛び廻つて、自分の藝の規則通りに點頭を爲て、足で床を擦る機嫌の好いイオゲルが居ることであつた。又、今一つ異つた點は、其所の舞踏には、初めて長い衣服を着る十三歳や十四歳の娘たちが行るやうに踊つて樂み度いと眞個に思ふ人々の外は、誰も來無かつたことであつた。

衆皆、中に極く稀に除外例が有るのみで、美しくいか、さう見えるかであつた。衆皆さも嬉れしさに微笑み、さも有頂天らしく衆皆の眼がキラ／＼して居た。バ・ド・シヤルでさへ時々一の弟子たちに踊られた。さういふ連中の中で、ナタアシヤが一番優れて居て、姿の好いので甚く目立つて居た。が、この最後の舞踏會では、衆皆は蘇國踊や、英國踊や、丁度その時分流行り掛つて居た波蘭踊を踊るのであつた。

イオゲルは、ベズウホフの邸宅の大廣室を借りた、そして、舞踏會は、誰もが云つた通り、大成功であつた。其所には、可愛い娘が大勢居た、そして、ロストオファ家の娘たちが一番可愛い連中の仲間であつた。ロスオファ家の娘たちは、取り分け嬉れしさうで、はしやいで居た。その晩、ソオニヤは、ドロオホフの申込みや、自分の拒絶や、ニコライとの對顔やで、大得意に爲つて、家では、グル／＼飛び廻つてばかり居て、附女中がその髪を結つて遣る間隙を無くしたのであつたが、舞踏では、烈しい嬉しさが現然と華やかに顔に出て居た。

ナタアシヤも、それに劣らず、長い袴で眞實の舞踏會に初めて出るのが大得意で、向一層嬉しかつた位であつた。娘は兩方とも、桃色のリボンの着いた白い棉紗の衣服を着て居た。

ナタアシヤは、舞踏室へ入るや否や、戀愛に落ちた。特に誰をと云つて戀愛したのでは無い、が、誰彼無しに衆皆に戀愛したのであつた。誰を見るにしても、その人を見て居る刹那は、その人を戀愛して居た。

「あら、眞個に好いわねえ」と、ソオニヤの傍へ駆け寄りながら、云ひ通した。
ニコライとデニソフは、部屋ちうを歩き廻りながら、親しいさも可愛いらしい風で、二人の舞踏者を見た。

「實に可愛いぢや無いか、美人になるぜ」と、デニソフが云つた。
「誰だい？」

「伯爵嬢ナタアシヤさ」と、デニソフが答へた。

「それに、實に善く踊る、何といふ容態の好いことだらう」と、少時間を置いて、彼は再云つた。
「誰のことを云つてるんだい？」

「なに、君の妹のことよ」と、デニイソフが腹立たしさうに叫んだ。
ロストオフは笑つた。

「親愛な伯爵、貴下は、私の一番弟子の一人ぢやありませんか、是非踊つて下さい」と、ニコライの傍へやつて来て、小さいイオゲルが云つた。「この悉皆の可愛らしい若い婦人たちを御覧なさい」

イオゲルは、同なじ要求を以てデニイソフに振り向いた。デニイソフも前に少時弟子であつたのだ。

「いゝや、君、僕は壁上花で、傍観者だ」と、デニイソフが云つた。「教へ甲斐の無い弟子だつたのを忘れませんか？」

「いや、何うして」と、急いでデニイソフを鎮慰めに掛つて、イオゲルが云つた。「貴下は不勉強だつただけだ、けれども、貴下には才が有つた。貴下には才が有つた」

新たな波蘭踊の奏樂が始まつた。ニコライは、イオゲルを断り切れ無かつた、で、ソオニヤに相手を頼んだ。デニイソフは年取つた婦人たちの傍に坐つた、そして、劔に肘を凭たせ、足で音楽に合せ、可笑しい何事かを話して、年取つた婦人たちを笑はし始めながら、踊つて居る、若い人々を見守つて居た。

イオゲルは、一番先きの對で、自分の一番の自慢弟子のナタアシャと踊つて居た。上靴を穿いた小さい足の和かな優しい動作を以て、イオゲルは最初、羞かしさうでは有つたが、綿密に自分の歩調を行ふナタアシヤと一緒に部室を横切つて飛んだ。

デニイソフは、ナタアシャから眼を離さ無かつた、そして、彼が踊ら無いのは、踊り度く無かつたからで、踊ることが能き無かつたからでは無かつたことを、我知らず洩すやうな態で、劔で調子を合せて居た。舞踏の最中に、彼は、ロストオフを傍へ招き寄せた。

「彼は少し眞正で無いね」と、彼は云つた。「彼が波蘭マズウルカかね？。だが、彼の女の踊は見事だね」
デニイソフは、波蘭でさへ、波蘭マズウルカの踊の巧かつたので名高かつたのを知つて居るので、ニコライは、ナタアシャの傍へ駆けて行つた。

「行つて、デニイソフを相手にお選びよ。彼の男は踊るんだ。實に非常な上手なんだ」と、彼は云つた。

再、ナタアシャの番になるといふと、ナタアシャは起ち上がり、そして、リボンで縁取つた舞踏靴で速歩にチヨコ／＼歩きながら、デニイソフが坐つて居た隅へと、部室を横断つて一人オゾ／＼と駆けた。ナタアシャは、残らずの人が、誰も彼も、自分が何を爲るか待ちながら、自分を見て居ることを見た。ニコライは、デニイソフとナタアシャが微笑みながら云ひ争つて居て、デニイソフは、顔に嬉しさうな微笑を帯びて居ながら、断つて居るのを見た。ニコライは駆寄せた。

「何うぞよ、ヴァシイリ・ドミトリイチ」と、ナタアシャが云つて居た。「さア、何うぞ」

「やア、可愛さうだと思つて宥してください、伯爵嬢」と、デニイソフは戯けたやうに云つて居た。

「さア、おい、馬鹿なことを云はずに、ヴァアシャ」と、ニコライが云つた。

「奴等は仔猫のヴァスカのやうに俺に媚びやがる」と、デニイソフは機嫌よく云つた。

「私貴下の爲めに一晩ちう諂つてあげる」と、ナタアシャが云つた。

「小さい魔法女、私は貴女の爲るまゝに爲ります」と、デニイソフは云つた、そして、彼は、劔を外した。彼は、多数ある椅子の後から出て来て、自分の相手の手を確乎握り、頭を揚げ、片足を後へ引いて立つて、調子の来るのを待つて居た。

デニイソフの背の低いのが他人に分から無くなり、自分でさうだと感じて居るだけの烈しい勇者と他人の

眼にも見えるのは、彼が馬に乗つて居る時か、マズウルカを踊る時かばかりであつた。適度の調子が来るといふと、彼は、自分の相手を大得意な面白がつたやうな顔付で横眼でジロリと見た、そして、片足で意表な叩き方を爲て、床から球のやうにポーンと跳びあがり、自分と一緒に相手をグル／＼廻らせながら、飛び廻つた。彼は、音を爲せず、片足を前に出して、廣室を横断つて飛び、そして、自分の前に立つて居る多数の椅子を見無いで、その方へ真直に突進して居るやうであつた、が、不意に、拍車をチリンと鳴らし、足をバラリと振つて、踵でビタリと止まり、一秒程は、その儘で居、拍車を鳴らして、兩足で足踏を爲、急にクルクルと廻り、右の足を左の足で叩いて、再飛び廻つた。

ナタアシヤの本能が、デニソフの爲やうと爲て居たことを、ナタアシヤに知らせた、で、ナタアシヤは、何ういふ風に自分が爲て居るのか自分では知らずに、彼に身體を委せて了まつた。彼の導くまゝに隨いて行つた。

或る時は、彼はナタアシヤの周圍を、最初は、右の腕の方へ、次ぎには、左の腕の方へと、ぐる／＼廻り、その次ぎには、自分が跪つて、ナタアシヤに自分の周圍をぐる／＼廻はらせ、それから再、駆け出して、一息で幾つもある部屋を悉皆駆け廻はつて了まふ積りらしいかと思えるやうな烈しい勢で、突進した。それから、再不意に止まつて、新しい思ひも寄らぬ踊り方を爲た。ナタアシヤの座の前で、相手のナタアシヤをぐる／＼廻はらせてから、拍車をチン／＼鳴らして、巧く止まり、ナタアシヤに點頭を爲した時には、ナタアシヤは、彼に會釋することさへ爲無かつた。ナタアシヤは、彼を彼と氣が付か無いかのやうな呆然とした顔で微笑みながら、彼を見て居た。

「これは何のことだらう？」と、ナタアシヤは云つた。

イオゲルは、この波蘭踊を眞正のものだとは認める氣は無かつたけれども、誰も彼もデニソフの踊り方には魅せられて了まつた、で、彼は、立續けに、相手として選ばれた、その間、年取つた紳士たちは、微笑みながら、波蘭のことや、舊時の善かつたことを話し合つて居た。デニソフは、勢力で赤くなり、手巾で顔を拭きながら、ナタアシヤの傍に坐つて、それから舞踏會の終るまで、その傍を離れやうと爲無かつた。

(十三)

舞踏の後、二日間、ロストオフは、自分の家でもドロオホフを見無かつたし、尋ねて行つても、不在であつた。三日目に、彼はドロオホフから手紙を受取つた。

「君も最早承知だらうと思ふ彼の理由から、君の家へは又と行くまいと思ふし、又僕は聯隊へ歸らうと思ふものだから、友人たちにお別れの晩餐を上げやうと思ふ——英吉利ホテルへ来て呉れ給へ」

當日に、ロストオフは、自分の家族やデニソフと一緒に見に行つて居た劇場から、十時頃に、英吉利ホテルへ廻つた。彼は、ドロオホフがその會の爲めに借りて居たホテルの最上等の部屋へ直ぐに案内された。二十人ばかりの人が卓子の周圍に集まつて居て、ドロオホフはその卓子の前で、兩方に蠟燭を一本宛控へて坐つて居た。卓子の上には、錢や札が置いてあつた、そして、ドロオホフは銀行を行つて居た。

ニコライアイは、ドロオホフの結婚申込とソオニヤの拒絶以來、ドロオホフには逢は無かつた。で、彼はドロオホフに逢ふことを思ふと不安な感が爲た。

ドロオホフの涼しい、冷たい一瞥が、彼が長くロストオフを待つて居たかのやうに、戸口でロストオフを迎へた。

「長く逢は無かつたぢやア無いか」と、彼は云つた。「来て呉れて有り難う。直きにこの札配りを了まつちまうよ、そして、イリュウシカが合唱を伴れてやつて来るよ」

「君に逢ひに行つたよ」と、ロストオフは顔を赤くして、云つた。

ドロオホフは何の返答も爲無かつた。

「何うだ賭けて見ちやア」と、彼は云つた。

ロストオフは、その途端に、彼が嘗てドロオホフと爲た奇異な談話を憶ひ起した。「痴者の外は、誰も賭では運を頼ま無い」と、ドロオホフがその時云つたのだ。

「それとも、僕と勝負するのが恐いのがね？」と、ロストオフの考想を見抜くかのやうに、ドロオホフは今云つて、そして、微笑んだ。

その微笑の陰に、ロストオフは、ドロオホフに於て、ドロオホフが、日常生活の單調に倦きたやうな態度で、何か奇異な、大抵は残酷な所行で、その單調から遁れやうとする欲求を感じた時に、倶楽部の宴會やその他で、ドロオホフの様子で見たやうなその気分を見た。

ロストオフは不安に感じた、彼は、自分の頭腦を苦しめた。ドロオホフの言語に答へるやうな戲謔を思ひ付くことが能き無かつた。が、彼がさう爲る間隙の無いうちに、ドロオホフは、ロストオフの顔を眞直に見ながら、衆皆に聞こえるやうに、緩然と、靜に、ロストオフに云つた――

「記憶えてるかね、君、僕は君に勝負事の談話を爲たことがあるだらう……勝負事で運を頼みにするものは痴者だつて、だから……誰でも確な勝負を爲無きやア不可のだで、僕はそれを行つて見やうと思ふんだ」

「運を試めすのかね、それとも、確な勝負を爲ることを試みるのかね」と、ロストオフは訝かつた。

「成る程、君は勝負事を行らん方が宜いね」と、ドロオホフは云ひ添へた、そして、今丁度封を切つたばかりの一組の骨牌を投げ出して、彼は云つた――

「銀行だ、諸君」

錢を前へ押し遣つて置いて、ドロオホフは配け始めた。

ロストオフは彼の傍に坐つた、初のうちは勝負に加はら無かつた。ドロオホフは彼をジロリと見た。

「何故勝負に入ら無いんだ？」と、ドロオホフは云つた。そして、不思議なことに、ニコライは、骨牌を取り上げ、その上に少許の金錢を賭け、そして、勝負を始め無いでは、何うしても居られ無いやうに感じた。

「錢を持つて居無いんだが」と、ロストオフは云つた。

「貸してやるよ」

ロストオフは、骨牌の上に五留賭けた、そして、負けた。それから、再賭けて、再負けた。ドロオホフは、ロストオフからの十枚の骨牌を推し「殺す」、即ち、勝つて了まつた。

「諸君」と、少時再骨牌を配つて居た後で、ドロオホフは云つた。「何うか、骨牌の上へ金錢を置いて呉れ給へ、で無いと、計算が減茶に爲つて不可いから」

勝負に加はつて居る人の一人が、貸しに爲て置いて貰らひ度いと云つた。

「え、貸しませう、けれども、間違へると不可いんだ、何うか骨牌の上へ金錢を置いて呉れ給へ」と、ドロオホフは答へた。「心配し給ふ勿、此方は此方同士計算するから」と、彼は、ロストオフに向いて云ひ添へた。

勝負は續いた、従僕はシャンパンを持ち廻ることを少時も止め無かつた。

ロストオフの骨牌は残らず負かされた、そして、八百留の額が彼の負として記るされた。彼は、骨牌へ八百留と書いたが、三鞭酒が彼に對して注がれて居た間に、考へ直し、そして、再何時もの額、二百留を書いた。

「其方に爲るとき給へ」と、ロストオフを見て居たやうでは無かつたが、ドロオホフが云つた「君は、さう爲る方が、負を早く取り返へせるよ。僕は他の人には負けるが、君からは、勝つんだ。それとも、君は僕を恐れてるんぢや無いかね」と、彼は繰り返した。

ロストオフは云ひ分を爲た、八百留の賭を残した、そして、床から拾ひ上げた隅の切斷れた骨牌のハアトの七を前へ置いた。彼は後までその骨牌を善く記憶えて居た。彼はハアトの七を前へ置いて、それへ折れたチヨオクで、大きい圓い字で八〇〇と書いた。自分に與へられた賤ためた三鞭酒を一杯飲んで、ドロオホフの言語に對して微笑み、そして、沈んで行くやうな心持で、ハアトの七を待ちながら、骨牌の束を持つて居るドロオホフの手を見守つた。

その骨牌の勝負はロストオフに取つてはなかく、多くの利害のある所であつた。前の日曜に、伯爵イリイヤ・アンドレエーチは子息に二千留を與へた、そして、彼は決して金錢上の困難のことを話すのを好ま無い人であつたけれども、その金錢が五月までに子息に遣る最後の金錢だと言つて聞かせ、だから、今までより最早少し氣を付けて使ふやうに爲て呉れと子息に頼んだのであつた。ニコライは、實際それで十分以上であるのだから、五月までは、尙その上欲しいとは決して云つて行か無いと、堅く名譽に掛けて誓つても宜いと父親に云つた。

所で、今は、その二千留の中で千二百留しきや残つて居無かつたのだ。だから、そのハアトの七には、千六百留の損失ばかりで無く、何うしても父親との約束を破らなければならぬやうになるか何うか、懸つて居た。沈んで行く心を以つて、ロストオフは、ドロオホフの手を見守りながら、思つた——

「さア、急いで、その骨牌を配つて呉れ、さうすれば、俺は帽子を取つて、馬車を驅つて、デニイソフや、ナタアシヤや、ソオニヤと一緒に晩飯を食ひにと家へ歸るんだ、そして、最早決して二度と骨牌を手に取り無い」

その刹那に、自分の家庭生活、ベエテイヤとの戯談、ソオニヤとの談話、ナタアシヤとの二聲曲、父親とのピケエの勝負のみならず、ボヅアルスキイの家の裡の自分の寢心の好い寢床さへもが、それが悉皆長い昔に、善い物だと氣の付かぬうちに、無くなつて了まつた或る幸福であつたかのやうに思はれた程の、現然とした態で、輝いた態で、如何にも面白さうな態で、自分の想像の前に立ちあがつた。

彼は、ハアトの七を左方へでは無く右へ導いて行く馬鹿々々しい機會が、今新たな了解力で感じられ、そして新たな光輝で見られた、總ての幸福を自分の身體から奪ひ、知られ無い、何とも極まら無い不幸の奈落へ自分を投げ込み得るものとは、何うしても、呑み込め無かつた。左様な筈は無い、が、それでも、彼がドロオホフの手の動きを待つたのは、恐怖の戦慄を以つてあつた。襯衣の袖口の下から毛の見える骨太な赤味が、つたその手が、骨牌の束を下に置き、彼に渡された杯と烟管を取り上げた。

「では、君は僕と勝負するのが恐く無いんだね？」と、ドロオホフは繰り返した、そして、面白い物語を始めやうとするかのやうに、骨牌を下に置いて、椅子の背に凭たれ、笑顔で徐かに云ひ始めた。

「左様、諸君、僕が骨牌で甚く狡いことを爲るといふ噂が、莫斯科ちうに廣がつてるといふことなんだか

ら、僕に對する時は少し用心なさるやうに申して置きます」

「さア、配ばり給へ」と、ロストオフが云つた。

「うゝん、莫斯科の金棒引奴等」と、ドロオホフは云つた、そして、笑顔で骨牌を取り上げた。

「ああ」と、ロストオフは殆ど金切り聲を立て、兩手を舉げて、髪を攫んだ。彼が要した七は、束の裡の最初の骨牌で、一番上の所にあつたのだ。彼は、拂ふことの能き無い程負けて了まつた。

「何しろ、君の泳げる深處から前方へ、泳ぎ出しては不可よ」と、ロストオフをジロリと見てドロオホフは云つた、そして、彼は自分の爲る事を續けた。

(十四)

一時間半経た無いうちに、勝負に加はつて居た人々の大部分は、最早各自の勝負には本氣に身を入れて居無かつた。

勝負の全興味がロストオフの上に集中された。唯だ千六百留ばかりの負では無く、今は、彼の負として數字の長い列が記されて居て、彼は、それが一萬五千留まで上ほつて居たと漠然と想像しては居たが、計算を爲たのは一萬までであつた。實際は、それは最早二萬留を越して居たのだ。

ドロオホフは、最早、他人の物語も聞かず、自分でも物語を爲無かつた。彼はロストオフの手の有らゆる動作から眼を離さず、時々、自分の勝になつて居る數字を一寸々々と見量つて居た。彼は、その勝が四萬三千に達するまで勝負を續けやうと決心した。四十三は自分の年齢とソオニヤの年齢との合數であつたので、その數に極めたのであつた。

ロストオフは、勝負の數字が書いてあり、骨牌が散らばつて居る、酒で汚れた卓子の前で、兩手で頬杖を突いて坐つて居た。一つの物苦しい感覺が決して彼を離れ無かつた、襯衣の袖口の下から毛の見える、その骨太な赤味が、つた手、彼が愛すると同時に憎んで居たその手が、その思ひのまゝに彼を何うにでも爲るこゝとが能きるのであつた。

「六百留、ポイント、角、九、最早取り返さうなんぞつて思ひも寄らんことだ……で、家に居たら嘸ぞ心持が好いだらうなア……兵卒、二倍か、同等か、左様な筈があるものか……で、何故、彼の男が俺に此様なことを爲るだらうなア……」と、ロストオフは考へくして居た。

時々、彼は骨牌の上に大きい賭を置いた、が、ドロオホフはそれを拒んで、自分の方から賭額を極めた。ニコライアイは、その言葉に従つた、そして、或る時は、アムシテテンの橋で砲火の下で祈つたやうに、神に祈つて居た。次ぎには、自分が卓子の下の揉潰した物の積層の裡から最初に拾ひあける骨牌が自分を助けて呉れるかも知れぬといふ僥倖を頼みにして、自分の運を試みした、それから、自分の上衣の組紐の列を計算し、そして、その數の骨牌へ負の全額を賭けて試た、それから、勝負を爲て居る他の人々の方を援助を請ふやうに見るとか、今は全然冷々として、ロストオフの心の裡を過ぎつゝあることを見抜かうとして居るドロオホフの顔を見詰るとか、爲た。

「この男は、無論、この負が俺に取つて何様なことに爲るのか知つて居るんだ。確に、奴が、俺を破滅させやうと思ふ氣遣ひは無い筈なんだがなア？ なに、俺の信友だつたもの。俺は奴を愛して居たんだ……が、尤も、これは奴が悪いんぢやア無い、運が悉皆彼方へ向いてるんなら奴が何う爲やうがあるものか？ で、又、俺が悪いんでも無いんだ」と、ロストオフは自分に向つて云ひ通した。「俺は今まで間違つたことを爲た

ことは一遍も無いんだ。誰一人殺しはせず、傷つけはせず、他人に悪いことが起れと、祈つたことも無いんだ、何うしても。所で、この恐ろしい災難は何うしたんだらう？。そして何時これが始まつたのか知ら？。ホンの少時間前に、俺は、百留も勝つて、母上様の命名日の祝に彼の小さい箱でも買つて、家へ歸へる位の積りでこの卓子の所へ来たんだ。俺は眞個に幸福で、自由で、快活だつたんだ。で、俺は、その時は、何れ程自分が幸福であつたか、寸毫も知ら無かつた。何時、さういふ幸福な状態が無くなつて了まつたらう、で、何時斯ういふ新な、恐ろしい事態が始まつたらう？。さういふ變動の外面の表徴は何だつたらう。俺はこの卓子のこの同なじ場所に矢張り坐り續けて居て、そして、同なじやうに、骨牌を拾ひ上げて、それを前へ出し、彼の器用な、骨太な手を見守つて居るんだ。何時、此様なことがやつて来たのか、何がやつて来たのか知ら？。俺は強くつて、健康なんだ。尙且前と同なじなんだ、同なじ場所に居るんだ。いゝや、此様なことの有る筈が無いんだ。確かに、これは何んでも無く終はつて了まふだらう」

部屋は熱く無かつたのに、彼は、眞赤に爲つて、汗をかいて居た。そして、彼の顔は、見る眼に苦しうで、可憐であつた。落着いて居るやうに見せ掛けやうと爲る努力で、尙一層さう見えたのだ。

負の数は四萬三千といふ不吉な額に達した。ロストオフは最早、丁度その時、彼の負として記るされた三千に對して二倍か相殺かに賭けやうと思つた骨牌を用意して居た、が、ドロオホフは、卓子の上へ骨牌の束を叩き付け、それを推し遣り、チョコクを取つて、瞭乎りした強い筆蹟で、ロストオフの負の總額を書き記し始めた、そして、それを了まふと、チョコクを折つた。

「晚餐、晚餐時だ。それに、ジブシイども、やつて来た」で、成る程、幾人かの赤黒い男や女が、ジブシイの訛で何か云ひながら、寒い外部から入つて来た。ニコライは、最早萬事休したことを覺つた、が、彼

は、無頓着な聲で云つた。

「え、最早終局かい？。僕は此様な善い小さい骨牌を用意しといたのに」

自分の興味を主に引いて居るのは、勝負その物であつたかのやうに、ロストオフは云つた。

「萬事休したんだ、最早いよく爲方が無い」と、ロストオフは思つた。「最早、頭へ彈丸を打ち込むことばかりが、自分に取つては残つてるのみだ」と、同時に、彼は、快活な聲で斯う云つて居た――

「さア、今唯つた一枚」

「宜しい」と、計算を終りながら、ドロオホフが答へた。「宜しい。二十留……さア」と、彼は云つて、四萬三千といふ纏まつた額を超して出て居る端数の二十一といふ数字を指さした、で、骨牌の束を取つて、配けやうと身構へた、ロストオフは、云はれるまゝに、骨牌の隅を下した、そして、彼が書かうと思つて居た八千の代りに、二十一と記した。

「僕は最早何うでも宜いんだ」と、彼は云つた。「唯だ、君がその十に勝つか、それとも僕に勝たして呉れるか、それを見るのが面白いんだよ」

ドロオホフは念を入れて配け始めた。あゝ、ロストオフは、その刹那、短かい指の、襯衣の下から見える毛のあるその赤か味のある手、自分を身動きも能き無いやうに攫んで居るその手をば、如何に憎らしく思つたことであらう……十は負かされ無かつた。

「君の負が四萬三千です、伯爵」と、ドロオホフは、云つた、そして、伸を爲ながら、卓子から起つた。

「斯う長く坐つて居ちやア疲れて堪えらんものだ」

「左様、僕も疲れた」と、ロストオフが云つた。

ドロオホフは、ロストオフに取つては、この事件を冗談らしく扱ふべきでは無いと彼に警告するかのやうに、ロストオフの言語を直ぐ遮ぎつた。

「何時金銭が貰へますね、伯爵」

ロストオフはカッと顔を赤くして、ドロオホフを他の部屋へ引張つて行つた。

「僕は全額一遍には拂へ無いんだ、何うか、證文に爲るとして呉れ給へな」と、彼は云つた。

「ねえ、ロストオフ」と、ドロオホフは、晴々と微笑み、そして、ロストオフの眼を眞正面に見詰めながら、云つて、「君は「戀の運が好ければ、骨牌の運が悪く悪い」といふ俚諺を知つて居るだらうね。君の従妹は君と戀中だね。僕は知つて居るぜ」

「あゝ、斯ういふ風に、この男の爲めに自分の運命を握られるのは、何様な人でも恐ろしくつて堪まるまい」と、ロストオフは思つた。彼は、この負けの事を知らせたら、父親や母親が何れ程吃驚するか知つて居た。彼は、この事件が事無く結了してしまふのであつたら何れ程幸福だかを知つた、そして、ドロオホフは、彼をこの恥辱と悲痛から解放することが能きることを知つて居て、彼を猫が鼠に對するやうに弄そばうとして爲て居るのだと感じた。

「君の従妹……」と、ドロオホフは云ひ掛けた、が、ニコライは、彼を直ぐ黙らした。

「僕の従妹はこの事件に何の關係も無いんだ、従つて、彼女の事を云ふ必要は寸毫も無い」と、彼は、凄い権幕で、叫んだ。

「では、何時渡して呉れるね？」と、ドロオホフは尋いた。

「明日」と、ロストオフは云つて、部屋を出た。

(十五)

「明日」と云つて、平氣な調子を失は無いやうに爲て居るのは、難づかしくは無かつた、が、單獨で家へ歸り着き、妹たちや、弟や、父親や、母親に顔を合はせ、白状して、名譽に懸けて堅く誓つた上は最早自分には貰らふ権利の少しも無い金銭を出して呉れと頼むのは、實に恐ろしい堪へ難いことであつた。

家では、未だ誰も床へは入つて居無かつた。若い連中は劇場から歸つて來てから、晩食を爲た、そして、今は翼琴の周圍に集まつて居た。ニコライは、廣室に入るや否や、その冬はその家内を支配して居た、そして、今は、ドロオホフの結婚申込やイオゲルの舞踏會以來、暴風雨の前の空氣のやうに、ソオニヤとナタアシャの周圍に一層濃密に爲つて居た戀愛の詩的な雰圍氣に、全然取り圍れたのを感じた。劇場で着て居た水淺黄の衣服のまゝのソオニヤとナタアシャは、可愛らしく、又さうであることを自覺して、嬉しさうで、微笑みながら、翼琴の傍に立つて居た。ヴェエラは、客室でシインシンと西洋碁をやつて居た。老伯爵夫人は、子息と夫の歸つて來るのを待ちながら、家内の一人であつた年取つた婦人とベエシエンスの勝負を爲て居た。デニイソフは、ピカ／＼した眼で、ボオ／＼と逆立たせた髪で、隻脚を後へ引いて、翼琴に掛つて居た。彼は短かい指で、絃を撃つて居た、眼をクルリ／＼させて、小さい、皺喰れた、併し眞實の聲で、彼の自作の「蠱惑者」といふ詩を歌ひながら、それに樂器を合はせやうと骨折つて居た。

「蠱惑者よ、如何なる隠れたる火か、

わが捨てられたる七絃琴にわれを惹くかを告げよ。

何の歡喜か、わが指を徐かに慄かすや、
何の情熱か、わが心を燃え立たしむるや」

彼は、熱烈な聲で諠つた。彼の黒い瑪瑙のやうな眼が、おぢけた、併し嬉しがつて居るナタアシャに向つてギラ付いて居た。

「巧妙、傑い」と、ナタアシャは叫んだ。「もう一對聯」と、ニコライの入つて来たのには氣が付かずに、ナタアシャは云つた。

「皆なの方は前と寸毫も變ら無いな」と、ニコライは思つて、客室を覗いた、其所では、ヴェエラと、老婦人を相手にベエシエンスをやつて居る母親とが見えた。

「あら、ニコオレンカが歸つて来た」。ナタアシャは、ニコライの傍へ駆け寄つた。「父上様はお家か？」と、彼は尋いた。

「歸つて来てくださつて、私眞個に嬉しいことよ」と、ナタアシャはニコライの問には答へ無いで、云つた。「衆皆で眞個に面白いことをやつてるのよ。ヴァシイリ・ドミトリイチが私の爲めに今日居てくださるのよ、貴下知つて？」

「いゝえ、父上様はまだ歸つてらしや無いわ」と、ソオニヤが答へた。

「コオリヤ、お前其所に居るの？此所へおいでよ、お前」と、客室から伯爵夫人の聲が云つた。ニコライは母親の所へ行つて、その手に接吻し、母親の卓子の所に坐つて、黙まつて、骨牌を配つて居る母親の手を見守り始めた。廣室からは、哄笑の、ナタアシャに何だか爲ると勸めて居る賑かな聲々とが聞こえ通した。

「あゝ、結構、結構ですなア」と、デニイソフが叫んだ。「さア、最早泣いたつて駄目です、今度こそ貴女がゴンドラ歌を諠ふ番なんだ、何卒願ひます」

伯爵夫人は、黙まり込んで居る子を返つた。

「何うかお爲かい？」と、母親はニコライに尋いた。

「イヤ、何でもありません」と、彼は、同なじ問を尋き通しにされるのに倦厭したとでも云ひさうに、云つた。「父上様は直きお歸りでせうかね？」

「えゝ、左様だと思ふんだがね」

「衆皆は全然前のまゝだ。誰も知つちやア居無いんだな。俺は自分を何うしたら宜いんだらう？」と、ニコライは思つた、そして、翼琴の在る廣室へ歸つた。

ソオニヤは翼琴の所に坐つて、デニイソフが大好のゴンドラ歌の前弾を弾いて居た。ナタアシャは諠はうとして居た。デニイソフは、熱情の籠つた眼でナタアシャを見守つて居た。

ニコライは部室の裡を彼方此方と歩るき始めた。

「何うして、彼女は諠ひ度いと思ふんだらうな？彼女に何が諠へるだらう？そして、それが其様なに嬉しい譯は寸毫も有りやアし無い」とニコライは思つた。

ソオニヤは前弾の最初の絃を撃つた。

「やア、俺は破滅したんだ。俺は名譽の無くなつた人間なんだ。腦を彈丸で打ち抜く、それより外に最早俺の能きことは一も無い、諠どころぢやア無い」と、彼は思つた。「家出を爲るとしやうか？だが、何處へ行く？最早何うでも宜いんだ。衆皆勝手に諠へ」

尙且部屋を歩き廻りながら、ニコライアイは、彼方の眼を避けて、デニイソフや娘たちを悲しさに一寸々々見た。

「ニコオレンカ、何う爲たの？」と、ソオニヤの眼が、凝乎とニコライアイを見ながら、尋いた。ソオニヤは直ぐ何事かニコライアイの身に起つたことを見た。

ニコライアイは、ソオニヤに背中を向けて了まつた。ナタアシャも、その速い本能で兄の心境を直ぐ嗅ぎ付けた。ナタアシャはニコライアイの様子に気が付いた、が、自分がその時は餘り陽氣であり、悲哀や、憂鬱や、誹謗から、餘り遠い心持であつたものだから、故意と（若い人々が往々やるやうに）自分自身を欺むいて了まつた。

「いゝえ、私この所は、何様な人の悲哀でも、それに同情して、自分の愉快を破して了まふことは何うしても能き無い程嬉れしい氣持で居るんだもの」と、ナタアシャは感じた、そして、自分に向かつて、云つた。「いゝえ、大抵私の思ひ違ひなんだらう、彼の人は、丁度私と同じやうに、幸福なのに違ひ無いわ」

「さア、ソオニヤ」と、ナタアシャは云つて、自分には反響が一番宜いと思はれた部室の眞正の中央へと歩いて行つた。頭を上げ、兩腕を、舞踏者がやる様に、生命の無いやうにダラリとさせ、踵から爪先へと力強く跳ね上げて、ナタアシャは、部室の中央へと歩いて行つて、靜乎と立つた。

「ご覧よ、私は此所に居ますよ」と、ナタアシャは、デニイソフが自分の一舉一動を後つけて居る熱心な凝視に答へて、云つて居るかのやうであつた。

「何を彼様な面白く思へるんだらうなア」と、ニコライアイは妹を見ながら訝かつた。「退屈したり恥かしく思つたりし無いのは、何故だらう」

ナタアシャは、最初の調子を取つた。咽喉が膨れた。胸が高まつた。本氣な表情が顔へ出て来た。ナタアシャは、その刹那、誰のことも、何事も思つて居無かつた、そして、その微笑む口から、調子——誰でもが同なじ音程で出し得、時の同なじ長さの間續け得るが、併し、千度聞いても、聞く吾々は平氣で居られ、千一度目に、吾々の胸を慄かせて泣かしむるといふやうな調子——が注ぎ出た。

ナタアシャは、その冬、取り分け、デニイソフがナタアシャの謠を熱心に賞めてから此方、本氣に謠を稽古したのであつた。ナタアシャは、最早小兒のやうに謠ふのでは無かつた。最早今ではその謠には、前には一寸と見えて居た滑稽な小兒らしい努力は無くなつて居た。が、未だ巧くは謠へ無かつた、左様ナタアシャを聞いた音楽の聞巧者たちは云つた。「まだ稽古が足り無い、善い聲だ、稽古を爲無ければ不可」と誰も彼も云つた。が、それは、ナタアシャの聲が、止んでから餘程経つてから何時も云はれたことであつた。その稽古の足り無い聲が、不規則な呼吸で、無理やりの抑揚で、響いて居る間は、聞巧者たちでさへ、何にも云は無かつた、そして、唯だその稽古の足り無い聲を樂しみ、もう一度それを聞き度いと思ふのみであつた。ナタアシャの聲は、生れたまゝの純精や、その能力の無知や、骨折ら無い天鵝絨のやうな和かさを持つて居て、それが、謠に技巧の無いこと、餘り密接に結び着いて居るので、その聲では、それを悪くすること無しには、何の點も變へやうが無いやうに見えた位であつた。

「何うしたんだらう」と、ニコライアイは、ナタアシャの聲を聞きながら、眼を廣く見開けて思つた。「彼女は何うしたんだらうなア？。實に巧く今日は謠ふぢや無いか」と、彼は思つた。と不意に、彼に取つての全世界が、次ぎの調子、次ぎの節に對する待ち設けに集中して了まつた、そして、その世界ぢうの有らゆる物が三つの動機に分られて見えた。「オ、ミオ・クルレ・アフツトオ……一、二、三……一……オ、ミオ・ク

ルデレ・アフツトオ……一、二、三……一。うゝん、吾々のこの無意味な人生」と、ニコライは思った。「總てのこと、この災厄も、金銭も、ドロオホフも、憤怒も、面目も——悉皆愚なことだ……そして、これこそ真正のことなんだ……さア、ナタアシャ、さア、可愛い子や、さア、わが娘……何う彼のシイを諡ふだらうな？。あ、巧い、有り難いぞ」そして、自分が諡つて居るとは氣が付かずに、彼自身がナタアシャの高い調子を扶ける爲めに一寸の間諡つて居た。

「やア、實に善い。俺は彼の調子を取つたか知らなア？。實に立派だ」と、彼は思つた。

あゝ、何様なにその調子が震へたことであらう、そして、何様なに、ロストオフの心の裡の善い或る物が又震へ始めたことであらう、そして、その或る物は、此の世の何物からも離れ、此の世の有らゆる物より上にあるのであつた。骨牌の負が何だ、ドロオホフなどが何だ、その外、名譽が何だ……悉皆馬鹿々々しいことなんだ。人は、人殺しもするが宜い、盗みもするが宜い、それで、幸福で居られるんだ……

(十六)

ロストオフが、その日程それほど音楽を面白がつたことは、此所暫時随分長く無いことであつた。が、ナタアシャがゴンドラ歌を終はつて了まふや否や、現實がロストオフの心に又押し込んで来た。何にも云はずに彼は出て行き、そして、自分の部室へと階下へ行つた。十五分経つと、老伯爵が機嫌よく、俱樂部で満足して、歸つて来た。ニコライは、老伯爵の歸つた音を聞いて、逢ひに入つて行つた。

「やア、面白かつたかね？」と、イリヤ・アンドレエヴィチは、子息に向つて、揚々と嬉しさうに微笑みながら、云つた。ニコライは「えゝ」と云はうと爲た。が、云へ無かつた。彼は殆ど泣きだす所であつ

た。伯爵は煙管を吸ひ付けて居た。で、子息の狀態に氣が付か無かつた。

「うゝん、何うしても外に爲やうは無い」と、ニコライは、それが最初、又それを最後として、思つた。で、唐突に、彼は、市へ行く馬車を借りる相談で、もあるかのやうに、飽くまで偶然思ひ出したやうな調子で——其様な調子で云つたのを、尙更自分では陋劣に感じはしたが——斯う云つた。

「父上様、僕は用談があつて此所へ来たんです、なアに下らんことなんで、もう少しで忘れちまう所だつた。僕少し金銭が欲しいんです」

「そりやア不可」と、折から取り分け上機嫌であつた父親は云つた。「最早少しも出来んと云つて置いたでは無いか。多額入用のかい？」

「非常に多額」と、ニコライは、顔を赤め、その後随分長い間自分を容すことが能き無かつたやうな間の抜けた笑顔を爲ながら、云つた。「僕は、骨牌で少許ばかり負けたんです、畢竟、可なり、實は、非常に、四萬三千」

「何？誰に？……貴様冗談だらう」と、伯爵は、年寄りが赤くなる通りに、頸や頭の後部までずつと卒中のやうな赤さで、眞赤に爲つて、叫んだ。

「明日拂ふ約束なんです」

「やア」……と、伯爵は腕を投げ上げながら、云つた、そして、長椅子の上へグダグダと力無く落ちた。「已を得無いんです。誰にでも有ることなんだから」と、子息は、平氣な何でも無い調子で云つた、が、それと同時に、心の裡では、自分をば、生涯掛かつても自分の罪は賅へ無い卑劣な悪黨だと感じて居るのであつた。彼は、無頓着な風で、而も、不作法な風ですら、父親に、誰にも有ることだと云つて居ながらも、

父親の手に接吻し、跪つて、父親の宥免を請ひ度いと思つた。

伯爵イリヤ・アンドレーヴィイチは、子息から左様いふ言語を聞くといふと、眼を落した、そして、何物かを探しても爲るかのやうに、忙がしうに動き始めた。

「左様だ、左様だ」と彼は云ひ出して、「難づかしいだらうと思ふ、調達へるのは難づかしい……誰にでも有ることだといふんだな。左様だ、誰にでも有ることなんだ……」

伯爵は、子息の顔にジロリと一眼を呉れたきりで、部屋から歩み出た……ニコライは、一旦は不承知を唱へられることゝ覺悟して居た。で、斯うならうとは豫期して居無かつた。

「父上様。父……上様」と彼は、父親の後から、歎歎ながら、叫んだ。「宥してください」で、父親の手を緊然攫んで、それを自分の唇へ押し付けた、そして、泣き出した。

父親と子息が斯ういふ會見を爲て居る間に、一方では、重大な度は決してそれに劣ら無い會見が今一つ、母親と娘との間に起つて居た。ナタアシャは、非常に昂奮して、母親の所へ駆け付けた。

「母上様……。母上様……。彼の人が私に……」

「お前さんに何を爲たのかい？」

「彼の人爲たの、申込みを爲たのよ。母上様。母上様」と、ナタアシャは叫び通した。

伯爵夫人は自分の耳を信じ得られ無かつた。デニソフが求婚を爲た……誰に？……ホンの此頃人形を玩具に爲ることを止めたばかりの、そして、未だ稽古ごと最中の、この少女のナタアシャに向つてなのだ。

「ナタアシャ、馬鹿なことを云ふのも大抵におしなさいよ」と、伯爵夫人は、それが冗談であれかしと思ひながら、云つた。

「あら、馬鹿なことだなんて、眞實なんですよ」と、ナタアシャは、憤然となつて、云つた。「私何う爲れば宜いか尋きに來たんだわ、だのに、母上様つてば、馬鹿なこと」だなんて仰しやるんだもの……」

伯爵夫人は肩を揺つた。

「モシウ・デニソフがお前さんに求婚を爲たのが眞實なら、そんなら、貴下は痴漢だと云つてお遣りなさい、唯だそれだけで宜いんですよ」

「いゝえ、彼の人は痴漢ぢやありません」と、ナタアシャは、憤然となつて、眞面目に云つた。

「では、お前さん何う爲度いんです？。お前さんたちは、この節は、悉皆戀愛を爲てるやうなんですわ。あゝ、左様、お前さん彼の人に戀しておいでのなら、嫁ついたら宜いでせう」と、伯爵夫人は、腹立しく笑ひながら云つて、「何うも、お目でたう」

「いゝえ、母上様、私彼の人に戀してゐるんぢやア無いわ。彼の人に戀してゐるんぢやア無いと思ふわ」

「さう、では、彼の人に左様お云ひなさい」

「母上様、貴女怒つてらつしやるのね？。怒ら無いでね、母上様、私が悪るいんぢや無いわ、私が悪るくつて？」

「いゝえ、けども、ねえ、何なら、私が行つて、彼の方に左様云つてあげやうか」と、伯爵夫人は、微笑みながら、云つた。

「いゝえ、私自分で云ふわよ、唯だ何う云つて宜いんだか教へてくださいな。母上様には、直ぐ何様な智慧でも出るんだから」と、ナタアシャは、母親の笑顔に答へながら、云ひ添へた。「彼の人私にそれを云つた態様つたら、母上様に見て頂きたかつた位よ。私知つてるわ、彼の人は、それを云ふ積りぢや無かつたの、

でも、ふいと云つて了まつたんだわ』

『さう、何にしても、お前さんは断つて了まは無ければいけません』

『いゝえ、それはいけ無いの。眞個に氣の毒なんですもの。眞個に善い人なんですもの』

『あゝ、さう、では、求婚を承知なさい。お前さんは、最早今は丁度嫁つき時なんだらうからね』と母親は、佛然して、皮肉に云つた。

『いゝえ、母上様、でも、私氣の毒で爲方が無いんですもの。何う云つたら宜いか、私知ら無いんだわ』

『ではね、お前さんは何にも云ふには及びませんよ。私が自分で行つて、彼の人に話しますからね』と、伯爵夫人は、誰にてもあれ、この小さいナタアシヤを成人として扱かふなどといふのは甚だ怪しからんと、憤然となつて、云つた。

『いゝえ、それは、何うしてもいけ無いわ、私自分で行くわよ、母上様戸口で聞いてくださいます』と、ナタアシヤは、客室を横断つて廣室へ駆けて行つた。其所では、デニイソフが、手の間に顔を埋めて、尙且翼琴の傍の椅子に坐つて居た。彼は、ナタアシヤの軽い足音を聞くと、跳び起つた。

『ナタリイ』と、彼は、ナタアシヤの方へと速歩で動きながら、云つた。『私の運命を極めてください。それは、貴嬢の手の裡にあるんだから』

『ヴァシイリ・ドミトリイチ、私貴下に氣の毒で堪え無いのよ……いゝえ、でも、貴下は眞個に善い人よ……でも、爲やうが無いの……それは……だけでも、私今のやうに貴下を何時までも愛してゐるわよ』

デニイソフは、ナタアシヤの上へ身を屈めた、ナタアシヤは、何とも解から無い異様な音を聞いた。ナタアシヤは、デニイソフのクシヤ／＼に紆れた縮毛の黒い頭に接吻した。途端に二人は伯爵夫人の袴の忙が

しさうな衣擦の音を聞いた。伯爵夫人は二人の所へやつて来た。

『ヴァシイリ・ドミトリイチ、ご親切なお申込みをなすつて、家の面目と思ひまして、お禮を申します』と、伯爵夫人は云ひ憎くさうな聲で云つた、が、デニイソフにはそれが嚴酷なやうに響いた。『ですが、娘はまだ眞個に弱齡うございます、ですから、貴下は子息のお朋友ではありませんし、先づ私に仰しやつてくださつたらばと思ふんでございますよ。さうでしたら、斯ういふ風にお断りし無ければなら無いやうにはなりませんでしたらうと思ひますのですのにねえ』

『伯爵夫人……』と、デニイソフは、伏目になつて、面目無さうな顔で、云つた。彼は、その後を云はうと爲た、そして、啞つた。

ナタアシヤは、斯様な可憐な状態になつたデニイソフを平氣では見て居られ無かつた。ナタアシヤは聲高く泣き始めた。

『伯爵夫人、私のやりやうが悪うございしました』と、デニイソフは苦しさうな聲で續けて、『私は、實際生命を二度さしあけても宜いと思ふ位、貴女のお娘御と、貴女の御一家全體を崇めて居るんです……』。デニイソフは、伯爵夫人を見た、そして、伯爵夫人の嚴づかしい顔に氣が付いた……『では、左様なら、伯爵夫人』と、彼は云つて、伯爵夫人の手に接吻し、そして、ナタアシヤをば見ずに、速い決然とした歩みで、部屋を出て行つた。

次の日、ロストオフは、デニイソフが莫斯科に最早一日も居ることを承知し無かつたので、彼を見送つた。彼の莫斯科の朋友は皆なで、ジブシイで彼の爲めに送別會を爲た、そして、彼は、何う人々に自分が雪

機に乗せられたのか、通つた最初の三驛亭が何様なであつたのか、一向覚えが無かつた。

デニイソフが発足してから、ロストオフは、伯爵が金銭を一遍に調達することが能き無かつたので、負債を返へす爲めの金銭の出来るのを待ちながら、もう二週間を莫斯科で送つた。彼は、殆ど家の外へは出無かつた、そして、若い娘たちの部屋で、大抵日を暮らした。

ソオニヤは、ますます彼に對して、愛情深く、強く心を寄せて来た。ソオニヤは、骨牌で彼が負けたことは、それが爲めにソオニヤが彼をますます愛するやうに爲つた一つの功績であつたのだといふことを、彼に知らせやうとして居るやうに見えた。が、今は、ニコライは、ソオニヤに愛せられる價値の無い、恥づかしい身だと、自分自身を見て居た。

彼は、娘たちの爲めに、譜を寫し、そして、娘たちの書畫帖に詩を書いてやつた。で、到頭、四萬三千留全部を拂つて了まつて、それに對するドロオホフの受取書を取つてから、知人の誰にも暇乞を爲すに、十一月の末に莫斯科を發足した、そして、最早既に波蘭に行つて居た彼の聯隊に追ひ付いた。

第五章

(一)

妻との會見の後で、ピエールは彼得堡に向けて出發した。トルゾック驛亭では、馬が一匹も無かつたか、驛長がピエールの爲めに馬を出さ無かつたか、であつた。彼は待た無ければなら無かつた。戸外の服装を脱ぎもせず、彼は、圓い卓子の前面の柔皮の長椅子の上に横になり、その卓子の上へ、厚い外靴を穿いた大きい兩足を載せて、考に沈んだ。

「お革函を持つて参りませうか？。寢床をこしらへませうか。お茶を召しあがりますか？」と、侍僕は尋き通した。

ピエールは、何の返答も爲無かつた。彼は何にも聞かず、何にも云は無かつたのだ。彼はその前の驛亭を出てから此方、考に沈んで居た、そして、今も尙且同なじ事——自分の周囲を過ぎて行く事件に氣が付か無かつた位それ程重大な何事か——を考へ續けて居た。自分が彼得堡へ早晚達するか何うか、この驛亭に休む場所があるか何うか、其様なことを氣に掛ける所では無く、今彼の心に一杯になつて居る考に比べれば、彼がその驛亭で二三時間費さうが、それからの一生涯をすつと送らうが、其様なことは全然何うでも宜いことであつたのだ。

驛長や、その女房や、侍僕や、トルゾック刺繡を賣る百姓女が、部屋へ来て、いろいろ用を尋いた。

舉げた足の位置も變へずに、ピエールは、眼鏡越しにさういふ人々を見詰めた、そして、自分の心を占領して居る問題を解決せずに、彼等は、何が爲度いのであらう、何うして生きて行くことが能きものだらうと、不思議で堪ら無かつた。さういふ同様な問題は、彼が決闘の後で、ソコルニキイから歸つて来て、彼の最初の苦しい眠られ無い一夜を明かしてから以來、何時も彼の心を領して居たのであつた。が、今、彼の旅行の寂寥さの裡で、さういふ問題は、一層強い力で彼を攫んだ。何様なことを考へ始めても、彼は、彼に取つては答へることの能き無い、又、それから遁れることの能き無いその同様な問題へ歸つて行くのであつた。それは、宛然、彼の全生活の據つて居る彼の腦の裡の主な螺旋が緩んだとでもいひさうであつた。螺旋は、前の方にも、後の方にも、少しも動くのでは無かつた、が、それでも、何にも掛らずに、何時までも同様な溝の裡で轉つて居た、そして、それを止めやうは何うしても無かつた。

驛長が入つて来て、閣下に唯つた二時間程待つて頂き度い、さうすれば、(何様なことがあつても) 特別郵便用の馬を閣下に提供するから、何うぞそれまで待つて頂き度いと、恭しく願ひ始めた。驛長は、紛う方も無く、旅客から餘計茶代を貰ひ度いばかりに、虚言を吐いて居るのであつた。

「これは、善いことだらうか、悪いことだらうか？」と、ピエールは怪んだ。「俺には善いが、次の旅客には悪い、所で、驛長自身に取つては、彼は食う物が何も無いんだから、斯う爲るのは己むを得無いことなんだ。驛長は、或る將校がその爲めに彼を殴つたと云つた。で、その將校は、急ぎ旅行であつたもんだから、彼を殴つたんだ。所で、俺は自分が害を受けたと思つたのでドロオホフを射撃したんだ。路易十六世は、人民に罪人だと考へられたので、處刑された。が、それから一年経つと、王を裁判した者ども、亦何事かの爲めに殺されて了まつた。何ういふことが悪いのか？ 何ういふことが善いのか？ 人は何ういふものを愛さ

無ければなら無いのか何ういふものを憎ま無ければなら無いのか？ 人生は何の爲だ、そして、俺は何なんだ？ 人生とは何だ？ 死とは何だ？ 何ういふ力が總て其様なものを制馭するのか？」と、彼は自分自身に向つて尋いた。さういふ疑問の一つに對して、その何れにも寸毫も答にならぬ一つの不合理的返答の外、何の答も無かつた。

その返答とは「人は死ぬ、それで、何も彼も終局なんだ。人は死ぬ、で、何も彼も解かつて了まふか、尋くことが止んで了まふかなんだ」と、いふのだ。

トルゾックの行商女が、泣くやうな聲で、商品、殊に幾足かの野羊皮の上靴を買は無いかと勧めた。

「俺には何う使つて宜いか、持扱かつて居る何萬だか分からぬ金銭がある、それなのに、この女の方は、破けた外套を着て、俺をオゾく見ながら立つて居るんだ」と、ピエールは思つた。「所で、この女は何の爲めに金銭が欲しいんだらう？。その金銭が、この女に、幸福や、心の平和を、髪の毛一本の量だけでも與へるのちやアあるまいし。世の中に、この女や俺を害悪や死の奴隷にすることをもう少し減して呉れるものが、何でも宜いから、有るだらうか？。有らぬ物を終局に爲てしまふ、そして、今日来るか、明日来るか、必然来るには極まつて居る——永遠に比らべると、一刹那と同様である——死なんだ」

で、再、彼は、何にも嚙み込ま無い螺旋を廻した、そして、螺旋は尙且同様な場所を廻つて居た。

彼の従僕が、手紙の形式で書いた夫人シユウザの小説の半分切つた書を彼に渡した。彼は、「アメリカ・ド・マンズフェルド」といふ女の苦痛や、道徳的な努力を讀み始めた。「所で、何の爲めにこの女は自分の誘惑者に反抗する努力を爲たんだらう？」と、彼は思つて、「この女はこの男を愛して居るぢやア無いか。神は、自分の

意に協は無い衝動を、この女の心に置く筈は無いんだ。俺の妻——であつた女——は反抗の努力を爲無かつた。で、それが然るべきことであつたんだらう。何にも發見され無いんだ」と、ピエールは再自分自身に向つて云つて、「何にも發明され無いんだ。われ／＼にはわれ／＼が何にも知らぬことが分つてただけなんだ。で、それが人間の智慧のドン詰りなんだ」

彼自身の心の裡や、彼の周囲の有らゆる物が、混亂した、無意味な、可厭なものとして、彼の心に響いた。が、彼の周囲の有らゆる物を厭ふその心の裡にさへ、ピエールは、一種見せびらかすやうな満足を見出したのであつた。

「まことに恐れ入りますが、このお方に少々お席をお譲りくださいませやうに、閣下にお願ひ致します」と、馬の無い爲めに立往生になつてしまつた一人の旅客を案内して入つて来て、驛長が云つた。旅客は、何とも極まら無い灰色のギラ／＼する眼に被さつて居る白い睫毛のある、ガツシリした、四角な肩の、黄色い皺くちやの老人であつた。

ピエールは、卓子から足を下し、起ちあがつて、自分の爲めに整へられて居た寢床の上に臥に行つて、新來の人を時々ジロ／＼見た、が、その人は、ピエールをば見ずに、不機嫌さうな疲れた風で、自分の従僕に手傳はせて、面倒臭さうに、上被の物を脱いで居た。

旅客は、やがて、南京木綿の裏の古ほけた羊皮の外套で、瘠せた骨立つた脚にフェルトの長靴を穿いた服装になつて、長椅子に坐り、そして、極く大きい、額の周囲の廣い、刈り付けた頭をその背に凭たせて、ベズウホフをジロ／＼見た。その瞥見の厳格な、一癖ありさうな、見抜くやうな表情が、ピエールに強い印象を與へた。彼は、旅客に話し掛け度くなつた。が、彼が、それに話し掛ける道路の間を準備した時には、旅客

は眼を瞑ぶつて、そして、指に、アダムの首を表はした印の彫つてある鐵の指輪を箝めて居た皺だらけの年取つた手を拱ぬいて居た。

彼はピリップとも動かずに坐つて居た。憩んで居るのか、で無くば、深い靜な冥想に耽つて居るのかであらうと、ピエールには思はれたのであつた。新客の従僕も又皺だらけの黄色い老人であつた。彼は口鬚も、顎髯も無かつた、それは、剃つて居たのでは無く、確に、其様なものは一度も生え無かつたからであつた。年取つた従僕は、旅行箱を開け、茶の卓子を準備し、煮立つた沸茶器を持つて來ることなどに、一生懸命にかかつて居た。悉皆準備が能きるといふと、旅客は眼を開いて、卓子へと動き、そして、自分のとして茶を一

杯注ぎ、鬚の無い老人のとして今一杯に注ぎ、で、それをその老人に遣つた。

ピエールは、不安や、その旅客と談話を始めることの己を得ざること、避け難きことの念を感じ始めた。従僕は、自分の飲み終つた杯を伏せ、その側へ嚙り残しの砂糖を添へて、持ち戻して來た、そして、何か用は無いかと尋いた。

「何にも無い。書を取つて呉れ」と、旅客は云つた。従僕は、一冊の書を彼に渡した、それは、ピエールには、何か宗教が、つたもの、やうに思はれた。旅客はそれに讀み耽つて了まつた。ピエールは、彼を見て居た。不意に、旅客は、書を下に置いた、そして、それに印を入れて、それを閉ぢた。それから、眼を瞑ぶり、長椅子の背に兩腕を凭たせ、元の姿勢に戻つて了まつた。ピエールは彼を見詰めた、そして、老人が眼を開けて、決然とした、厳格な瞥見をピエールに向けた時に、眼をかはす間隙が無かつた。

ピエールは轉動した、そして、その瞥見から顔を背けやうと試みた、が、そのギラ／＼する年取つた眼は、その方へ彼を抵抗し難く引き付けるのであつた。

(二)

「貴下は伯爵へズウホフでいらつしやいませうな」と、その見知らぬ人は、高い緩然した聲で云つた。
 ビエールは、眼鏡越しに、黙まつて、不審さうに、さう云つた人を見た。
 「私は貴下のお噂を聞きました」と、見知らぬ人は續けて、「私は、貴下のお身に起つたこと、貴下のご不幸のことを聞きました」

その人は、「左様、不幸です、貴下はそれを何とお名づけにならうとも、私は、莫斯科で貴下のお身に起つたことは、不幸であることを私は知つて居ります」と、云はうとするかのやうに、宛然不幸といふ語をそれに圍點でも打つかのやうに云つた。

「實にお氣の毒に存じて居ります。ビエールは赤くなつた、そして、寢床の縁から急いで自分の脚を下して、オゾくと不自然な笑顔で、老人の方に身體を前へ曲げた。

「私は、貴下、斯う申しあげるのは、決して好奇心からではございません、覺然大切な理由があるのでございます」

彼は、ビエールを彼の見詰から遁けさせずに、止まつた、そして、長椅子の上で少し傍へ動き、その動作で以つて、彼の側へ坐れとビエールを誘つた。

ビエールは、この老人と談話を爲だすのは厭であつた、が、我知らず、彼の云ふなりになつて、行つて、その傍に坐つた。

「貴下は心がお苦しいでせうな、貴下」と、彼は續けて、「貴下はお若い、私は年取つて居ります。私は、

私 の力 で能きる限り、貴下のお助を致し度いと存じます」

「あゝ、左様で」と、ビエールは、不自然な笑顔で云つた。「まことに有り難うございませう……何處から旅しておいででした？」

見知らぬ人の顔は、優しくは無かつた、それは冷たく酷くさへあつた。が、それに拘はらず、この新しく知り合ひになつた人の言語も顔も、兩方とも、ビエールには抵抗し難く懐かしかつた。

「けれども、若し貴下が何うした理由からでも私と談話を爲さることがお厭でしたら」と、老人は云つて、「其様なら、左様おつしやつてください、貴下」

で、不意に、彼は、父親のやうな親切さの全然意外な微笑を爲た。

「あゝ、いや、決して、それどころでは無い、反つて、貴下と相識になるのが甚だ喜ばしいんです」と、ビエールは云つた、そして、その誰だか分らぬ人の手をもう一度ジロリと見て一層注意して指輪を見た。彼は、共済組合の標象のアダムの首を見た。

「失禮ですが」と、ビエールは云つて、「共済組合員でおいでですか？」

「左様、私は共済組合の或る團體のものでございます」と、誰だか分らぬ人は云つて、今度はビエールの眼を凝乎と見た。「で、私から、並に、彼等を代表しまして、私は貴下に御入會をお勧めします」

「ですが」と、ビエールは微笑みながら、その共済組合員の人と爲りを見て彼の心に起つた信用と、共済組合の信條の項目を嘲けて居た自分の習慣との間に躊躇しながら云つた。「ですが、私には到底解から無いのではありますまいか——いや、何う云つたら宜いでせう——宇宙の原理に對する私の考へ方が、貴下がたとは全然正反對なんで、お互に解り合ふことは到底能き無からうと思ふんですが」

「私は、貴下がたのお考へなさり方を存じて居ります」と、共済組合員は云つて、「貴下のおつしやる。そして、貴下御自身のお考のやうに思つていらつしやるその考へ方は、それは、人間の大多数の考へ方でございますまして、慢心と、怠惰と、無知の避け難い結果なのです。失禮は御免ください、貴下、若し、私が斯ういふことを知つて居らんでしたら、貴下とお話は始めるのでは無かつたのでしたから。貴下のお考へ方は悲しむべき間違でございますぞ」

「それは丁度私の方でも、頭から、貴下がたが間違つてると極めて居ると同様な譯で」と、ビエールは、微笑かに微笑みながら云つた。

「私は、自分が眞理を知つて居ると云ふまでにそれほど大膽には決してなり度く無いと思ひます」と、共済組合員は云つた、その言ひ方の斷乎して居ることが、ます／＼ビエールを感動させた。「何様な人でも單獨では眞理に達することはできませんのです、唯だ石の上に石を積み、總ての人の協力に依り、我々の最初の父アダムから今日に至るまでの何百萬代に依つて、大御神の御座に適應はしいその殿堂が建てあけられるのでございます」と、共済組合員が云つた、そして、眼を瞑ふつた。

「私は信じ無いことを貴下に申しあげて置か無ければなりません、神を信じ……無いんです」と、ビエールは、全然眞實のことを云は無ければならぬと感じて、残念さうに、思ひ切つて、云つた。

共済組合員はビエールを見た、そして、自分の手に何百萬といふ物を持つて居る富豪が、自分に向かつて、五留 あれば幸福が得られるのだが、それが無くつて困まつて居ると話す可憐な貧乏人に向つて微笑むやうに、微笑んだ。

「左様、貴下は神を知つておいでなさら無いですね、貴下」と、共済組合員が云つた。「貴下は神を知つて

おいでの筈はありません。貴下は神を知つておいでなさら無い、貴下がお心に苦しみのある理由は其所なのでございませぬ」

「左様です、左様です、私は幸福で無いんです」と、ビエールは承認した、「けれども、私は何うすれば宜いんでせうか？」

「貴下は神を知つておいでなさら無いのです、貴下、で、それが、貴下の幸福におなりなさら無い理由なんです。貴下は神を御存じが無い、けれども、神は此所においで、彼は私の裡にもおいで、彼の裡にもおいで、彼は卿が今の先云つた彼の嘲弄した言語の裡にもおいでなのだ」と、共済組合員は、厳格な震へる聲で云つた。

彼は、止まつて、そして、落ち着かうとするらしく、溜息した。

「若し、神がおいでなさら無いとすれば」と、彼は、聲低く云つて、「吾々は彼のことを云ふ筈は無いのでございませぬ。何のことを、誰のことを吾々は話して居たのでありませうか。誰の存在を卿は否定するのであるか？」と、彼は聲に熱心な嚴肅と權威を含めて、不意に云つた。「若し、神が居ますので無かつたら、誰が彼を發明したてでありませうか。斯ういふ窺ひがたい者がましますといふ考想が卿の心の裡に何うして起つたのでありますか。卿及び世間ぢうが、斯ういふ不可思議な者、全能にして、且その有らゆる資質に於て永遠無窮な者の存在を何うして假定するやうになつたでせうか……」

彼は止まつた、そして、長い間を置いた。

ビエールは、この沈黙を途断らせることは能き無かつたし、又途断らし度く無かつた。

「神は居ますのでございませぬ。が、彼を全然會得するのは難づかしいことですよ」と、共済組合員は再始め

た、ピエールの顔は見ずに、自分の前を真直に見て居たが、心の裡の感情の爲めに静乎として置くことの能き無くなつた年取つた両手は、書をめくつて居た。

「卿が疑ふのが、誰か一人の人間の存在で、もあつたら、私は、その人を卿の所へ伴れて來、その人の手を撃つて、その人を卿に見せることが能きでありません。が、取るにも足らぬ眇たる人間の私が、神の有らゆる力、有らゆる永遠、有らゆる祝福をば、盲目である人、又は、神を見まい、解しまいと眼を瞑ぶり、そして、自己自身の總ての悪いことや、卑しいことを理解し無い人に、見せることが何うして能きませう」
彼は止つた。

「卿は何ういふ人間ですか？。卿は何ですか？。卿は卿が彼様いふ嘲弄の言語を云ふことが能きるので、自分は賢いのだと夢みて居るのだ」と、彼は、陰鬱な嘲弄する皮肉で云つて、「けれども、卿は、非常に巧に出來た時計の一部分を玩弄びながら、その時計の有用なことが解ら無いが爲めに、無法にも、それを造くつた人を信じ無いといふ小さい幼児よりも尙愚かであつたのであります。神を知るといふことはなかく、難づかしいことであります。何代も何代も、吾々の最初の父のアダムから今日に至るまで、吾々は、この知識を得やうと骨折つて來た、それでも、吾々の目的を達するには、未だ無限に遠いのです。が、吾々の理解の缺けて居る所に、吾々は唯だ吾々の弱いこと、神の大なることを見るばかりであります……」

ピエールは、共済組合員の顔を輝いた眼で見詰め、その言語を、胸をときめかして聞いて居た、彼は、共済組合員の言語を遮ぎら無かつた、問も出さ無かつた、唯だその不思議な男が彼に話して居る事柄を、全心を以て信じた。彼は、共済組合員が彼の前に置いた合理的の論據に於て信仰を持つたのか、それとも、兒童等が信するやうに、共済組合員の言語の調子や、確信や、眞摯さを通して、及び、時々彼の言語を殆ど途断

らした聲の震へることや、その確信に於て年を取つたギラ／＼する老眼や、或は、その老人の人格全體に著るしく表はれて居て、ピエールをば、ピエール自身の卑屈や望無き状態以外に、特別な力を以て感動させた沈着や、決心や、彼の到達點の正確なことをなど通して、信じたのか——何れにしても、彼は全心を以て信じやうと欲した、そして、信じ、且慰安を得たやうな、生命の再興、復歸の嬉しい感覺を感じたのであつた。

「それは理性で達せられるのでは無く、生命で達せられるのでございます」と、共済組合員が云つた。

「私には解りません」と、疑惑が彼の心の裡で動いて居るのを感じて、不安になつて、ピエールは云つた。彼は、共済組合員の議論の朦朧なこと、薄弱なことを恐れた、彼は自分が共済組合員を信することが能き無いで居ることを恐れた。「私には解りません」と、彼は云つて、「何うして人間の理性が貴下のおつしやるその知識に達することが能き無いか」

共済組合員は優しい父のやうな微笑を爲た。

「最高の智慧と眞理は、吾々が吾々の裡に持つて居やうと骨折る最も潔い露のやうなものです」と、彼は云つた。「私はその潔い露を汚れた器に入れて、その潔さを判断することが能きませうか？。私自身を内部的に潔めることに依つてのみ、私の裡に持つて居るその露をば純潔の或度に達しさせることが能きるのでございます」

「左様です、左様です、それはその通りです」と、ピエールは嬉しさに云つた。

「最高の智慧は、理性ばかりの上には建てられません、智力の知識が分けられて居る物理、歴史、化學など、いふやうなさういふ此世の科學の上には建てられるのではありません。最高の智慧は一でありませう。最高の智慧は唯一つの科學を知て居るのみであります——宇宙全體の科學、即ち全創造及びその裡に於ける人間

の位地を説明する科學なのであります。この科學を人間の心に染み込ませるには、人の内部的な性を清浄にし、改新するのが必要なのであります。ですから、人は、知る前に、信じて、完全なものなら無ければなりません。で、斯ういふ目的を達する爲めに、吾々の心の裡に、良心と名づけられた神の光が置かれて居るのでございます」

「左様です、左様です」と、ビエールは承認した。

「卿の内部的な性を精神的の眼を以て窺はれよ、そして、卿は、卿自身に満足して居るや否や、卿自身に向つて問うて見られよ。智力のみの指導で卿は何に達することができたのか？。卿は何であるのか？。貴下はお若い、お富有で、教育を受けたお方でありなさる。貴下は、貴下に與へられる筈であつた總ての天福を何うしてしまつたのですか？。貴下は、貴下御自身及び貴下の生活に満足しておいでですか？」

「いや、私は自分の生活を悪んで居るんです」と、ビエールは、顔を擧げて、云つた。

「卿はそれを悪むと云はれるか、さらば、それを變へられよ、卿自身を淨くせられよ、そして、卿が淨めらるゝに至れば、卿は智慧を知るやうになられるであらう。貴下の生活を見て御覽なさい。何う貴下はそれを送つておいでしたか？。亂暴な躁宴や、放蕩で、社會から有らゆる物を取り、その報酬としては何にも御自分の方からは與へずに、暮しておいでした。貴下は富をお受けなすつた。何う貴方はそれをお使ひでしたか？。貴下は、貴下の隣人の爲めに何ういふことを爲すつたのですか？。貴下は、何萬といふ貴下の奴隷のことを一寸でも思つてお遣りでしたか、肉體上及び道徳上、彼等に何等かの助力をお與へなすつたのですか？。いや、左様では無かつた。貴下は彼等の辛苦から利益を得て、放埒な生活を送つておいでなすつた。貴下の爲すつたのは、左様いふことであつたのです。貴下は、貴下のお勤務で、貴下の隣人の爲めにな

るやうな位地をお選びでありましたか？。いや、貴下は怠けてお暮しでありました。それから、貴下は結婚なすつた、人生に於て若い女を指導する責任を貴下御自身にお負ひなすつた。所で、貴下は何ういふことをなすつたのですか？。貴下はその婦人に眞理の路を見出させる助けはなさらないで、反つて、その婦人を虚偽と不幸の奈落へ投げ込んでおしまひなすつた。人が貴下を侮辱した。すると、貴下はその男を殺した、でありながら、貴下は、神を知らんとおつしやる、貴下の生活を悪くむとおつしやる。總べてさういふことの裡には、寸毫も智慧はございませんぞ、貴下」

さういふ言語の後で、共済組合員は、長椅子の背に片腕を凭たせ、そして、長く續けた談話で疲れてもしたかのやうに、眼を瞑ふつた。ビエールは、その厳格な、動かぬ、年取つた、殆ど死んだやうな顔を見詰めて、一つの音をも出さずに唇を動かして居た。彼は「左様だ、卑しい、怠けた、放埒な生活なんだ」と云はうと思つた。が、沈黙を破ぶることを敢てし得無かつたのだ。

共済組合員は、老人がやるやうに、皺腹れた咳拂を爲た、そして、従僕を呼んだ。

「馬は何うかね？」と、彼は、ビエールを見無いで尋いた。

「明いた分を幾匹か持つて参りました」と、老人は答へた。「お休みなさいませぬので？」

「いや、馬を附けるやうに云つて呉れ」

「俺に何も彼も話して、俺に助力を約束せずに、この男は俺を打捨つて眞實に行つてしまふのか知ら」と、ビエールは思ひ、首をうな垂れて立ち上がり、部室を彼方此方歩き始めながら時々共済組合員をジロリく見た。

「左様だ、今まで氣が付か無かつたが、俺は卑しむべき放埒な生活をやつて居たんだ。が、俺はそれが好

きぢやア無かつた。さう爲度かつたのぢやア無かつたんだ」と、ビエールは思つて、「所が、この男は眞理を知つて居る、そして、さうしやうと思へば、俺にそれを見せて呉れることが能きるんだ」

ビエールは、これを共済組合員に云ひ度かつた。が、それを敢てし得無かつた、物慣れた年取つた手で自分の物を荷造りしてから、旅客は自分の羊皮の外套の釦を掛けた。さういふ風な準備を終はるといふと、彼はベズウホフに振り向いた、そして、丁寧な無關心な調子で彼に云つた。

「これから何處へおいででございますか」

「私？……私は彼得堡へ行くんです」と、ビエールは、兒童らしい不決定で答へた。「有り難うございませう。私は全然御同感です。けれども、私はそれほどまで悪い人間だと思つてくださいますなよ。全心を以て、私は、貴下が、私に有つて貰らひ度いと思つておいでのやうなものに爲り度かつたんです。けれども、私は誰からも助けて貰らへ無かつたんです……尤も、私自身が何も彼も一番悪るかつたには違ひ無いけれども、私を助けてください、私を教へ導びいてください、さうすれば、私だつても或は善くなつて……」

ビエールは、その上は云へ無かつた、彼の聲は断れた。で、彼は外へ向いた。
共済組合員は、何か考へ込んで居るらしい様子で、黙まつて居た。

「助力は神からばかり来るものでございます」と、彼は云つて、「けれども、吾々の結社の力で能きる限りのお助力は、吾々の結社が貴下に對して、爲てあげますでございます。貴下は彼得堡へおいでになつて、これを伯爵ヴィラアルスキーにお渡しなさい」(彼は、手帳を出して、四つに疊んだ大きい紙の上へ五六字書いた)。

「唯つた一つ御忠告申して置きます。都へお着きでしたら、取り敢へず獨居と自個検査に時をお委ねなさ

い、そして、貴下の前のやうな生活に返ら無いやうになさい。では、御機嫌克う御旅行なさいまし」と、彼は、自分の従僕が部屋へ入つて來たのを見て、云ひ添へた「十分の御成功を祈ります……」

その誰だか分らぬ人は、ビエールが驛長の帳面で知つたところでは、オシツプ・アレクセエヴィチ・バスデーフであつた。バスデーフは、ノヴィイコフ時代に於てさへ最も有名な共済組合員で、マルティン派の人であつた。バスデーフが行つて了まつた後長いこと、ビエールは寢やうとも爲す、馬を求めもせず、驛亭の部室の裡を歩き廻つて居た。彼は自分の放埒な過去を見渡した、そして新たな生活を始めるといふ非常に嬉しい感で、それに達するのが自分には容易だと思はれた幸福な非難の無い立派な未來を自分の眼前に描いた。彼には、彼が、徳高きあることが何れほど善いことだか、何うかした機會に忘れて了まつた爲めばかりで、放埒になつたので、外に何の原因は無いやうに、思はれたのであつた。彼の心の裡には、前前の疑惑の痕跡も遺つて居無かつた。彼は、徳の路に於て、互に助け合ふ目的で團結する人の結社の能きべきことであるのを固く信じた。そして、共済組合をば、さういふ結社として、自分に向つて、描いたのであつた。

(三)

彼得堡に達すると、ビエールは、自分の到着を誰も知ら無いやうに爲、誰にも逢ひに行かずに、誰からも知れず、自分に送つて來た書のトマス・ア・ケムピスを読んで、終日送つて了まつた。一つの事、唯つた一つの事だけが、その書を読んでビエールに解かつた。彼がこれ迄寸毫も知ら無かつた事柄が解かつた。完全に至ることの能きべきことや、オシツプ・アレクセエヴィチが彼に示めて呉れた人と人との間に、兄

弟のやうな積極な愛の能きべきことであるのを信ずることの有らゆる幸福を解したのであつた。彼が着いてから一週間すると、ビエールが彼得堡の交際場裡でホンの少し知つて居た若い波蘭の伯爵のヴィラアルスキイが、ビエールに逢ひにと、ドロホオフの介添人と同様な儀式張つた態度で、或る晩、ビエールの部室へ入つて来た。自分の後の戸を閉めて、部室にはビエールの外に誰も居無いのを、とつくり見定めて置いて、ビエールに話し掛けた。

「私は、人の使で、或るお話を爲に参りましたんです、伯爵」と、彼は、坐らずに、ビエールに云つた。「吾々の結社の非常に高い地位の人が、通例の時期以前に、貴下を吾々の結社に入れ申し度いといふ望を持たれまして、私に貴下の擔保人になれといふ依頼なんです。私は、その人の望を實行するのが、私の神聖な義務だと思ふんです。貴下は私を擔保人として、共済組合の結社に入らうと思ひですかね？」

ビエールは、自分が、前には、殆んど何時でも、舞踏會で、最も美しく女たちの間に交つて、心持の好い笑顔でばかり居るのを見來つたこの男の調子が今は冷たく厳格であるのに、感動させられた。

「え、さう願ひ度いです」と、ビエールは云つた。

ヴィラアルスキイは、頭を下けた。「もう一つ伺ひます、伯爵」と、彼は云つて、「これに對しては、貴下は、未來の組合員として、は無く、一人のチャンとした人として、何處までも誠實なお答へを願ひ度いのであります、貴下は貴下の前々の確信をお捨てになつたのですか？。貴下は神をお信じですかね？」

ビエールは寸時考へた。「え……え、私は神を信じます」と、彼は云つた。

「さうでしたら……」と、ヴィラアルスキイは始めやうと爲た、が、ビエールはそれを遮ぎつた。「左様です、私は神を信じます」と、彼はもう一遍云つた。

「左様でしたら、行つて宜しいんです」と、ヴィラアルスキイが云つた。「私の馬車でお供を爲ませう」馬車の裡では、ヴィラアルスキイは始終黙まり通しであつた。何うすれば宜いか、何う答へ無ければならぬものかといふやうな、ビエールの尋ねに對しては、ヴィラアルスキイは、唯だ、自分よりもつと傑い組合員たちが、ビエールを試験するのであつて、ビエールは眞實のこの他何にも云ふに及ば無いのだと云ふばかりであつた。

二人は、會所に爲つて居た大きい家の門のなかへ馬車を乗り入れた、そして、暗い階段を登つて、燈光のある小さい部室へ入つて、其所で從僕の手を借りずに、二人とも外套を脱いだ。前部室から今一つの部室へ歩み込んだ。奇異な服装の男が戸口へ現はれた。ヴィラアルスキイは、その男の傍へ行つて、低い聲の佛蘭西語で何か話した、そして、小さい戸棚へと行つた、その裡には、ビエールは、これまで嘗て見たことの無い奇異な衣服が入つて居るのを見た。戸棚から手巾を取つて、ヴィラアルスキイは、それをビエールの眼の上へ掛けて後で結び目をこしらへて、それを縛らせた。結び目へ彼の髪を痛く縛り込んで了まつた、それから、彼はビエールを傍へ引き寄せ、彼に接吻し、そして、彼の手を撃つて、何處へか伴れて行つた。ビエールは、結び目に髪が引張られるので痛かつた。彼は痛さに、顔に皺を寄せた、そして、取り留まらぬ恥かしさで微笑んだ。彼の大きい姿は、腕を兩脇に垂下けて、顔に皺を寄せ、微笑みながら、オズ／＼した不確な歩みで、ヴィラアルスキイの後に隨いて動いた。

十歩ほど伴れて行つてから、ヴィラアルスキイは止まつた。

「何様なことが有つても」と、彼は云つて、「吾々の結社へ入る決心を堅く極めておいでなさるのなら、何でも十分勇氣を振つて堪へておいでなさる無ければいけませんぞ」(ビエールは、頭を下けて、承知の答を爲した)。「戸を叩く音がしましたら、貴下は眼隠しを除つて宜いんですよ」と、ヴィラアルスキイは云ひ添へた、「立派な勇氣と成功を祈りますぞ」で、ビエールの手を握り締めて置いて、ヴィラアルスキイは行つて了まつた。

單獨にせられた時に、ビエールは尙且同なじやうに微笑み續けた。二度、彼は肩を揺つた、そして、脱つて了まひ度いと思つたかのやうに、手巾へと手を舉げた、が、手を元へ落した。眼を縛られたまゝで費した五分が、彼には一時間のやうに思はれた。腕は痺るやうに感ぜられ、脚は踴躍めき、疲れ切つたやうな感が爲た。彼は、非常に複雑した矛盾したさまの感情の起つたのを覺つた。彼は、何様なことを爲れるのか恐れた、そして、恐怖を見せるのを尙一層恐れた。彼は、何様なことがあるのか、何様なことが自分に示めされるのか、知り度くつて堪まら無かつた、が、何よりも彼によりも、オシップ・アレキセエヴィチに出會つてから以來、彼が常に夢みて居た更新と能動的に立派な生活とのその路に到頭入るべき時がいよく來たことの喜悅を感じたのであつた。

戸を叩く高い音がした。ビエールは眼隠しを脱つた、そして、見廻した。

部屋は眞暗であつた、唯だ一か所に、小さい燈明が白い何物かの前で燃えて居た。ビエールはそれに近寄つた、そして、小さい夜燈は、開けた書の置いてある黒い卓子の上で、燃えて居るのを見た。書は聖書であつた。夜燈がその裡で燃えて居た白い物は、眼の穴と齒のある白い骨體であつた。聖書の最初の語詞「太初に道あり、道は神と偕にあり」を讀んでから、ビエールは卓子を廻つた、そして、何物か一杯入つて居る

大きい開いた箱を見付けた。それは骨の一杯入つて居る棺であつた。彼は自分が見たもので寸毫も驚かされはし無かつた。これまでの生活とは全く違つた全然新たな生活に入らうと思つて居たので、彼は、何様な異常な物に對して、彼が今見て居た物よりも尙一層異常な物に對して、さへ、用意して居た。骨體、棺、聖書——彼は、さういふ物は悉皆豫期して居たもので、まだ、それ以上さへ豫期して居たやうな氣が爲た。彼は、自分の心の裡に敬神の感をかき起さうと試みた。彼は身邊を見廻した。「神、死、愛、人間の結社」と、彼は、さういふ言語へ、何か知らの種類の、漠然とはして居るが併し嬉しい考想を、結び付けながら、自分に向つて云ひ通して居た。

戸が開いた、そして、誰か入つて來た。

それでも、ビエールは、その時はもう少しは見ることが能きやうになつて居た微弱な光明の裡で、背の低い男が近寄つて來た。明るい所から暗闇へ入つて來たので、眼が見え無くなつたらしく、その男は止まつた、それから、用心した歩調で卓子へと動き出した、そして、柔皮の手袋を箝めた小さい兩手をその上に置いた。

その小男は、胸と脚の一部を蓋つて居る白柔皮の前掛を掛けて居た。頸の上には、襟飾のやうな何物か見えた、そして、高い白い髪縁が襟飾の下から立ち上がつて、下から燈光に照らされた長い顔を縁取つて居た。

「何の用で貴下は此所へ來たんですか？」と、ビエールが爲た身動きの微弱な戦聲で、ビエールの方に振り向いて、新來の人が尋いた。「光明の眞理を信じ無い者、光明を見無かつた貴下は、何の爲めに、貴下は此所へ來たのですか？。何を貴下は吾々から求めるのですか？。智慧ですか、徳ですか、開發ですか？」

戸が開いて、誰だか知れぬ人が入つて来た刹那に、ビエールは、小兒の時分懺悔の時に感じたやうな畏怖と崇敬の感を持つたのであった。彼は、人生の境遇では、全くの知らぬ人であるが、人のその結社を通しては自分に極く近い人である人と唯つた二人差し向ひであることを感じた。轟く胸で呼吸をばづませられながら、ビエールは、その教辭者に振り向いた——共済組合の用語では、求道者を結社に入れるやうに準備して遣る人をばさう呼ぶのだ。もつと傍へ行くといふと、ビエールは、その教辭者が自分の知つて居るスモリヤアニノフといふ男であるのを認めたが、その新來の人が善く知つて居る顔だと思ふのが彼には苦しかった。その男は、彼に取つては徳の路に於ける兄弟であり、嚮導者であるに過ぎ無かつたのだ。長い間ビエールは一言も云ひ出せ無かつた。で、教辭者の方が問を繰り返さなければなら無かつた。

「え、私……私……新たに始め度いんです」と、ビエールは懇とのことで、聲を出した。

「宜しい」と、スモリヤアニノフは云つた、そして、直ぐ言語を續けた。

「貴下は、吾々の神聖な結社が、貴下の目的を達しさせるやうに貴下を助ける手段は何ういふものなのか、それが貴下には解つて居ますか……」と、教辭者が落着いて速語に云つた。

「私は……指導を……助力を……望みます……新たな生活を始める爲めの……」と、ビエールは、感情の爲めと、露西亞語で抽象的な事柄を云ふのは慣れて居無かつた爲めとで、聲が慄へ、口をきくの骨を折つて、云つた。

「共済組合を貴下は何う思ひますか？」

「共済組合は、さまざまの目的を持つて居る人々の平等の結社だと思ひます」と、ビエールは、その刹那の嚴肅さに自分の云つた言語の適合は無いのを恥かしく感じながら、云つた。「私は思ひます……」

「宜しい」と、教辭者は、その返答に全く満足したらしい態で、急いで云つた。「貴下は貴下の目的を達する手段を宗教の裡に求めましたかね？」

「いえ、私は宗教を真理で無いと思つたので、宗教を信じませんでした」と、ビエールは、教辭者が聞き兼ねて、何を云つたのか尋き返したほどの低い聲で云つた。「私は無神論者でした」と、ビエールは答へた。

「貴下は人生に於て真理の法則に従つて行く爲めに真理を求め、故に、貴下は智慧及び徳を求め、左様なものでせう？」と、教辭者は、寸時と止まつて居てから云つた。

「左様です、左様です」と、ビエールは承認した。

「さアこれから、私は、吾々の結社の主たる目的を貴下にお知らせし無ければなりません」と、彼は云つて、「で、その目的が貴下の目的と一致して居たら、貴下は吾々の結社へお入りなすつて、利益をお得になるんです。吾々の結社が建てられた第一の最も大きい目的であり且合同の基礎である所のものは——それは、人間の如何なる力を以てするも破壊することの能き無いものであります——或る大切な神祕を保存して後世に傳へることであり……この神祕は、最も古い時代から、いや、最初の人間からさへ、傳り來つて居るものであります——これは、恐らくは、人類の運命を支配する神祕でありませう。けれども、この神祕は、人が長い間勤勉に自己を淨めることに依つて準備されるので無かつたら、誰も知ることができず、又、それに依つて利益することも能き無いといふやうな性質のものでありますので、誰でも直きにそれに達することを望む譯にはいかんです。こゝに於て、吾々は第二の目的を持つのであります、これは、この神祕に達し

やうと骨折つた人々から傳説に因て吾々に示めされたさまざまの手段で以つて吾々の社員の智能を淨め鋭くして、能きるだけ彼等の心を改良して、それに由つて彼等をしてその神祕を受け容れることの能きる資格を持たせるやうに準備することなのであります」

「斯くの如く、吾々の社員を淨め改新すると共に、第三には、吾々は全人類に對して、吾々社員を信仰と徳行の模範として示めして、全人類を改良するに努め、そして、さういふ風にして、吾々は、この世に於て一番強い害悪に向つて戦ふ爲めに、全力を擧げて努力するのであります。これ等のことを熱くお考へなさい、私は再参りますから」と、彼は云つた、そして、部室を出て行つた。

「この世に於て一番強い害悪と戦ふ……」と、ビエールは繰り返した、そして、その方面に於ての彼の活動の心象が彼の眼の前に立ち上つた。

彼には、彼自身が二週間前にはそれであつたやうな人々が見えるやうな気が爲た、そして、彼はさういふ人々に、心の裡で教導的の意見を爲て居た。彼は、自分自身に向つて、自分が言語や行爲で助けやうと思ふやうな放埒な不幸な人々を描いた。彼は、自分がその犠牲者を救はうと思ふやうな壓制者を描いた。

教辭者が擧げた三つの目的のうちで最後の者——人類の改新——が特に強くビエールの心に響いた。教辭者が擧げた大いなる神祕は、ビエールの好奇心を喚び起しはしたが、現實としては彼の想像を刺戟し無かつた、所で第二の目的、自分自身を淨め改新することは、彼に取つては、殆ど無關心のことであつた。と、いふのは、その刹那に於ては、彼は、自分の前々の有らゆる悪癖から自分は全然癒やされて了まつて、今は唯だ善いことをのみ待ち設けて居るのだといふ幸福な感に充ちて居たからであつた。

半時間経つと、教辭者は、ソロモンの宮の七階段に相當する所の、そして、それに於て何の共済組合員も

自分自身を訓練し無ければなら無い七つの徳を求道者に向つて數へ擧げる爲めに返つて來た。さういふ徳は

- (一) 用心深きこと。即ち、結社の祕密を守ること。
- (二) 結社の上級役員等に服従すること。
- (三) 道義を守ること。
- (四) 人類を愛すること。
- (五) 勇氣。
- (六) 寛裕。
- (七) 死を愛すること。

であつた。

「第七」に、と教辭者は云つて、「死のことを始終考へて、それを恐るべき敵では無く、反つて、友……徳行の勞働に疲れた靈魂をばこの苦しい人生から釋放して、應報と平和のそれ々の場所へ導いて呉れる友と感ずるやうに、貴下自身を爲るやうに努力なさい」

「左様だ、それは左様あるべき筈だ」と、ビエールは、教辭者がさういふ言語を云つた後で、再ビエールに獨りで考へさせるやうにと去つて了まつた時に、思つた。「それは左様あるべき筈だ、けれども、俺は、この世の意味が艱つと今少しづつ解つて來だしたんで、この生命を愛する位まだ弱いんだ」

が、指を折つて數へながら、憶ひだした他の五の徳は、最早既にビエールの心に感ぜられた、勇氣、寛裕、道義、人類を愛すること、就中、服従に至つては、徳であるどころでは無く、幸福だと思はれたのだ。(今彼

が、自分自身の心の氣まぐれに依つて導かるゝことを遁れて、絶対に眞理を知つて居る人々に自分の意志を委せて了まふといふことは、彼に取つて非常な嬉しさであつた。第七の徳は、ピエールは忘れて了まつた、彼はそれを憶ひ出すことが能き無かつた。

三度目には、教辭者が少し速く引返して來た、そして、ピエールは入社意向が少しも變らずに居るか何うか、又、彼は、何様なことを求められてもそれに従ふ積りで居るか何うか、ピエールに尋いた。

「私は何様なことでも従ひます」と、ピエールは云つた。

「まだ他に申して置かなければならんことがある」と、教辭者は云つて、「吾々の結社は、言語でその教理を宣傳する事ばかりで無く、尙又、智慧及び徳を覺める求道者の上に、唯の言語の説明よりも豊然有力な効果を與へやうと思はれる或る種々な手段で教理を宣傳します。この殿堂は、貴下がその裡で見ると緒に、若し貴下の心が誠實であるのなら、何ういふ言語を以てするよりも豊に多くの光明を貴下の心に注ぐのであります。貴下は、入社のことから儀式の裡で、開發の同様な方法を御覧になるでせう。吾々の結社は、象形文字に於てその教理を人に示めした古代の結社の慣例に従つて居ります。象形文字といふのは」と、教辭者は云つて、「人間の五官では感ずることの能き無い或る物體の象徴に與へられた名でありまして、その物體は、象徴の持つて居る諸特質と同様な諸特質を持つて居るのであります」

ピエールは、象形文字とは何様なものか善く知つて居た、が、それを云ふことを敢てし無かつた。彼は、教辭者が云つた何のことからも、自分の嚴試が直きに始まるのだと感じながら、黙まつて教辭者の言語を聽いて居た。

「いよく貴下が決心なら、私は貴下の入社手續に進まなければなりません」と、教辭者は、ピエー

ルの傍へすつと寄つて、云つた。「寛裕の徴に、貴下が持つておいでの貴重な物を悉皆私にくださるやうに願ひます」

「でも、私は此所には何も持つて來て居ませんが」と、ピエールは、彼の財産全體を渡せと云はれたやうに想像して、云つた。

「何ういふ物を其所に持つておいでなさるのですか、時計、金銭、指輪……」

ピエールは、急いで、彼の錢入れや、時計を出した、そして、彼の肥つた指から、約婚の指輪を抜かうと長いこと骨折つて居た。それが能きるといふと、共済組合員は云つた。

「從順の徴として、衣服をお脱ぎください」

ピエールは、教辭者の指圖で、上衣と直衣と左の靴を脱いだ。共済組合員はピエールの胸の左側の上へ彼の襦袢を開け、左脚の膝の上へ彼の袴をたくし上げた、ピエールは、その知ら無い人の手数を省く爲めに、急いで右の靴を脱いで、下袴をたくし上げやうと爲た、が、共済組合員は、それには及ば無いと云つて聞かして、左足に穿く爲めに上靴を呉れた。當惑、疑念、自己嘲弄の小兒らしい微笑——我にもあらず顔へ出て來たもの——で以つて、ピエールは、脚を廣く踏み開き、脇へ手を垂下けて、教辭者に面し、その次の命令を待ちながら、立つて居た。

「それから、最後に、誠實の徴として、貴下の重なる誘惑を私に明かして下さい」と、教辭者が云つた。

「私の誘惑ですつて。私には随分多數あつたのですが」と、ピエールは云つた。

「徳の路に於て何よりも一番多く貴下を躓かした誘惑なんです」と、共済組合員が云つた。ピエールは、止まつて、返答を探がした。

「酒かな？。暴食かな？。怠惰かな？。性急かな？。憤怒かな？。女かな？」と、彼は、自分の悪癖を一つと数へあけて、それを心の裡で量衡に掛けたが、何れを取り立て、一番重いものに爲て宜いか分から無かつた。

「女」と、ビエールは、低い聞き取れ無いやうな聲で云つた。共済組合員は、その返答の後、長いこと、物も云は無ければ、動きも爲無かつた。やがて、彼はビエールの側へ動いて行き、卓子の上に置いてあつた半巾を取り、そして、再彼の眼の上にそれを縛つた。

「いよく最後に、貴下に云ひますが、貴下の有らゆる注意を貴下ご自身の上にお向けなさい、貴下の感情に手綱をお付けなさい、そして、貴下の情熱の裡には無く、貴下の心の裡に、祝福をお覚めなさい。祝福の秘訣は、貴下の外に在るのでは無く、貴下の内裡にあるのです……」

ビエールは、最早餘程前から、彼の内裡で、心を爽かにする祝福の泉を知覺して居たが、それが今は、喜悅と感情を以つて、彼の心に漲きつたのであつた。

(四)

その後直ちに、ビエールを伴れに、教辭者では無く、ビエールの擔保人ヴィラアルスキイが暗い殿堂へ歩み込んで来た、ビエールは、その聲でその人をそれと認めたのであつた。彼の決心が固いか何うかといふ新な尋問に對して、ビエールは答へた――

「左様です、左様です、承知です」
晴々とした小兒らしい微笑で以つて、彼は、片足には靴を穿き、片足には上靴を穿いて居るので、オズク

と、跛者のやうに歩きながら、進んで行つた。その間、ヴィラアルスキイは、ビエールの肥つた露た胸へ、劍を突付けて持つて居た。

彼は、部室の外へ伴れ出され、廊下に沿うて、前へ行つたり後へ戻つたりして行つて、到頭會所の戸口へ伴れて行かれた。ヴィラアルスキイは咳拂を爲た。彼は、幾つかの槌の共済組合的の叩きで答へられた、戸が二人の前に開いた。濁聲が（ビエールの眼は隠されて居たのだ）ビエールに向かつて、彼の名、彼の出生地、生年月などを尋いた。それから、又、尙且眼隠しをされたまゝで、何處へか伴れて行かれた、そして彼が歩いて行くうちに、人々は、彼の巡禮の勞苦や、神聖の愛や、世界の永遠の創造者のことや、彼は勞苦や危険を勇氣を以つて耐へ無ければならぬことなどを、比喻で以つて、彼に話した。その間に、ビエールは、自分が、時としては求道者と呼ばれ、時としては苦しむ者と呼ばれ、又時としては志願者と呼ばれたこと、そして、人々は槌や、劍でさまざまの叩く音をさせたことを認めた。彼が或る物體へと伴れて行かれて居る間に、彼は、案内者たちの間に躊躇と不決心があるのに氣が付いた。彼は、周囲の人々の間に喧嘩の争論を聞いた、そして、そのうちの一人が、ビエールを或る敷物の上を渡らすやうにし無ければいかぬと主張して居た。

それから、人々はビエールの右の手を撃つて、それを何物かの上に置いた。それと同時に、人々は彼に左の手で左の胸へ磁石を付けて居ると云ひ付け、言語を聲高に讀む誰かに隨いて、結社の規約を忠實に守るといふ誓約を、ビエールをして繰り返させた。それから、蠟燭が消されて、酒精が點された、それは、臭氣でビエールにさうと分つた、そして、彼は、少光明を見るだらうと言ひ聞かされた。眼隠しが彼の眼から除り去られた。そして、燃えて居る酒精の微弱な光明の裡で、ビエールは、夢の裡で

かのやうに、教辭者と同じやうな胸掛を爲して、彼の胸へ幾本かの劍を向けて、彼に面して立つて居る五六人の人々を見た。その間に、血で汚れた白襦袢を着た人が立つて居た。それを見ると、ビエールは、刺し徹さるゝ氣で、胸を突き出して、劍の方へと動いた。が、劍は後へ引かれた、そして、眼隠しが直ぐ彼の眼へ又掛けられた。

「今貴下は、少光明を見たのです」と、聲が云つた。それから、又人々は、蠟燭を點けた。ビエールは今十分な光明を見るだらうと云つて聞かされた、で、又眼隠しを除つた、と、十人以上の聲々が、不意に「斯くぞ過ぐれ、この世の榮光」と、云つた。

ビエールは、漸々落着を回復し、部室とその裡の人々を見廻し始めた、黒で蓋はれた長い卓子の周圍に、皆な彼が前に見たと同様な奇異な衣服を着た十二人位の人々が坐つて居た。そのうちの數人は、ビエールが彼得堡の交際場裡で知つて居た。會長の椅子には、彼の知ら無い、頸に奇異な十字架を掛けた若い男が坐つて居た。その右に、ビエールが二年前アンナ・ペアヴロヴナの家で見た伊太利の僧が坐つて居た。人々の裡には、非常に高い地位の官吏と、嘗てクラアギン家に居た瑞西人の家庭教師が居た。衆皆嚴肅な沈黙を守つて、手に槌を持つて居た座長の言語を聴いて居た。壁には、燃えて居る星が彫つてあつた。卓子の一方の側には、さまざまの形の物の付いて居る小さい毛氈があつた。その今一つの側には、聖書と燭の載つた神壇らしいものがあつた。卓子の周圍には、七つの大きい寺院にあるやうな蠟燭立が立つて居た。

社員の二人がビエールを神壇へと伴れて行き、殿堂の門で平伏すのだと云つて、ビエールの足を直角に組ませて、彼に跪つけと云ひ付けた。

「最初に鑑を受けさせるべきでせう」と、社員の一人が囁語で云つた。

「いや、何うぞ、黙まつて」と、今一人が云つた。

ビエールは従は無かつた、で、不安な近眼で、身邊を見廻した、と、不意に疑惑が襲つて來た。

「此所は何處だらう？。何を俺は爲て居るんだらう？。衆皆は俺を笑つて居るんぢやア無からうか。後になつて、これを憶ひだして、俺は恥ぢ入るんぢやア無からうか？」

が、この疑念はホンの寸時しか續か無かつた。ビエールは、自分の周圍の人々の眞面目な顔を見廻した。今の先彼が經て來た總てのことを考へた、そして、最中途中で止めやうは何うしても無いことを感じた。

彼は自分の躊躇に慄然とした、そして、自分の前の敬虔な感情を自分の心に喚び起さうと骨折りながら、殿堂の門に自分の體を投げ倒した。と、敬虔な感情が、彼の上に、實際ますます強く來た。

少時其所にさうして居るといふと、起きると云はれた、そして、他の人々が掛けて居るやうな胸掛が彼の身體の周圍に着せられ、一本の鑑と三對の手袋が彼の手に置かれた。其所で、管長が彼に話し掛けた。

彼は、ビエールに、力と純潔の象徴である所のその胸掛の白いのを決して汚さ無いやうに爲無ければならぬと、云つて聞かした。それから、その何だか分らぬ鑑に就ては、彼は、ビエールに、心の裡から惡辭を

清め去るやうにそれで骨折り、又辛抱強い忍耐で、隣人の心の裡に徳の路を平滑にするやうに爲ると云つて聞かした。それから、手袋の第一の一對に就ては、管長は、ビエールには、その意義は分かるまいけれども、それを大切にして置か無ければならぬと云ひ、第二の一對に就ては、集會毎に箱めて出無ければならぬものだと云ひ、そして、最後に、第三のもの——それは女の手袋であつた——に就ては、彼は云つた——

「親愛な兄弟、で、この女の手袋も貴下に與へらるべきものなのです。貴下が誰よりも尊ばうと思ふ婦人にそれをお與へなさい。その贈り物は、貴下が共濟組合の事業に於て、恥かしからぬ助力者として選ぶ婦人

に對する貴下の心の純潔の保證になるべきです」
短い間を置いてから、彼は云ひ添へた――

「けれども、親愛な兄弟、その手袋が汚れた手を飾ら無いやうに氣をお付けなさい」
管長が最後の言語を云つた時に、彼は云ひ憎くさうであつたやうに、ビエールに見えた。ビエールの方はそれよりも一層モチ／＼した。彼は、小兒が赤面した時のやうに、泣きさうになるまで顔を赤め、不安さうに身邊を見廻した。そして、座の白けた沈黙が續いた。

その沈黙は、社員の一人に因つて破られた、その人は、ビエールを毛氈の所へ伴れて行つて、その上に出て居る總ての形、日、月、槌、衡、鐵、天然石、切り整へた石の棒、三つの窓其他のものゝ解釋を寫本のなかから讀み始めた。

それから、ビエールは、彼の役目を示され、會所の記號を示され、合言語を教へられ、そして、到頭坐わことを許るされた。

管長は、訓示を讀み始めた。その訓示はなかく／＼長かつた、そして、ビエールは、喜悅や、感情や、氣のワク／＼して居ることなどで、讀まれて居る事柄を理解するやうな状態では殆ど無かつた。彼は、彼の記憶に膠着いた訓示の最後の言語を確乎聞き取つたばかりであつた。

「吾々の殿堂に於ては、吾々は何等身分の差別を認めぬ」と、管長は讀んだ。「唯だ認むるのは、徳行と惡癖との差別のみである。平等と抵觸するが如き一切の差別を爲さざるやう注意すべし。社員の難とあらば、その誰たるを問はず、その救助に直往せよ、邪路にさまよふ者を正路に勧めよ、落つる者を引き上げよ、同

社の者に對して惡意をも、憎惡をも、抱く勿れ。爾他人に對して親しく、鄭重なれ。有らゆる人の心に徳の火を點ぜよ。爾の隣人と爾の幸福を分つべし。羨嫉を以てその純潔なる天福を亂すこと決してあるべからず。爾の敵を宥るせ、彼に對して善を爲す外、決して復讐する勿れ。此の如く最高の規法を守ることに於て、爾は、爾が失へる古代の壯大に至る路を回復し得るに至るべし」

管長は、終はつた、そして、起ち上つて、ビエールを抱擁し、接吻した。

ビエールは、自分を取り圍た知人たちの祝辭や挨拶に何う答へて宜いか分からず、眼に嬉し涙を湛へて見廻した。彼は、何の知人をも認め無かつた。總べてそれ等の人々に於て、彼は唯同社の人を見た、そして、彼は、それ等の人々と一緒に活動に加はらうと、性急を以つて燃えた。

管長は、槌で叩いた。衆皆それ／＼の座に就いた、そして、一人が、謙徳の必要に就ての説教を讀み始めた。

管長は、最後の勤務を爲やうと云ひ出した、そして、喜捨を集める役であつた大官が、總ての社員の所を廻り始めた。ビエールは、彼がこの世で持つて居た金全額を喜捨の目錄へ書き込み度いと思つた、が、それで高慢の罪を犯かすのを恐れた。で、唯だ他の人々と同なじ額を書いたのみであつた。
會は終つた、そして、ビエールは、家へ歸ると、何十年も掛つた旅行から歸つて來て、全然違つた人になつて、前の習慣や、生活の爲方を捨て、了まつたやうな氣が爲た。

會所で入社式をやつた次の日、ピエールは家で書を読みながら、その邊のひとりで、神を。今一つで、精神を。第三の邊で、肉體を。第四の邊で、前兩者の性質を混ぜ合したものを、象徴して居る正方形の意義を見破らうと骨折りながら、坐つて居た。時々、彼は、書や、象徴的な正方形を離れた、そして、彼の想像の裡に、生活の新しい計畫を形造つた。

前日、彼は、會所で、決闘の風説が皇帝の耳に達したこと、そして、暫時彼得堡を離れて居る方が宜いことを、話された。ピエールは、南方にある彼の領地へ行つて、彼の農夫の世話に掛つて見ることに爲やうといふ意見を述べた。彼がこの新生活を夢みて喜んで居ると、公爵ヴァシイリが、不意に部屋に入つて來た。

「やア、君、莫斯科では何うしたことをやつたね？。エレンと何の争論を爲たのかね、君。君は間違をやつたんぢや」と、公爵ヴァシイリは、部屋へ入りさまに、云つた。「私はその話を全然聞きませんでしたぞ、エレンの君に對する行爲が、基督が猶太人に對するやうに、無辜であることは、確かに保證しますわい」

ピエールは答へやうと思つた、が、公爵は彼を遮つた。

「それで、何故君は、友達の所へ行かやうに、率直に淡泊に、私の所へ相談に來無かつたのかね？。私は全然知つて居ます、全然解つて居ます」と、彼は云つた。「君は、自己の面目を重んずる人ならば、誰でも當然やるべき行爲を爲した。尤も少し輕率の嫌はあつたが、吾々はアその件は何とも云はぬことに爲ませう。が、君に考へて貰はなければならぬ一事は、君が彼女及び私を、社會の眼、朝廷の眼に於てさへ、置いた位置なんぢや」と、彼は、聲を低くして、云ひ添へた。「君は此所に居るのに、彼女は莫斯科に居る。これを考へてください、君。彼は、ピエールの腕を撃つて坐らせた。「今度のことは、唯だ誤解に過ぎないんぢや、君

自身さう感じなさるぢやらうと思ふんぢやがね。今直ぐ私と一緒に手紙を書いてください、さうすれば、彼女が來ます、で、一切説明が能きやうと云ふものです。が、若し、さうで無いとすると、君が直ぐその爲めに困まるやうなことに爲つて來ますぞ」。

公爵ヴァシイリは意味ありげにピエールを見た。

「非常に確な筋から、皇太后陛下がこの事件全體に深くご注意になつて居ることを承まはつた。陛下はエレンが非常にお氣に入であつたのぢやからね」

五六度ピエールは何か云はうと用意したが、一方では、公爵ヴァシイリが彼にさう爲せ無かつたと共に、今一方では、ピエール自身が、彼が舅に答へやうと固い決心して居た斷乎した拒絶、否定の調子で、物云ふまでの氣には爲ら無かつた。のみならず共済組合の戒「他人に親しく、鄭重なれ」といふのが、幾度も憶ひだされた。彼は、眼ばたきし、顔を赤くし、起ち上り、又腰を下して、他人に面と向つて、先方に取つて嫌なこと、先方が何様な人にしろ、その人が云はれやうとは思ひ掛つて居無きことを云ふといふ——ピエールに取つては、世の中で一番難づかしいことをやらうと骨折つて居た。彼は、公爵ヴァシイリが物を云ふ時の無造作な權威の調子に服従する習慣に餘り長く慣れて居たので、今でさへ、それに抵抗することが能き無いやうに感じた位であつた。が、又、彼は、彼が今云ふ事柄の上に、彼の將來の運命全體が據つて居ることを感じた、彼は、今彼の云ふ事柄が、彼が過去の生活の前通りの路に沿つて進むか、又は、共済組合員たちに依つて彼に實に好ましく指し示された新たな路、——新たな生活に復活するやうに導いて呉れるのだと彼が固く信じ居た新たな路——に沿つて進むか、何方かを決するのだと感じた。

「さア、君」と、公爵ヴァシイリは、口輕に云つて「何も彼も無しに、唯だ「はい」と云ひなさい、さうすれ

ば、私が彼女に私自身の報告として書いてやります、で、吾々は肥えた仔牛を殺るさうぢや無いか」
 が、公爵ヴァシイリが彼の戯言らしい言語を云ひ切らぬうちに、ピエールは公爵を見ずに、併し、彼を父
 親に似させるやうな恐しい権幕な顔になつて、囁いた――

「公爵、私は貴下を此所へ招いたんぢやア無い、お歸りなさい、何卒お歸りください」。彼は跳びあがつて、
 公爵に對して戸を開けた「お歸りなさい」と、彼は、自分でも驚ろき、そして、公爵ヴァシイリの顔に表は
 れた顛動と恐怖の表情を楽しみながら、繰り返した。

「何うしたんぢや？。君は病氣かね？」

「歸つてください」と震へた聲が今一遍繰り返した。で、公爵ヴァシイリは、言ひ譯けの一語も受け得無
 いで、歸らなければなら無かつた。

一週間経つて、ピエールは、彼の新しい友達、共済組合員たちに暇乞を爲、そして、その人々の手に喜捨
 として多額の金錢を委ねて置いて、彼の領地へ行つて了まつた。彼の新しい同胞たちは、キイフや、オデッサ
 に住んで居る組合員に宛てた紹介の手紙を彼に與へた。そして、彼に手紙を書いて、彼の活動の指導を爲
 て遣らうと約束した。

(六)

ドロオホフとピエールとの決闘は、巧く事無しに済まされた、そして、その時分皇帝が決闘に對しては嚴
 重に處罰するのであつたに拘らず、本人たちも、介添たちも、何方も何の咎も受け無かつた。が、ピエールの
 妻との分離で確になつた決闘の噂は、交際社會の大評判に爲つた。ピエールは庶子であつた時分は、保護す

るやうな憐愍で見られて居た。彼が、露西亞帝國に於ての一番金持な未婚者であつた間は、彼はなかく重
 んぜられ、彼の德行に對して、褒めちぎられて居た、が、彼が結婚して了まつて、若い婦人たちや、その母
 親たちが、彼から何も得るべきものを有た無いことになるといふと、彼は、交際社會の人望がグツと減つて
 了まつた。まして、彼は、公衆の最負を身に引くやうな頓智も、慾も無かつたのだから、一層それは甚かつ
 た。今、事件全體の咎が彼の上に投げ掛けられた。彼は氣違のやうに嫉妬深く、そして、彼の父親と同なじ
 な血に濁する憤激の發作のある男だといふ評判があつた。

で、ピエールが發つてから後で、エレンが彼得堡へ歸つて來るといふと、總ての知人たちに、親切に迎へ
 られたばかりか、尙その上に、エレンの心配に對する應報であつた尊敬の陰を以て迎へられた。談話が夫の
 ことに觸れるといふと、エレンは、威嚴の表情を取つた、それは、その意義は自分にも分から無かつたけ
 れども、エレンの特質の掛引がさう爲るやうにエレンを促したのであつた。その表情は、エレンが何にも云
 はずに自分の苦痛を堪へやうと決心して居ること、夫は神がエレンの身に負はせた十字架であることを、
 暗示したのであつた。

公爵ヴァシイリは、もつと遠慮無く自分の説を公言した。彼は、談話がピエールのことに向くといふと、
 肩を揺すつた、そして、自分の額に指さし爲て、云つた――

「頭が傷んで居る、私は何時も云つて居つたんぢやが」

「私は、貴下より前にさへさう云つて居りましたよ」と、アンナ・バアヴロヴナはピエールに就て云つて
 居た。「私はあの時分、直ぐ、誰方の前でも」(アンナ・バアヴロヴナは自分の方が早いといふことを主張つた
 のだ)「彼人は、今の時代の不埒な思想で腐敗させられた狂氣の若者だと云ひました。誰方も彼人のことを有

頂天になつて寝ておいでの時分に、私は何時もさう云つて居りました。で、その時は、彼人が外國から歸つたばかりであつたんですが、貴下がたは、彼人が、私の夜會で、マリアを氣取つて見やうと爲たことを記憶しておいでですか？。で、それが斯ういふ結末になりましたやありませんか。その時分です、私は此の結婚には反對でした、そして、後で斯う爲つて来るのを悉皆豫言したんですよ」

アンナ・バアヴロヴナは、尙且前の通り、自分の休日に夜會、即ち、アンナ・バアヴロヴナばかりがやることの能きる天稟を有つて居たやうな夜會、それには、アンナ・バアヴロヴナの所謂「眞の上流社會の選抜、彼得堡の交際社會の知識要素の精華」が集められる夜會を、やつて居るのであつた。斯ういふ風に立派な人が集まる外に、アンナ・バアヴロヴナの夜會は、尙又、女主人が、會衆を持てなす爲めに何時も何處かから見付けて来る誰か新しい面白い人が出るので名高かつた。まだ、その上に、彼得堡での宮庭社會の溫度を示めず政治上の寒暖計の點が何れ位であるか、その夜會ほど判然と確實に分かるところは、何處にも無かつた。

千八百〇六年の終末頃、普魯西軍がナポレオンの爲めにエナやアウエルスタットで大敗させられたことや、普魯西の城塞の大部分が降伏したこと、悲しい詳報が悉く着して居た時、わが軍隊が最早普魯西に入りつつあつて、わが國とナポレオンとの第二の戦争が始まり掛つて居た時に、アンナ・バアヴロヴナは例の夜會の一つをやつて居た。「眞の上流社會の選抜」は、夫に捨てられた愛嬌深い不幸なエレンや、モントマールや、維也納から歸つたばかりの愛嬌深い公爵イボリイトや、二人の外交官や、年取つた伯母や、何時もその會では「非常に傑い所のある人……」といふ名で指される若い男や、新任の宮女とその母親や、其他五六人のそれほどは高い身分で無い人々などであつた。

アンナ・バアヴロヴナが、その晩、客の款待の爲めに持ち出した新規なものは、普魯西軍からの特使として今着いたばかりの、そして、極く高い地位の人の幕僚であつたボリス・ツルベエツコイであつた。

その夜會で、政治上の寒暖計が示めて居たところは、大凡次のやうなものであつた——

「歐羅巴の有らゆる君主や、將軍たちが、吾々全體に、斯ういふ懊惱や苦痛を起させやうといふ目的で、有らん限りの力でボナパルトに諛はうとまよ、吾々のボナパルトに關する説は決して變ら無いのだ。吾々はその問題に對する吾々の考へやうを遠慮無く公言することを止め無い、そして、普魯西王や其他の人々に向つては、「ますくお氣の毒だ」と云ひ得るばかりなのだ。『自業自得さ、ジオルジュ・ダンダン』、唯ださういふだけなのだ」

これが、政治上の寒暖計がアンナ・バアヴロヴナの夜會で示めて居たところであつた。

客の款待として提出されるのであつたボリスが、客室へ來た時には、會衆の殆ど全體が集まつて居た、そして、アンナ・バアヴロヴナの指導の下に、談話は、塊地利との外交上の關係や、その國との同盟の希望に就て、行はれて居た。

ボリスは、勢ひ好く、血氣好く、男らしい顔貌で、參謀官の立派な制服を着て、客室へ悠々と歩き込んだ。彼は、定例通りに伯母さんに挨拶を爲しに導かれた、で、それから一般の會衆の裡へ入つた。

アンナ・バアヴロヴナは、接吻させる爲めに自分の萎びた手をボリスに與へた。彼の知ら無かつた五六人に彼を紹介し、そして、一々先方の人物を囁語で説明した。「公爵イボリイト・クラアギン、丁抹代理公使のモシユ・クルグ、思想の深い學者」とか、或は唯だ「モシユ・シイトフ、非常に若い所のある人……」——その若い男は何時もさう云はれて居た——など云ふのであつた。

アンナ・ミハアロヴナの骨折のお庇蔭と、自分自身の趣味や、自分の控へ目な品性の特徴などで、ボリスは、最早この頃では、軍隊で極く都合の好い位地を得ることができた。彼は、極く高い地位の人の幕僚であつた、普魯西で非常に重要な任命を得た、そして、特使として、今其所から歸つたところであつた。彼は、オルムツツで非常に面白いと思つたその不文の法規、そのお庇蔭で、中尉が將官よりも無限に高い位地に居られるといふその法規や、軍隊に於て成功するのに必要なことは、努力でも、勤勞でも、勇氣でも、忍耐でも、無くして、唯だ進級をさせ得ることの能き人々に取り入る技術ばかりであることを、十分に咀嚼した、そして彼は自分の昇進の速いのに我ながら屢々驚き、何で他の人々はその秘訣を捉へ損なふのだらうと怪んだ。彼の生活法全體、舊友との關係全體、將來に對する彼の計畫全體が、さういふ發見の結果として、全然變られて了まつた。彼は裕福では無かつた、が、彼は、他の人々よりは奇麗に着る爲めに最後の銅貨まで費やした。汚い馬車に乗るやうなことを爲したり、古い制服で彼得堡の街で見られたりするよりは、寧ろさまたまな快樂の方を思ひ切る方が宜いと思つて居た。彼は、高い位地の、自分の利益になりさうな人々ばかりと知合になることを求め、又さういふ人々と親密になることを努めた。彼は、彼得堡を愛し、莫斯科を卑しんだ。ロストオフ家のことや、ナタアシャに對する自分の小兒らしい情熱などの記憶は、彼に取つては、可厭で堪まら無かつた、そして、彼は、軍に加はつてから以來、一度もロストオフ家へ行か無かつた。

アンナ・バアヴロヴナの客室では——そこへ入るやうになつたのを、彼は、その後の昇進の重要な一階段と見て居たのだが——彼は、直ぐにその機會を捉へた、そして、アンナ・バアヴロヴナをして彼が供する有ゆる興味を十分に利用させたと同時に、彼自身は有ゆる容の顔を注意深く見守つて、居合した人々のうちの何の人に對しても、その人と親密になることの可能や利益の價ぶみを爲て居た。彼は、自分の席として指

された美人エレンの傍の席に就いて、一般の談話を聽いて居た。

「維也納は、提言された條約の諸根柢をば、最も華々しい成功が續いても、それは手の遠く所まで來ないだらうといふ位にまで、到底達し難いものだ」と考へて居り、その諸根柢を、吾々が得る手段が何か有るや否やを疑つて居ります。これが、維也納の内閣の言語そのまゝなのでございます」と、丁抹の代理公使が云つた。

「疑ふのはなか／＼禮儀が厚いね」と、皮肉な笑顔で、思想の深い學者が云つた。

「吾々は維也納の内閣と、奧地利皇帝とは、區別して見なければなりませんよ」と、モントマルが云つた。「奧地利皇帝は左様なことはお考へなさらないのです、さういふことを云ふのは内閣ばかりなんです」

「あゝもし、親愛な子爵」と、アンナ・バアヴロヴナが唇を容れた、「歐羅巴は決して吾々の誠實な同盟國ではありますまいよ」、アンナ・バアヴロヴナは、佛蘭西人に話し掛ける時には、佛蘭西語の特別に巧い所を見せなければならんと思つたのか何うだか「歐羅巴」を「リュウウロオ」と云つた。

其所で、アンナ・バアヴロヴナは、ボリスに口を開かず目的で、談話を普魯西王の勇氣と確乎して居るところに向けた。

ボリスは、談話を爲て居る人を注意深く聴きながら、自分の番が來るのを待つて居た、が、それと同時に、幾度も美人エレンを見返るだけの餘裕を持つて居た。エレンは、幾度も奇麗な若い參謀官の眼を笑顔で見返した。

極く自然に、普魯西の態度を話して居て、アンナ・バアヴロヴナは、グロガウへの旅行のことや、その時見た普魯西軍の状態を話すやうにボリスに頼んだ。ボリスは、生粹の正しい佛蘭西語で、極く緩然と、軍

隊や、宮庭の極く面白い物語を詳しく衆皆に爲したが、力めて、自分が話し居る事實に就ては、自分自身の意見述べることを避けたのであつた。暫時は、ボリスが會衆の全注意を獨占した、そして、アンナ・バアヴロヰナは、容の款待にと持ち出したその新規なものが、衆皆に大受けに受けられたことを感じた。

會衆全體のなかで、ボリスの物語に對して一番多く興味を示したのは、エレンであつた。エレンは、幾度も、彼の旅行に就て、種々なことを尋ねた、そして、普魯西軍の状態をば非常に面白がつて居たやうに見えた。ボリスが話したはるや否や、エレンは何時もの笑顔でボリスに振り向いた。

「貴下何うしても是非宅へ入らしてくださいませよ」と、エレンは、ボリスには分から無い何かの理由で、行くのがボリスに取つて何うしても切要であることを暗示する調子で、云つた。

「火曜日の八時と九時の間に。さうしてくだされば、私は非常に嬉しいんですよ」

ボリスは、左様しやうと約束した、そして、エレンと談話を始めやうと爲て居ると、アンナ・バアヴロヰナが、伯母が彼の物語を聞き度がつて居ると托辭けて、彼を側へ引張つて行つた。

「貴下は彼女の夫を御存じでせうね、無論？」と、アンナ・バアヴロヰナは、眼瞼を下けて悲しげな身振りでエレンを指さし爲ながら、云つた。「あゝ、實に不幸な、美しい婦人ぢやありませんか。彼女の前で夫のことを云つちやア不可ませんよ、何卒、云は無いでくださいませよ。彼女には、それほど辛いことは無いんですよ」

(七)

ボリスとアンナ・バアヴロヰナが他の人々の所へ歸つて來た時には、公爵イボリイトが會衆の耳を獨占

して居た。低い椅子から身體を前へ突き出して、彼は云つて居た——

「普魯西王」で、さう云つて、笑つた。衆皆彼の方へ振り向いた。「普魯西王」と、イボリイトは、尋くやうに云つて再笑つて、又元の通り、大きい低い椅子の奥へ、平然と生真面目に身體を据ゑた。アンナ・バアヴロヰナは彼が何か云ふか、少時待つた、が、イボリイトはその上何も云ふ積りでは確に無いらしく見えたので、神を信じ無い無道人ボナバルトがボツダムからフレデリック大王の劍を持つて去つて了まつたことを話し始めた。

「それは、フレデリック大王の劍でして、それは私が……」と、アンナ・バアヴロヰナは云ひ始めて居た、が、イボリイトは、又「普魯西王……」といふ言語で、遮ぎつた。

で、衆皆が彼が何と云ふか聞かうと振り向くや否や、詭言を云つて、何にも云は無く爲つた。アンナ・バアヴロヰナは顔を變めた。イボリイトの信友であつたモントマルは斷乎として云つた。

「おい、普魯西王が何う爲たと云ふのかね？」

イボリイトは、自分の笑ひに恥ぢ入つたとも云ひさうに笑つた。

「いゝや、何でも無いんだ。僕は唯だ……」。(彼は、維也納で聞いた洒落を繰り返し度くつて、夜會に來てから以來、それを云ひ出さうと骨折つて居たのであつた)。「僕は唯だ、普魯西王の爲めに戦争を爲るのは不可といふ積りだつたんだよ」(註——「普魯西王の爲めに何事かを爲る」といふのは、それほどの理由無くし)

ボリスは用意深い微笑を爲た。その微笑は、取りやう次第で、輕侮にもなり、洒落を賞めたことにもなるものであつた。他の人々は誰も彼も笑つた。

「随分ですね、貴下の洒落は、なか／＼巧いけれども、酷いんですわ」と、アンナ・バアヴロヰナは、イボ

ライトに向けて、小さい皺だらけの指を振つて云つた。「吾々は普魯西王の爲めに戦争を爲て居るのではありませぬよ、主義の爲めに戦かつて居るんですわ。まあ、口の悪い方ね、この公爵イボライトは」

談話は、その晩は、少しもだれ無かつた、そして、時事問題に向いた。終末頃になつて、皇帝から賜つた褒美のことが論題になつた時には、談話が殊に調子付いたのであつた。

「もし、昨年はN・Nが御眞影の付いた嗅煙草函を賜つたのです」と、思想の深い學者が云つた。何故S・Sは同なじ御恩賜品を賜らんでせう？」

「失禮ですが、御眞影の付いた嗅煙草函は唯だ恩賜品です、勳功の賞ではありません」と、一人の外交官が云つた。「唯だの賜り物なんです、寧ろ」

「先例が幾つもあります。例へばシユワルツェンベルヒの如き」

「そんな筈はありません」と、今一人がやり返した。

「賭を爲ても宜しい。緩章は別です」

誰も彼も、暇乞を爲に立ち上つた時に、その晩ちう極く少し、か物を云は無かつたエレンは、火曜日に來て呉れといふ依頼、寧ろ媚びるやうな、強い命令を以つて、再ボリースに振り向いた。

「それは、私には極く大切なことなんですから」と、アンナ・バアヴロヅナを見返りながら、エレンは笑顔で云つた。アンナ・バアヴロヅナは、自分の仕へて居る皇后のことに少しでも云ひ及ぶ時には、必然表はすのであつたその同なじ悲しうな微笑で以つて、エレンの依頼を取り持つた。

ボリースがその晩普魯西軍に就て云つた或る言語から、エレンは俄然に、彼に是非逢ふ必要を發見したらしかつた。エレンは、ボリースが火曜日に行けば、その必要の理由を彼に知らせると約束して居るやうに見

えた。ボリースが、火曜日の晩に、エレンの家の非常に立派な客室に入つた時にも、彼が、訪問し無ければなら無いといふ切實な理由に就ては、少しも明白な説明を得無かつた。他の客が幾人か居た。伯爵夫人は彼にホンの少し、か話を爲無かつた、そして、歸り際に、彼がエレンの手に接吻する時になつて始めて、異様な眞面目な顔で、不意に囁いた——

「明日食事にお出でくださいよ……晩に……是非來てくださいませよ……おいでなさいよ」

彼得堡でのその逗留の間、ボリースは、極く親密な間柄になつて、伯爵夫人ベズウホフの家へ始終出入りつて居た。

(八)

戦争が始まつた、そして、その舞臺が露西亞の國境へだん／＼近寄つて居た。何方を向いても人類の敵、ボナバルトに對する呪咀が聞かれた。村々では、補充や後備の召集があつた。戰場からは、例の通り虚偽なるが故に種々に解釋せられる最も矛盾した種類の報知が來た。

老公爵ボルコオンスキイ、公爵ボルコオンスキイ、公爵嬢マリイヤの生活は、千八百〇五年以來、非常に變つた。

千八百〇六年に、老公爵は、その時分全露西亞ちうで民兵の武裝を整へる爲めに設けられた八人の總司令官の一人に任ぜられた。自分の子息が死んだと信じた時の間殊に眼に立つて居た衰弱と老齡に拘らず、老公爵は、皇帝自身から命ぜられた義務を辭することは然るべからざることだと考へた。で、彼の活動に對するこの新方面が、彼に新たな精力と力を與へた。彼は、自分の命令の下に置かれた三地方を始終巡回して居た。

彼は、彼の任務の遂行に於ては頑冥といふべきまで几帳面であり、部下に對しては残酷といふべきまで嚴重であり、そして、事務の最も微細な點まで自身で立ち入つたのであつた。

公爵嬢マリイアは、最早父親から數學を習は無かつた、そして、彼が家に居る時には、乳母と小さい公爵ニコライ(祖父は孫をさう呼んで居た)を伴れて、朝々父親の部室へ行くばかりであつた。幼児の公爵ニコライは、その乳母や年取つた乳母のサヴィイシナと一緒に、母親の部室であつた部室々々を占領して居た、そして、公爵嬢マリイアは、その力で能きるだけ、小さい甥に對して母親の代りに爲つて、小兒部室で、自分の時の大部分を費した。マドモアゼル・プウリヤンヌも又、その小兒が非常に好であるやうに見えた、で、公爵嬢マリイアは、屢々、自分を犠牲にして、小さい天使(公爵嬢は小兒をさう呼んで居た)を愛撫したり、それと一緒に遊んだりする快樂を自分の友達に譲つたのであつた。

荒涼 丘の寺院の祭壇の傍に、小さい公爵夫人の墳墓の上に、小さい禮拜堂があつた、そして、禮拜堂の裡には、伊太利から持つて來た、天に向つて飛ばうと翼を廣げた天使を表はして居る大理石像が置いてあつた。天使の上唇が、微笑まうとして居るかのやうに上つて居た、そして、或る日、公爵アンドレエーと公爵嬢マリイアは、禮拜堂から出て來ながら、相互に、不思議なことに天使の顔が小さい公爵夫人の顔に似て居るやうな氣が爲ると、告白した。が、尙不思議なことは、これは、公爵アンドレエーは、妹に告白は爲無かつたけれども、塑像家が天使の顔に出させた表情に於て、公爵アンドレエーは、死んだ妻の顔で讀んだ、

「あ、何で貴下は私を斯様にしたんです」といふ非難の同なじ言語を讀んだことであつた。公爵アンドレエーが戰場から歸つて間も無く、老公爵は、彼に財産の一部を譲つて荒涼 丘から四十露里ほどの所にあつた大きい領地のボグチャアロヴァを彼に與へた。荒涼 丘に附いて居る傷ましい記憶から選

れる爲めでもあり、公爵アンドレエーには父親の偏屈を何時までも堪へて居ることは到底能き無さうに感ぜられた爲めでもあり、又獨棲をやつて見度かつた爲めであつて、公爵アンドレエーは、ボグチャアロヴァを使ふことにして、其所に家を持ち、そして、其所で自分の時の大部分を費した。

アウステルリツの戦の後、公爵アンドレエーは、決して再軍隊には入るまいと固く決心した。で、戦争が始まつて、誰でもが軍隊に勤め無ければなら無いやうになるといふと、彼は、戦闘員の勤務を遁れるやうにと、父親の部下になつて、民兵徵募の任務に就いた。

千八百〇五年の戦役以來、老公爵と子息とは、宛然位地を取り換つことをしたやうな風に爲つた。老公爵は、活動に刺戟されて、今度の戦役から最上の結果を豫期した。公爵アンドレエーは、これに反して、戦争には少しも關係せず、そして、心の裡では自分の無活動を残念がりながら、今度の戦役の裡には、悪いことの何も見無かつた。

千八百〇七年の二月の二十六日に、老公爵は巡視の旅に出た。公爵アンドレエーは、父親の留守には何時もやるやうに、荒涼 丘に止まつて居た。少ニコルウシカはその三日ほど病氣であつた。老公爵を馬車で送つて行つた馭者が、町から公爵アンドレエーに宛た書類や手紙を持つて來た。手紙を持つた侍僕は、書齋で若公爵を見無かつたので、公爵嬢マリイアの部室へ行つた、が、彼は其所にも居無かつた。侍僕は、公爵が小兒部室に居ると聞いた。

「もし、閣下、ベツルウシヤが書類を持つて参りましてございますが」と、小兒部室附の女中の一人が、小兒の小さい椅子に坐つて居た公爵アンドレエーに聲を掛けて、云つた。公爵は、眼を見張つて、震へる手で、水の半分入つて居る杯へ、藥壘から、幾滴か落して居る所であつた。

「何だ？」と、彼は腹立たしく云つた、そして、手が震へて思はず壘から杯へ、幾滴か落し過ぎた。彼は、杯から薬を床へ滾し捨てた、そして、少し水を呉れと云つた。女中はそれを彼に與へた。

部室には、脇掛椅子が一對、小兒寢臺、卓子、小兒卓子、それから、公爵アンドレエーの坐つて居る小さい椅子があつた。窓々は窓掛が下してあつた、そして、卓子の上には、一本の蠟燭が、光明が寢臺の上に落ち無いやうにと、手帳で圍はれて、燃えて居た。

「貴下」と、公爵嬢マリイアは、自分が起つて居た寢臺の傍から兄の方へ振り向いて、云つた。「もう少し待つた方が宜いでせう……後で」

「おい、何卒、私の云ふ通りに爲て呉れ、何を下らんことばかし云つてるんだい、お前たちは何を爲るんでも延々なんだ。で、とゞの結局は何時も斯うなんだ」と、公爵アンドレエーは妹を苦める積りらしく、むかつ腹を立てた囁語で云つた。

「貴下、起き無い方が眞個に宜くは無くつて、眠ちまつたんですよ」と、公爵嬢は懇願の聲で云つた。公爵アンドレエーは起ち上がり、杯を手にとって、寢臺へと、足爪立て、行つた。

「眞個に起しちやア不可のかなア」と、彼は躊躇しながら、云つた。

「貴下の考慮次第よ——眞個に……私さう思つたんです……けども、貴下の考慮次第よ」と、公爵嬢マリイアは、自分の意見が勝つのを怖れ恥ぢたらしい態度で云つた。公爵嬢は、囁語で呼んで居る女中の方へ、兄の注意を引いた。

それは、二人が熱氣のある小兒を眠ずに世話した二晩目の夜であつた。自分たちの抱へ醫者を信ぜずに、町へ喚びにやつてある醫者の來るのを待ちながら、その間始終、二人は彼れ此れと種々な治療を試みて居た。

不眠で、心がモヤクヤし、疲れ切つて居て、二人は相互に心配を洩し合ひ、相互に難癖を付け合ひ、そして喧嘩した。

「大旦那からのお手紙を持つてベッルウシヤが」と、女中が囁いた。公爵アンドレエーは出て行つた。

「え、畜生」と、彼は、腹立たしく罵つた。で、父親からの傳言の命令を聞き取つてから、父親の手紙や他からの消息を取つて、小兒部室へ返つて行つた。

「何？」と、公爵アンドレエーは尋ねた。

「寸毫も變化は有りません、少しお待ちなさい、後生ですから。カルル・イヴァアニイチが、眠るのは何よりも宜い、と何時も云ひますのよ」と、公爵嬢マリイアは、溜息しながら、云つた。

公爵アンドレエーは、幼兒の傍へ行つた、そして、觸つて見た。幼兒は燃るやうに熱かつた。

「カルル・イヴァアニイチも絲瓜もあるもんか」

彼は、薬の幾滴か入つて居る杯を取つた、そして再、寢臺へ行つた。

「アンドリュウシカ、不可ませんよ」と、公爵嬢マリイアが云つた。

が、公爵は、怒つたと同時に心痛の顔容で公爵嬢を睨み付け、杯を持つたまゝで、小兒の方へ身體を屈めた。

「けれども、俺がさう爲度いんだ」と、彼は云つた。「さア、お願いだ、これを遣つて呉れ……」

公爵嬢マリイアは肩を揺つた、が、従順く杯を取つた、そして、乳母を喚んで、薬を小兒に遣り始めた。

幼兒は、泣き出して、ゼイ／＼云つた。公爵アンドレエーは、顔を擧め、自分の頭を攫んで、部室を出て行つて、次の部室の長椅子に坐つた。

手紙は尙彼の手に在つた。彼は、機械的にそれを開けた、そして、読み始めた。老公爵は、何時もの大きい、跳ね飛ばしたやうな手蹟で、所々略字を使つて、青い紙へ、次のやうに書いて居た——

「私は今、特使に依つて、虚偽で無くば、非常に嬉しい報知を受けた。ベニグセンが、アイラウ附近でボナバルトに對し大勝利を得たらしい。彼得堡では、誰も彼も大喜悦で、賞が、惜氣無しに、軍へ送られた。奴は獨逸人ではあるが——私は奴を祝する。コルチエーヴアの司令官、ハンヅリイコフとかいふ男、私には、奴が何を爲て居るのか、一圓合點が行かぬ。其所の兵員、規定の軍需品全體が未だ少しも到着し無い。直ぐ、其所へ馬を驅つて行つて、この週うちに悉皆此所へよこさなければ、私が奴の首を斬つてしまふと云つて呉れ。私はベテエンカからも普魯西アイラウの普魯西の戦の手紙を貰つた。奴はその戦に加はつたのぢや——それは、全く眞實ぢや。干涉するに及ばぬ奴等が干涉し無ければ、獨逸人さへボナバルトを破ぶるのぢや。奴は潰亂して、逃て行き居るといふ話ぢや。是非コルチエーヴアへ馬を飛ばせて行つて、遅滞無く用を濟まして呉れ」

公爵アンドレエーは、溜息した、そして、も一つの手紙を開けた。それは、一枚を細字で書き潰したピリイビンからの手紙であつた。彼は、それを讀まずに疊んで了まつた、そして、「是非コルチエーヴアへ馬を飛ばして行つて、遅滞無く用を濟まして呉れ」といふ言語で終はつて居る父親の手紙を、始めから讀み返した。

「いゝや、ご免だ、小兒が少し快くなら無いうちは行か無い」と、彼は思つた、そして、戸口へ行つて、

小兒部屋を一寸と覗いた。公爵嬢マリイアは、尙且寢臺の側に立つて、徐に幼兒を揺ぶつて居た。

「あゝ、その他に書いて来た不快なことは何だつたらう？」公爵アンドレエーは父親の手紙の内容を考へた。「左様だ。吾軍が、丁度俺が居無いた時に、ボナバルトに對して勝利を得たんだ。左様だ、左様だ、何も俺を嘲弄して居るんだ……宜しい、それも、結構だ……」

で、彼は、ピリイビンからの佛蘭西語の手紙を讀み始めた。彼は、その半分も解せず、讀んだ、唯だ、彼が、餘まりそればかり心配して、考へて居た事柄から、寸時でも遅れ度いばかりに、讀んだのであつた。

(九)

ピリイビンは今外交官の資格で、軍の總司令部に付いて居た、そして、彼は、佛蘭西語で、佛蘭西の洒落を入れ、佛蘭西流の云ひ廻して書いて居たけれども、全然露西亞流の、偏頗無き自己批評や、自己嘲弄で、全戦役を描寫して居た。ピリイビンは、外交上用心を爲無ければならぬ義務のあるのは、彼に取つては苛責の苦しみであることや、軍中で行はれて居る事柄を見て居ると胸の裡に溜まつて来る癩癩を、その人に向けて注ぎ出すことの能きる、信任し得べき通信先として公爵アンドレエーを有つて居るのが、彼に取つては幸福であることを書いて居た。手紙はアイラウの戦より少し前の日附であつた。

「アウステルリッツでの吾々の成功以來、ご承知の通り、わが親愛な公爵」と、ピリイビンは書いて、「僕は總司令部を離れ無いで居る。確に僕は、戦争に興味を持つやうになつた、そして、それが僕には尙且宜いのだ。僕がこの三月間に見た事柄は、誰も眞實だとは思へ無いほどのことなんだ」

僕は先づ大序から始めやう。ご承知の通り、「人類の敵」が普魯西人を攻めて居る。普魯西人は三年間に三

遍吾々を欺ましたきりの、吾々の誠實な同盟國なんだ。吾々は彼等の爲めに起つたが、「人類の敵」は吾々の立派な言語などは一向構は無かつた、そして、例の無作法な野蠻なやり方で、普魯西人が始めた觀兵式を終はる間隙も與へずに、普魯西人に跳び掛つて、お禁厭のやうな手品を二つ三つやつて、普魯西人を滅茶々に叩き付け、そして、ポツダム宮殿へ行つて、其所へ御輿を据ゑるといふことになつて了まつた。

「予は最も誠實に」と、普魯西王はボナバルトに向けて書いて、「陛下が陛下ご自身にお快きやうに、予の宮殿にて迎へられ、取り扱かはれ給はんことを希ふ、而して、予は、取り急いで、その目的を以つて、現下の事態が容す限りの有らゆる方法を執らんとす。予は、その點に於て、或は成功に庶幾かりしならんか」

普魯西の將官たちは、佛蘭西人に鄭重に振るまふのを互に誇り合つて居る、そして、最初の勸降で、自等の武器を逆にした。

一萬の兵を有つて居るプロガウの守備兵の長は、若し降服を勸告されたら、何う爲すべきであらうと、普魯西王に尋く……これは悉皆實際の事實なんだ。

要するに、吾々の軍事的態度で効果を得るばかりを頼にして、吾々は、何時の間にか本気で戦争をやつて居ることになり、そして、お負けに、普魯西王と一緒に且その王の爲めに、吾々自身の國境で戦争をやつて居ることになつて居るんだ。

何も彼も準備は十分だ、唯だ一つ一寸としたものが缺けて居るばかりだ、即ち、總司令官だ。アウステルリッツの成功は、若し總司令官が彼様な若く無かつたら、もつと目覺ましかつたらうと思はれて居るので、八十年代の人々がすつと見渡される。で、プロソロオフスキイとカアメンスキイの二人のうちで、後者が選ばれる。その將軍は、スッオロフ流に圓蓋馬車でやつて来る、そして、大喜悅の喝采で迎へられる。

四日に、彼得堡から、最初の郵便が来る。郵便物は元帥の部室へ持つて行かれる、彼は何でも自分で爲るのが好きだからだ。僕は、手紙を選び分けて、吾々宛のものを取つて来る爲めに、呼ばれる。元帥は、吾々がさう爲るうち、傍で見えて居る、そして、自分宛ての包を待つて居る。吾々は探す——一つも無い。元帥は待兼ねて、自分でやり出す、と、皇帝から伯爵I・や、公爵V・其他に宛てた手紙を見付ける。すると、元帥は、何時もの恐しい權幕になつて了まふ。彼は、誰にも對して猛り立つ、手紙を取りあける、それを開ける、そして、皇帝から他人に宛てた手紙を読む。

「やア、では俺は斯ういふ扱ひを受けとるぢやな。俺には何の信任も無いんぢやな。やア、俺に始終眼を着けて居れと命ぜられとるんぢやな、宜しい、勝手にし居れ」

其所で、彼は、將軍ベニグセンに彼の名高い命令を書いて遣る。

「予は負傷した、馬に乗れ無い、故に軍を命令することが能き無い。貴下は、貴下の敗れた軍團をブルツスクへ導びかれた。此所では、軍は何の掩護も無く、薪炭、糧秣に缺けて居る、故に、貴下は、貴下が昨日伯爵ブクスヘフデンに報告せられたやうに、吾國の國境へ退却することを考へ無ければならぬ、今日さうせられよ」

「馬上で諸所に征行せし爲め」と、彼は皇帝に向けて書く、「鞍擦を生じました、それが、前の旅行以來、私の馬に乗ること、随つて、非常に広い地域に廣がつて居る軍を統率することを妨げます。故に、私は私に次で故參である將軍、伯爵ブクスヘフデンに前陳の統率權を引繼ぎました。同上の權に伴ふ私の隨員、附屬物を悉く彼に引渡し、且、一日分の麵包のみが残り居り、又、オステルマン及びセドモレエツキイ等の聯隊長の報告に依れば、或る聯隊では皆無であり、地方の農夫が有らゆる物を食ひ盡くしたのを見ま

したので、若し麵包が缺乏するやうであつたら、もつと普魯西の内部へ退却せよと助言して置きました。私は、癒るまでオスツロレンカの病院に居ります。その病院に就ても、若し、わが軍が今一週間現今のまゝの野營で居りますれば、春になれば一人も健康なものは残るまいといふ報告を、謹んで捧呈致して置きます。

何卒、恩寵により、その爲めに選拔せられたる大いなる光榮ある任務を盡すの能無きことに於て十分恥辱を受けたる老人を職務より解放せられんことを願ひます。私は、司令官と云はんより寧ろ秘書官の役を勤めざるを得ざるが如きこと無きやう、此所の病院に在つて、退職に對する陛下の最も優渥なるご聽許を待つて居ります。私の退職は、更に何等の動搖をも生じません——一人の盲人が軍を去る、唯だそれだけでござりまする、私より以上の者が、露西亞に何千もあるのでござりまする」

元帥は、皇帝に對して怒つて居る、そして、吾々全體を罰するのだ。何と論理的では無いか。それが第一の事實なんだ。その次に、さうあるべき通り、面白いこと、筥棒なことが起つて来る。元帥が去つて了まつてから、吾々は、敵の見える所へ来て、戦鬪を開かなければならんやうに見える。ブクスヘフデンが先任の權で總司令官である、けれども、ベニグセンは、さういふ意見では無く、總司令官は寧ろ敵に面して居る自分や自分の軍團の方だと思ふ、で、彼は獨逸人の所謂「自分の手で」戦を爲る機會を攫み度いと思ふ。彼は戦ふ。それがブルツスクの戦だ、これは大勝利だといふことなんだが、僕の説では、決してさうでは無い。吾々文官は、戦が勝つたか負けたかを決するのには、ご承知の通り、まことに氣の利が無い觀方を以てするのだ。戦の後で退却した方が負だ、さう吾々は云ふんだ、で、その通りで行けば、吾々はブルツスクの戦には負けたんだ。

要するに、吾々は、戦の後で退却する、が、吾々は、勝利の報告を持たせて彼得堡へ使者を遣る、そして、將軍は自分の勝利の報酬に總司令官の稱號を彼得堡から受ける積りで、ブクスヘフデンに統率權を渡さ無い。この空位の間に、吾々は非常に面白い、如何にも斬新な機動計畫を始める。その目的は、元よりさうあるべき通りに、敵を避けるのでも、攻撃する爲めでも無い、反つて唯だ先任の權で吾々の統率官になるべき管であつた將軍ブクスヘフデンを避ける爲めばかりなんだ。吾々は、徒渉の能き無い河を越す時でさへ、吾々の敵——最早その時は、それはボナパルトでは無く、ブクスヘフデンである——から吾々自身を隔たらず爲めに橋を焼いて了まふ位熱心な勢で吾々の目的を遂行する。吾々を彼から救つた吾々の見事な機動の一つのお蔭で、將軍ブクスヘフデンは、優勢な敵軍に殆ど攻撃されて、捕虜になる所であつた。ブクスヘフデンは吾々を追跡する、吾々は逃げる。彼が吾々の居る河の側へ渡るや否や、吾々は向ふ側へ渡り返る。到頭、吾々の敵ブクスヘフデンが吾々に追付く、吾々を攻撃する。二人の將軍は喧嘩する。ブクスヘフデンの方は、決闘を申し込んだ位で、ベニグソンの方には、癩癩の發作があつた。

が、その危機一髪の際に、吾々のブルツスクの勝利の報を持つて行つた使者が、總司令官に吾々の方が任せられた辭令を持つて来る、それで、第一の敵、ブクスヘフデンは、倒すことができたので、吾々は第二の敵、ボナパルトのことを考へることが能きるやうに爲る。が、その刹那に起つたものは、第三の敵の蜂起に外なら無いのだ、これは、麵麩、肉、乾菓、干草、其他の何だ彼だを呉れと烈しく喚びだした「聖軍」なんだ。貯藏庫は空虚だ、道路は不通だ。「聖軍」は自ら掠奪を始める、而も、それが、前の戦役を見た眼では、到底思ひ寄らんやうな風でなんだ。各聯隊の半分が無規律の隊團になつた、そして、火と劍を以てこの地方を荒して居るんだ。住民は全然破滅してしまふ。病院は病人が溢れて居る、そして、何處も彼處も饑饉なん

だ。二度まで、總司令部が劫掠者の團隊に攻撃された、そして、總司令官自身、さういふ奴等を追ひ拂ふ爲めに、一大隊の兵の出動を頼まなければならなかつた位であつた。さういふ攻撃の一つに於て、僕の空虚の革函と寢衣が持つて行かれて了まつた。皇帝は、各部隊長に劫掠者を射ち殺す職權を與へやうとの仰せなんだ、が、僕は、それは軍の半分が残りの半分を射つといふことになりはしまいかと、恐れるんだ」

公爵アンドレーエーは、最初は眼ばかりで読んで居た、が、何時の間にか、彼が読んで居る事柄が（彼はビレイビンの云ふことは、何れ位まで信じて宜いか、それは知つて居ただけれども）だん／＼多く注意を引くやうになりだした。その條下まで読んで來るといふと、彼は手紙を揉みちやにして、投げ捨て了まつた。腹が立つたのは、讀んだ事柄では無かつた。彼はすつと遠くの——自分には掛け構ひの無い——生活が、自分を悩ますことが能きるのが、腹が立つたのだ。彼は眼を瞑ふつて、讀んで居た事柄に對する興味を根こそぎ追ひ拂つて了まはうとでも爲るかのやうに、手で額を擦すつた、そして、小兒部室の様子に耳を傾けた。不意に彼は異様な音が戸越しに聞えたやうに思つた。狼狽が彼を襲つた。彼は、手紙を讀んで居る間に、小兒に何か起つたのでは無いかと恐れた。小兒部室の戸口まで爪立つて歩いて行つて、そして、開けた。入つて行つた途端に、彼は、乳母が恐れた顔で彼から何か隠くさうと爲たのを見た、そして公爵嬢マリイヤは、最早寢臺の側には居無かつた。

「貴下」と、彼は、後方で公爵嬢マリイヤが囁くのを聞いた——絶望の調子のやうに思はれたのだ。長く續いた徹夜と心配の後では往々有る通りに、彼は、根據の無い狼狽に襲はれた。小兒が死んだのだといふ考想が、彼の心へ來た。彼が見たり、聞いたりした總ての事が、その恐怖を確めるものゝやうに見えた。

「しまつた」と、彼は思つた、そして、冷たい汗が額へ出て來た。彼は寢臺は空虚になつて居るのだと信じ、乳母は死んだ小兒の屍骸を隠くさうと爲て居たのだと信じて、我ならぬ風になつて、寢臺へと行つた。彼は帳帷を開けた、彼の急いだ怖れた眼は暫時は小兒を見出すことが能き無かつた。到頭彼は小兒を見た。赤い頬部の小兒は、頭を枕より低い所に置いて、寢臺ちうに身體を伸して臥て居た、そして、睡眠の裡で唇でバクといふ音を爲せ、極く穩かに呼吸を爲て居た。

公爵アンドレーエーは、小兒を見ると、最早全く失つたものを見るかのやうに、喜んだ。

彼は身體を屈ませた、そして、自分の妹が彼に示したやうに、小兒に熱があるか何うかを唇で試めした。和かな額は濕つて居た、彼は手で頭に觸つた——髪さへ濡れて居た、小兒はさういふ十分な發汗であつた。小兒は死んでは居無い、いや、それ所か、危機は全く過ぎて了まつて、快くなつたのが明白であつたのだ。公爵アンドレーエーは、その小さいか弱い者を、攫みあげて、自分の胸へギウといふほど抱き締め度くなつて堪まら無かつた。彼は、さう爲るのを敢てし無かつた。彼は小兒の上に押被さるやうにして立つて、その頭や、蒲團の下で見えて居る腕や脚を見詰めて居た。彼は、傍で戦ぎを聞いた、そして、影が寢臺の天蓋の下へ來たやうに思つた。彼は、見返ら無かつた。そして、尙且、小兒の顔を見詰めながら、その規則正しい呼吸を聽いて居た。黒い影は公爵嬢マリイヤであつた。公爵嬢は、忍び足で寢臺に近寄り、天蓋を掛け、そして、それを自分の後方へ落した。公爵嬢は、見返らずに、それが公爵嬢であるのを知つた、そして、公爵嬢に手をさし出した。公爵嬢は、その手を握り締めた。

「發汗して居る」と、公爵嬢は云つた。
「さう云ひに行く所でしたの」

幼児は睡眠の裡で微弱に動いて、微笑んで、そして、枕へ顔を擦つた。
公爵アンドレーエは妹を見た。寢臺の帳帷の下の一帯の半明の裡で公爵嬢マリヤの輝いた眼が、其所に出た来た嬉し涙を持つて、何時もより一層輝いた。公爵嬢は兄の方へ身體を曲けて、寢臺の天蓋に頭を支へさせながら、兄に接吻した。二人は相互に指を振り合つた、そして世間から全く隔てられて三人限りで居るその隠れ場所を出るのが厭であるかのやうに、依然天蓋の下に薄明の裡に立つて居た。公爵アンドレーエは、棉紗の帳帷で髪を突つ立たせながら、先きへ立つて其所を出た。

「うん、今俺に残されたものと云つては唯つた彼一つなんだ」と、彼は嘆息して云つた。

(十)

共済組合の社員として受け入れられてから間もなく、ピエールは、彼の農夫の大部分が居たキーフ縣へ向けて、彼の領地で彼の義務を盡す爲めの指針として書かれた十分な教訓を持つて、出發した。

キーフへ着くといふと、ピエールは、彼の事務本部へ、支配人全體を喚び寄せた、そして、それ等の人々に向つて、彼の計畫や志望を説明した。彼は、彼の農夫を耕奴制から全く解放する爲めの手段を間もなく執る積りであること、その時までには、農夫に過重な労働を充てぬこと、小兒のある女を仕事に出してはならぬこと、農夫に救助を與へるべきこと、悪い行爲に對しては、訓戒を加へるのみで、決して體罰を用ひ無いこと、それから、何の領地にも、病院、養育院、學校を建てるべきことを、支配人たちに話した。支配人の中の五六人（その中には、読み書きが艱然能きる位のもが幾人か居た）は、若い伯爵がさういふことを云ひ出したのは、自分たちの管理方や、自分たちが彼の金錢を竊取することに不満であるからであら

うと想像しながら、ビク／＼して聞いて居た。また他の者は驚愕の最初の衝動が過ぎて了まふと、ピエールの舌の廻らぬやうな口のきゝ方や、彼等が前に聞いたことの無い新しい言語をピエールが用ゐるのなどを、可笑く思つて、面白がつて居た。更に又他の者は、自分たちの主人の聲を聞いて唯だ何も無しに満足して居た。が、幾人かは——その中に總支配人も入つて居たのだが——その演説で以つて、自分たちの利益になる目的を達するには主人に何う爲向けて行つたら宜いかといふ方針を、見定めて了まつた。

總支配人は、ピエールの計畫に非常な同情を表した、が、彼は、さういふ改革以外、今の實狀が甚く悪く爲つて居るのだから、十分に整理する必要があるのだと注意した。

伯爵ベズウホフの莫大な富に拘らず、彼がそれを相續し、世間の評判通り、五十萬留の歳入を受取ることに爲つてから以來、ピエールは、何時も、彼が父親から一萬留の當がひを受けて居た時よりも、餘程不如意に感じたのだ。大櫻に云つて、彼は漠然次のやうな計算に爲ることを知つて居た。大凡八萬が領地の質入に對する利子として、田地銀行へ拂はれて居た。三萬程が、莫斯科の郊外に在る領地、莫斯科の家の維持や、従妹たち即ち公爵嬢たちの生計の爲めに、費つた。一萬五千が、年金として費はれ、そして、それより少し多い位のものが、慈善事業にかゝつた。拾五萬が、伯爵夫人の生計に送られた。七萬程が、諸種な借金の利子に拂はれた。二年以來、新しい寺院の建築に一萬程かゝつて居た。その餘餘——大凡十萬程——は——何うなるのか彼には解らずに——費つて了まふのであつた。で、殆ど毎年、彼は借金を爲無ければなら無かつた。のみならず、總支配人は、火事だの、不作だの、製造場とか、工場を建てる必要などに就て、彼に手紙をよこした。さういふ風で、ピエールが面した第一の義務は、彼には最も資格の無い、又好きでも無いこと——實務に就くこと——であつた。

毎日、ビエールは、總支配人と共に、整理に掛つた。が、彼は、自分のやつて居る事柄が事件を寸毫も進ませ無きことを感じた。彼は、自分の爲る總の事は現實とは全く離れて居ること、自分の努力は實務に何の交渉も無く、更にそれを進行させ無きことを感じた。一方では、總支配人が、事態を能きただけ悪く云ひ立て、借金を拂ふ必要と、耕奴の農夫の勞働を以て新計畫を始める必要とを、ビエールに證明した。が、それにはビエールは同意し無かつた。他方では、ビエールが、解放の爲事を始めるやうに促した、それに對する反對論として、總支配人は、田地銀行からの借金を先づ拂ふべき必要のあること、隨つて、それをやら無いうちは、事件を急ぐことは不可能であること、を、持ち出した。

總支配人は、それは絶対に不可能だとは云は無かつた、彼は、その目的を達する手段としてコストロオマ縣の森や、ヴォルガ下流の土地や、クリミヤの領地を賣つたら何うかといふ意見を持ち出した。が、總てさういふ處分は、總支配人の云ふ所では、非常に込み入つた手續、即ち或る禁止的の條文の廢止とか、或る許可を得るとか、何とか彼とかいふやうなことを爲らなければならぬといふのであつたので、ビエールは到頭話の條路が分からなくなつて、唯だ「左様か、左様か、では、さう爲て呉れ」と、云ふことが能きたばかりであつた。

ビエールは、自分で實務を企だてることの能きやうな實際的の粘り強い所を寸毫も持つて居無かつた、で、實務に就くことは好か無かつた、唯だ、總支配人の前だけ、實務に就いて居るやうに見せ掛けて居た。總支配人も又、主人が實務に干きはることが主人自身の非常な利益であると共に、總支配人自身に取つては非常な不便なことだと認めて居るらしく、主人の前では、見せ掛けて居た。

キイフでは、ビエールは知人を持つて居た、知人で無い人々も、さう爲ることを急いだ、そして、自分た

ちの裡へ来たその地方の一番大きい田地持の、大身代のその若い男を熱心に歓迎した。ビエールを何時も離れ無い弱點の方の誘惑、共済組合の會所へ加入した時自分には一番強い誘惑だと云ひ立てたその者が、抵抗することが能き無い程強くなつて来た。又、彼の生活の毎日、毎週、毎月が、夜會や、晚餐や、朝餐や、舞踏會で忙がしく充たされて、彼得堡のことを思ふ暇を少しも彼に與へ無かつた。ビエールが送らうと思つて居た新生活の代りに、彼は、唯だ前とは違つた周圍の裡で、尙且前通りの同なじ生活を送つて居た。

共済組合の三つの教戒の中で、ビエールは、有らゆる組合員に向つて道義的生活の模範に爲る義務を課する教戒に自分が違つて居無かつたことを認め無い譯には行か無かつた、それから、七つの徳のうちで、彼は——道義と、死を愛すること——の二つを全く缺いて居た。彼は、他方では、他の教戒——人類の進歩を計ること——を守つて居て、それから、他の徳——隣人に對する愛と、寛裕——は持つて居ると思ひ廻らして自ら慰さめて居た。

千八百〇七年の春、ビエールは又彼得堡へ歸らうと決心した。歸る途すがら、彼は、自分の領地全體を巡り、そして、自分が命じたことが何れだけ行はれて居るか、神から自分に托されたもので、自分が今それ

に利益を與へやうと骨折つて居る人民が今何様な状態であるのか、自分で親しく確かめやうと思つた。

若い伯爵の種々な氣まぐれをば——伯爵に取つても、自分に取つても、又伯爵の農夫に取つても有害な——殆ど狂氣の沙汰と見て居た總支配人は、それでも、伯爵の弱點に對して幾らかの讓歩を爲した。耕奴の解放は到底行はれ難いことだと唱へ續けて居ると同時に、彼は、領地全體に於て、大規模な學校や、病院や、養育院の建築を、伯爵の巡回の際に直ぐ始めることの能きやうな手筈に爲、伯爵が、到る處で、彼の好みに合は無いことの知れて居た儀式的な行列などでは無く、總支配人の見た伯爵の性質では、伯爵が感動して

迷はされて了まふだらうと思はれる、聖像、麵麩、鹽を以ての全くの尊信的の謝恩の歡迎に出會ふやうに、總支配人は、準備して置いたのだ。

南方の春や、維也納馬車での安氣な速い旅や、道途の物靜なことが、ビエールの心に喜ばしい影響を與へた。前には一度も回つたことの無い領地は、他所より景色が佳かつた。農夫は、到る處繁昌して居て、彼が與へた利益に對して非常に有り難がつて居るやうに見えた。到る處で、彼は歡迎に會つた、それは、彼を當惑させは爲たが、心の底では嬉しかつたのであつた。

或る所では、農夫が麵麩と、鹽と、ペテロとパウロの聖像を彼のところへ持つて來た、そして、彼の守護聖、ペテロとパウロに對する尊信の爲め、且、自分等の上に與へられた利益に對する愛や感謝の記念として自分等の費用で、寺院の裡へ新禮拜堂を建てる許可を得度いと願つた。

また他の所では、彼は、幼児を抱いた女たちに迎へられた、それは、重い労働の義務から釋放されたことの禮を、彼に云ひに來たのであつた。

第三の場所で、彼は、小兒たちに取り圍かれた十字架を持つた僧に迎へられた。その小兒たちは、ビエールの庇蔭で、僧から讀み書きや、宗教を教へられて居たのだ。

何の領地でも、ビエールは、自分自身の眼で、悉皆同なじ設計で、建てられ、若くは建てられつゝある石の建築物を見た、それは、直きに開かれるやうになつて居た病院や、學校や、養育院であつたのだ。何處でも、ビエールは、自分の所得になる爲事に對する支配人の計算高が過去に比べて、減つて居るのを見た、そして、宥恕したものに對しての熱誠な感謝を、青い本スカートの附た上衣を着た農夫の總代たちから、聞いた。

が、ビエールは、人々が彼に麵麩と鹽を持つて來、ペテロとパウロの禮拜堂を建て、居た所には、商賣をやつて居る村があつて、聖ペテロの日には市があることも、禮拜堂は餘程前に村の金持の農夫たちの手で建てられたことも、それから、その村の農夫の十分の九は窮乏の極に陥つて居たことも、知ら無かつた。

彼は、彼の命令で、孩兒を抱へた母親たちが主人の土地へ働きには出され無くなつて以來、その同なじ母親たちは、自分等の地面で尙一層太く働いて居ることを知ら無かつた。彼は、十字架を持つて彼を迎へた僧が、さまざまに農夫から貪つて、農夫を壓制して居ることや、その周圍に集められた弟子たちは、涙で手離されたもので、後で親たちが非常な金額で買ひ戻すのであることを知ら無かつた。

彼は、石の建築物は、彼の労働者の手で建てられるので、農夫に對する強制的の労働を増すのであつて、唯だ紙の上ばかりで労働が少なくなつて居るのに過ぎ無かつたことを知ら無かつた。

彼は、支配人が、帳簿の上で、彼の意に従つて小作料を三分の一に減したと指し示めた場所では、強制的の労働が前より二分の一だけ増して居ることを知ら無かつた。

さういふ風で、ビエールは、彼の領地巡回の旅行で非常に満足した。彼は、彼得堡を出た時の博愛的氣分に全く立ち戻つた、そして、彼の教訓者、兄弟——彼は管長をさう呼んで居た——の所へ熱心な手紙を書いた。

『極く譯も無く、極く僅少の努力で、随分な善い事が能ざるものだなア』と、ビエールは思つて、『吾々は、さう爲やうといふ氣の随分無いものだなア』

彼は、自分に向つて表された感謝を嬉しく思つた、が、それを受けるのは恥づかしかつた。その感謝は、さういふ單純な、心の善い人民に對して彼が尙その上何れだけ多くの事を爲ることが能ざるかを、彼に思ひ

起させた。

極く間拔けではあつたがなかく、食へ無い男であつた總支配人は、惻かな率直な伯爵を全然見すかしてしまつて、玩具のやうに彼を弄そんで居て、解放せすとも全く幸福である農夫を解放するのは、不可能であるのみでは無く、全く無益であるといふことを證明する議論をます／＼臆面無く主張した。

自分の心の奥では、ピエールも、自分が今見て来た人民より幸福な人民が世のなかにあらうとは思像し難いことだといふことや、自由を與へた所で、彼等の將來が何うなるか決して分かることで無いといふ點では、支配人と同意見であつた。

が、氣乗は爲無いながらも、彼は自分が然るべきことだと思つて居たものを固守したのであつた。

總支配人は、伯爵の願望を實行する爲めに有らゆる努力を爲やうと約束した。といふのは、彼は、伯爵が銀行からの借金を返す爲めに、森や、領地を賣ることに對して有らゆる方法が盡くされたか何うかと自から確める位地に立つことは決してある氣遣は無く、多分は何う爲つたか尋ねさへしまいと見て取り、それから、建築物が、出来上がつても、空虚で捨て置かれることや、農夫は、世間の農夫がそれ／＼の主人に與へて居ると同じもの、即ち彼等が與へ得る限りのものを、勞働と金銭とで與へて居ることを、ピエールが発見することは確にある氣遣は無いと、明白に見て取つたからであつたのだ。

(十一)

最も幸福な氣分で南方の旅行からの歸り途で、ピエールは、二年越し逢はずに居た友達のボルコオンスキイを尋ねやうといふ兼てからの宿望を果すことに爲た。

ボグチャアロヴァは、野や、一部分切り開かれた樅だの秦皮の森で、蓋はれて居る平つたい醜い地方に在つた。領主館は、往還の兩側を走つて居る眞直な村の端、小さい樹の間に五六本の大きい松の樹の立つて居る若い森の眞中に、新しく掘られて、岸にまだ草の生えて居無い、水の溢れて居る池の後の所に、在つた。邸は、穀落場、耕奴長屋、厩、浴室、住居、それから、まだ建築中の半圓の正面を持つた大きい石の家で成り立つて居た。家の周圍には、畑が新に開かれて居た。垣根や、門は、頑丈で新しかった、小舎の下には、二つの消火機と、青く塗つた桶があつた。路は眞直であつた、橋は強くつて、石の胸欄を具へて居た。有らゆる物が、十分に手の達いた風を持つて居た。途中に居た家の耕奴が、公爵は何處に住まつて居るかといふ尋ねに答へて、池の極く縁の新しい小さい住居を指さした。公爵アンドレーの年取つた親僕アントンは、馬車からピエールを扶け下してから、公爵は宅に居ると云つて、小清潔な小さい控家へと彼を案内した。

ピエールは、その朋友を彼得堡で最後に見た時のその周圍の壯麗であつたのと比べて、この小さい小清潔な家の質素なものには意外な感が爲た。

彼は、未だ漆灰で塗つて無い、松の木の香の爲る小さい客室へ急いで入つた、そして、まだ先方へ行かうとした、が、アントンが先きへ爪立つて驅けて行つて、戸を叩いた。

「何だ？」と、彼は、突慳貪な、不快さうな聲を聞いた。

「お客様でございます」と、アントンが答へた。

「待つて貰へ」そして、突き遣られる椅子の音がした。

ピエールは、急ぎ歩で戸口へと行つた、そして、顔を整めながら、少し年老た態で出て来た公爵アンドレ

エーとパツタリ顔を合はせた。ビエールは彼を抱擁した、そして、眼鏡を外して、彼に接吻し、ツクツク彼を見た。

「いや、君とは思ひ掛け無かつたよ、嬉しいね」と、公爵アンドレエーが云つた。

ビエールは何にも云は無かつた、彼は、朋友を驚いて見て居た、そして、彼から眼を離すことが能き無かつた。彼は、公爵アンドレエーの變化に驚かされた。その言語は暖かであつた、その唇や顔には微笑があつた、が、眼には光の無い死んだやうな様子があつた、それへは、明らかに嬉しく見せやうといふ願望があつたに拘らず、公爵アンドレエーは幸福の一闪をも投げ込むことが能き無かつたのだ。その朋友が、前より瘠せ、蒼く、前より多く男らしく見えたことのみならず、眼容や額の皺が、或る一つの問題に長く心を集中して居たことを表して居るが、ビエールを驚かして、それに慣れて了まふまで、ビエールを親ませ無かつた。長く別れて居た後で逢つたので、談話は、何時もさういふ場合にはあるやうに、暫時は一つの問題の上には止まつて居無かつた。二人は、自分でも十分に話し合はなければならぬものだと思つて居る事柄に就て、尋ね合つて、短かい返答を與へた。やがて、談話が、だん／＼と、これまでの二人の生活、將來に對する計畫、ビエールの旅行、彼が何を爲て居たか、とか戦争など、いふやうな、それまでは唯だそれからそれへと渡る際に一寸々々と觸れたのみの問題の周圍を今少し緩徐と廻り始めた。

ビエールが、公爵アンドレエーの眼の裡で認めた集中した壓し潰されたやうな眼容は、今彼がビエールの談話を聞いて居る笑顔の裡に、殊にビエールが自分の過去のや將來に就て、熱心と愉快を以て、話して居る時に尙一層著るしく表れた。

公爵アンドレエーは、ビエールが彼に話して居る事柄に興味を持ち度いと思つて居るのだが、それが能き

無いかのやうであつた。ビエールは、幸福や善に就ての熱心や、理想や、希望を云ひ表すのが、公爵アンドレエーの前では、何だか極りが悪いやうに感じた。彼は、その旅行で自分の心の裡で復活し、強められた、共済組合員から得た總の思想を云ひ出すのを恥かしく感じた。彼は、程氣に満ちて見えるのを慮れて、自分を抑へた。同時に、彼は、自分が最早、その朋友に彼得堡で知られて居たよりは、復然善い、全く違つたビエールであることを直ぐにその朋友に見せ度いといふ抑へ切れ無い心持を感じた。

「此頃僕の變つたことつたら、到底話し切れ無い位なんだ。前の僕は全然影も無いんです」

「左様だ、君は、先とは實に非常な變り方だね」と、公爵アンドレエーが云つた。

「左様だ、所で、君は何うだね？」と、ビエールは尋ねた。「君の計畫は何ういふんだい？」

「計畫？」と、公爵アンドレエーは皮肉さうに繰り返した。「僕の計畫かね？」と、彼は、さういふ言語の意味は何ういふのだらうと怪むかのやうに、繰り返した。「いや、僕は今家を建て、居るだらう、それで、僕は來年になれば此所へ全然居着て了まはうと思ふんだ……」

ビエールは、非常に年老て了まつた公爵アンドレエーの顔を、黙まつて凝乎と見詰めた。

「いや、僕の尋くのは……」と、ビエールが云ひ始めた、が、公爵アンドレエーはそれを遮ぎつた。

「けれども、何で僕のことを云ふんだ……まあ、君の旅行や、君が君の領地で爲つて居たことを悉皆僕に話し給へ」

ビエールは、自分が領地で爲つて居た事柄をば、其所で爲た改革に自分の干さはつたことを能きるだけ隠くすやうに骨折りがながら、話し始めた。

公爵アンドレエーは、ビエールの爲たことは何れも此れも、古い知れ切つた事であつて、彼は何の興味も

無くそれを聞いて居るばかりでは無く、話されて居る事柄を少し恥づかしくさへ思つて居るかのやうに、時時、ビエールの云はうと爲る言語を、先きに云つて了まつた。

ビエールは、その朋友と一緒に居るのが、極りが悪くなり、全く弱つた心持に爲り始めた。彼は、黙つて了まつた。

「では、話すがね、君」と、客に對して、確に退屈で、窮屈に爲つて居た公爵アンドレーは、云つて、「此所はホンの野營なんだ、僕は唯だ状態を見に来たばかりなんだ。今日妹の所へ歸る所なんだ。妹を御紹介しやうよ。尤も、君は彼女を知つておいでだらうとは思ふけれども」と、彼は、今その人とは共通な何物をも持つて居無いと思ふ客に對して何がな愛想を爲やうと骨折つて居るらしい態で、云ひ添へた。「晝食後に行くことに爲やう。で、何うです、邸を見てくださつては？」

二人は出て行つて、相互にそれ程親しく無い人々のやうに、政治上の事件や、相互の知人の話を爲ながら、晝飯時まで歩き廻つた。公爵アンドレーが今幾らか熱心や、興味を以つて話す事は、唯だ彼が今建て、居る新しい建築物や、邸のことだけであつた、が、その問題に就ての物語の最中でさへ、足場の上で、家の設計をビエールに説明して居るうちに、彼は不意に止まつた。

「だが、それも別に面白いことは何も無いね、さア、晝飯をやつて、出やうぢや無いか」晝食では、談話がビエールの結婚のことに落ちて行つた。

「聞いた時には、随分驚いたよ」と、公爵アンドレーは云つた。

ビエールは、自分の結婚の談話が少しでも出ると何時もやるのであつたやうに、顔を赤くした、そして、慌たしく云つた、「何ういふ風で彼様なつたのか、何時か君に全然話し爲るよ。けれども、最早全然終局に實際」

なり、永久に終つて了まつた事だからね」

「永久？」と、公爵アンドレーは云つた。「永久などいふことは、何にでも無いことだぜ」

「けれども、それが何ういふ風で全然終局になつて了まつたか、知つてるかね？。決闘の話聞きましたか？」

「左様、君は左様な事までもやら無きやアなら無かつたんだね」

「唯だ一つ神に謝すべきことはね、僕が彼の男を殺さ無かつたことなんだ」と、ビエールは云つた。

「何で左様なんだ？」と、公爵アンドレーは云つた。「癖の悪い犬を殺すのは極く善い事ぢやア無いか、實際」

「いや、人を殺すのは悪い、不善なことなんだ……」

「何故不善なことなんだ？」と、公爵アンドレーは繰返した。「善いとか不善とかいふのは人間が決すべき問題ぢやア無いよ。人間は何時までも間違ひを爲るものなんだ、何時も間違ひを爲るものなんだ、殊にそれは、善いとか不善いとか考へる場合に甚だしいんだ」

「他人に害を及ぼすことは不善なんだ」と、ビエールは、自分の到着以來始めて公爵アンドレーが勢づいて話し始め、彼が今のやうに何うして爲つたか、その根拠を云ひ表さうと熱心になつたのを嬉しく感じて、云つた。

「所で、何ういふものが他人に害を及ぼすものだと誰が君に云つたのかね？」と、公爵が尋いた。

「害かね？。害かね？」と、ビエールは云つた。「誰でも害とは何だか知つて居るぢやア無いか」

「左様、吾々はそれを知つて居る、けれども、吾々自身が害がと知つて居るものが、必ずしも、他人に害を

及ぼすものではない」と、公爵アンドレーエは、だん／＼熱心になつて、物に對する自分の新たな観方をピエールに云ひ度くつて堪まら無いといふ態で、云つた。彼は佛蘭西語で話した。「僕は人生の全く眞實の不幸といふのは、唯つた二つしきや無いと思ふんだ、即ち、後悔と病氣、この二つなんだ。この二つのものゝ無い場合の外は、善いことは一つも無いんだ。その二つの不幸を避けるやうに、僕自身の爲めに生きて行く、これが今僕の智慧の總額なんだ」

「では、君の隣人に對する愛、それから、犠牲獻身は？」と、ピエールが云ひ始めた。「いや、同意能き無いね。後悔することの無いやうにと、惡を爲ることを避けるといふ唯だそれだけの目的で生きる、それは極く小さいことなんだ。僕はさういふ風にしてこれまで生きて居た、僕は自分の爲めに生きて居た、所が、僕は自分の生活を滅茶々々にしてしまつた。で、今、他人の爲めに生きることになつて、いや、少くとも、さう生きやうと試みることになつて」(謙遜の念に促がされて、ピエールはさう云ひ直した)「そこで、始めて、人生の總ての幸福を知ることが出来るやうに爲つたんです。いや、僕は君に同意し無い、尤も、君は、自分で云つてゐることを信じちやア居まいけれども」

公爵アンドレーエは、何にも云はずに、ピエールを見た、そして、皮肉さうに微笑んだ。

「では、妹のマリーに逢つて呉れ給へ。君は彼女とは話が合ふよ」と、彼は云つた。「君としてはそれが正當かも知れ無い」と、彼は、寸時間を置いてから、云ひ添へて、「だが、誰もそれ／＼自分々々のやり方で生きて居るんだ、君は君自身の爲めに生きて居た、そして、君は、さう爲たが爲めに君の生活を殆ど滅茶々々に爲た、所で、君が他人の爲めに生きて居たから以來幸福を知つたと云ふんだね。所が、僕の経験は君と正反對なんだぜ。僕は、榮譽の爲めに生きて居たんだ。で、榮譽とは何かといふと、同じく他人に對する愛な

んだ、他人の爲めに何か爲てやらうといふ願望、他人から褒められやうといふ願望なんだ。さういふ風に、僕は他人の爲めに生きて居た、所が、僕は、殆どでは無く、全く、僕の生活を滅茶々々に爲てしまつたんだ。で、僕は、僕自身の爲めばかりに生きるやうになつてから以來、前よりズツと安靜になつたんだ」

「けれども君は何うして君自身の爲めばかりに生きて居るんだね？」と、ピエールは、熱して来て、尋いた。「君の子息さんは、妹さんは、父上様は？」

「左様、それは、僕自身と同名なものなんだ、彼等は他人では無い」と、公爵アンドレーエは云つた。「が、他人、君やマリーの所謂隣人、さういふものは、間違と災難の大いなる原因だね——隣人といふのはね、君のキイフの農夫のやうな——人がそれに向かつて善を爲やうと思ふ人々なんだ」

で、彼は、皮肉な挑戦の眼容で、ジロリとピエールを見た。彼は、確にピエールを誘き出さうと思つたらしがつた。

「冗談を云つちやア不可」と、ピエールは、だん／＼熱心になつて云つた。「僕が善を爲やうと思ふこと(僕は極く少しか爲無いし、又爲りやうも下手ではあつたが、それでも、善を爲やうと思つたには違ひ無いんだ)、そして何うにかして右に左何か爲度いと思ふことの中に、何様な間違、何様な禍があるんだ？。不幸な人民、例へば吾々の農夫のやうな、吾々自身と少しも異ら無い人間が、神や眞理に就ては、馬鹿々々しい祈禱や儀式の外、何の觀念も持つて居無いのに對し、未來の生活、應報、慰藉の心を安める教理を教へて遣るとすると、それが、何で害になるんだ？。人が救助を受けられ無いで病氣で死につゝあるのに、それに物質的助力を與へることが極く容易である場合に、それ等の者に、醫者や、病院や、養老院を僕が與へることのうちに、何様な害、何様な間違が有り得るんだ？。それから、農夫や、幼な兒を抱へた女たちが、

夜も晝も休息無しであるのに、僕がそれ等の者に閑暇と休息を與へたのは、確な争ひ難い善では無いかね？……」と、ピエールは急ぎ込んで、舌の廻らぬやうな發音で云つた。「僕はそれを行つたんだ、拙かつたのも、極く僅少であつたのも、眞實なんだが、併し僕は、その方に向つて幾千かのことを行つたんだ。そして君は、僕が善く爲つたと思ふ僕の確信を動かすことが能き無ければかりで無く、君自身がそれを信じ無いのだといふ僕の確信さへ動かすことは能き無からう。で、大きい事は」と、ピエールは續けて、「僕が斯ういふことを知つて居る——而かも、それを確に知つて居る——ことなんだ、即ち、この善を爲すことを樂むのが人生の唯一の眞の幸福だといふことを知つて居ることなんだ」

「うん、さういふ風に問題を置けば、それは又別問題だ」と、公爵アンドレーエは云つた。「僕は家を建てたり、花園を開かうと爲て居るし、君の方は病院を建て、居る。何ちらの仕事も時を過ぎす役には立つんだ。けれども、何が正しいか、何が善いかといふことは——それは、判決することを十分知つて居る人に委せて置くが宜い。それは吾々の決すべきことでは無い。いや、君は、議論を求めらんだね」と、彼は云ひ添へた。「宜しい、では、爲らうぢや無いか」

二人は卓子から起つた、そして、觀臺が無いので、家の昇降段に出て坐つた。

「さア、この問題を論じやうぢや無いか」と、公爵アンドレーエは云つた。「君は學校のことを云つたね」と、彼は、指を一つ折つて、續けた。「教育や、その他のこと、即ち、君は、彼を、(彼は帽子を脱つて二人の傍を通つた農夫を指さした)、『動物的狀態から引き離して、それに精神的欲求を持たせやうといふんだね。けれども、僕は唯一の有り得べき幸福は動物的幸福だと思ふんだ。それを、君は彼から奪はうと云ふんだ。僕は彼を羨むね。而るに、君は、彼に僕の境遇を與へ無いで、彼を僕に爲やうと骨折つて居るんだ。君が云

つた今一つのことは、彼の勞苦を軽くすることだつたね。けれども、僕の考想では、身體の勞作は、智力上の勞働が僕や君に對すると同様に彼に取つては必要なるものであり、又それと同様な彼の存在の一條件なんだ。君は物を考へ無いでは居られまい。僕が三時に寢床に入る、考想が僕の心に起る、すると、僕は眠れ無い、僕は轉輾する、で、朝まで睡られ無い、これは、丁度、彼が働いたり刈つたり爲すには居られ無いのと同様なやうに、僕は考へるし、又考へ無いでは居られ無からなんだ。若し、彼が働か無かつたら、彼は居酒屋へ行つて、病氣に爲つて了まふんだ。丁度、僕が彼等が恐い肉體上の勞働には堪へられ無いで、それを爲れば一週間のうちに死んで了まふやうに、彼は僕のやうな肉體上の不活動には堪へられ無かつて、肥つて死んで了まふだらう。第三の事——君の話したのは何だつたね？」

公爵アンドレーエは、三番目の指を折つた。

「あ、左様だ、病院と、醫藥だ。彼は發作を持つ、そして、死んで了まふ、けれども、君は彼の血を取つて、癒るやうに爲て遣る。彼は誰にも彼にも重荷になつて、病身の身體をもう十年も引摺り廻るだらう。彼に取つては、死ぬる方が、何時でも自然單純で、心持が好いだらう。他の者が生れて來る、何時でも、人間は澤山あるんだ。君が、勞働者を一人無くすのが惜しいからと云ふのならばだが——僕は、さういふ風に彼を見て居るんだがね——併し、君は、彼に對する愛から彼を癒して遣らうと云ふんだ。けれども、彼は、その必要を寸毫も持つて居無いんだぜ。それに醫藥が人を癒すなどいふ考想は實に可笑しいぢや無いか。殺したんだよ、——左様なんだ」と、彼は、顔を擧めて、ピエールから傍へ振り向いて、云つた。

公爵アンドレーエが、彼の思想を斯う瞭乎と正確に云ひ表したのから見ると、彼がそれをこれ迄に最早幾度も考へたのであることは明白であつた。そして、彼は、長いこと黙まつて居た人が爲るやうに、速語で、

熱心に話した。彼の眼は、彼の云ふ意見が悲観的であればあるほど、ますます鋭くなるのであつた。

「いや、實に怪しからん、實に怪しからん」と、ピエールは云つた。「人が何うして其様な思想で生きて行かれるのか、僕には實に解からんことだね。僕も、其様な風に考へた時もあるたさ、それは、莫斯科でも、又其所からの旅行の時もさうで、餘り古くもあつた。けれども、その時は、少しも生きてる氣の爲無いほど卑しいものになつてしまつて、何でも彼でも、憎くて堪まら無かつた……殊に自分自身が一番憎かつた。で、僕は物を食は無かつた、身體を洗ひも爲無かつた……何うして、君はやれて行くんだ？……」

「何故洗はんのだ、それは、不潔ぢやア無いか」と、公爵アンドレーエは云つた。「人は、反て、能き得る限り、自分々々の生活を心持の好いものに爲るやうに試みるべきものなんだよ。僕は生きる力が盛なんだ、僕がさうであるのは、決して僕の罪ぢやア無い、だから、僕は、死ぬるまで、能きだけ善く暮すやうに、他人を害さ無い範圍内で、試み無きやアなら無いんだ」

「けれども、何様な衝動で、さういふ思想で生きることになつたんだい？。君は、動かすに唯だヂツと坐つて居て、何にも手を出さ無いんだね……」

「人生は、さうして居てさへ、人を打捨つて置いちやア呉れ無いんだ。僕は、喜んで何にも爲すに居るんだが、君、何うだね、此所では、一方では地方の貴族が僕を都督に選んで呉たんだ、僕はやつとのことでそれを断つてしまつたぜ。奴等にやア、僕が其爲事に必要なものを持つて居無きこと、即ち、それには非必要な、誰でも善く知つて居る彼の人の好い、世話好きな卑俗を持つて居無きことが解ら無いんだ。それから、今一方では、此所に此の家がある、これは、僕が靜に暮すことが能き、僕自身の安棲所を持ち得る爲めに、建て無ければなら無いんだ。その次は、民兵だ」

「何故君は軍隊に勤め無いんだ？」

「アウステルリッツの後ではねえ」と、公爵アンドレーエは、陰鬱な態で云つた。「いや、眞平だ、僕は二度と露西亞の軍隊には勤め無いと自ら誓つたんだ。だから、ボナバルトが、このスモレンスクに駐軍して、荒涼丘を脅すのであつても、断じて不可、さう爲つたにしても、僕は、露西亞の軍には入ら無いよ。左様、僕の今云つた通り」と、また落着を回復して、公爵アンドレーエは、續けた。「所で、民兵だが、父親が第三區の總司令官なんだ。で、僕に取つて、現役から廻れる唯一つの手段は、父親の下で勤めて居ることなんだ」

「では、君は、勤務に就てるんだね、それでは」

「左様なんだ」彼は少時黙まつて居た。

「では、何故君は勤務に就て居るんだね？」

「それは、斯ういふ理由なんだ。僕の父親は、前代の最も優れた人間の一人なんだ。けれども、最早老い込んで了まつたし、全然残酷だと云ふんでは無いけれども、精力の有り過ぎる性格なんだ。無制限の權力を揮つて居たこれまでの習慣のある所へ持つて来て、此度民兵の總司令官として、權威を皇帝から與へられたので、實に恐ろしいものに爲つて了まつたんだ。二週間前などは、僕がもう二時間遅く行つたものなら、ユウノオヴァで書記を絞殺に處したに違ひ無かつたんだ」と、公爵アンドレーエは、微笑んで云つた。「で、父親に對して何等かの勢力を持つて居るものは僕の外には誰も無いし、僕なら、時々、後來父親自身に取つて、後悔の種になるやうな行爲を父親にさせ無くすることが能きものだから、僕は今父親の下で勤めて居るのよ」

「あゝ、それ見給へ」
 「いや、それは、君が思ふやうなんぢやア無いよ」と、公爵アンドレエーは續けた。「僕はその時、民兵から靴か何かを盗んだその悪黨の書記の爲めを寸毫も思つて遣りは爲無かつたし、今も尙且さう思つて遣りは無いんだ、いや、僕は其奴が絞殺されるのは至極宜いと思ふんだ、けれども、僕自身と同じものである所の父親を氣の毒だと思つたんだ」
 公爵アンドレエーは、だん／＼熱心に爲つた。彼の眼は、彼が、自分の行爲のうちには隣人に善を爲やうといふ願望は決して寸毫も無いのだと、ピエールに向つて證明しやうと試みるに従がつて、熱病的に輝つた。

「で、君は、又、君の耕奴を解放し度いと思ふんだね」と、彼は追つ掛けて云つた。「それは極く善い事だ、けれども、君に取つてはさうでは無い——君は無論、決して人を答つたことも無からうし、西伯利亞へ送つたことも無からう——それから、君の農夫に取つては尙一層善くも何とも無いんだ。農夫は打たれ、答たれ、西伯利亞へ送られても、農夫には寸毫も變りは無からうと思ふね。西伯利亞でも、彼は同なじ獸的存在を送り得られるんだ、身體の答れた痕は癒つて了まふ、そして、彼は前と同じに幸福なんだ。けれども、他人の爲めに善を爲る事は、道義上で破滅した人々、後悔に心を蝕ひ盡くされた人々、自分の周圍四方八方へ罰を蒙らすことが能きるので、その後悔を壓伏して、心の無情に爲つた人々には、是非必要なことなんだ。君は見たことが無いかも知れ無いがね、僕は、何年もの間無制限の權力の傳説で育つた善人が、殘酷になり、獸的になり、それを自覺して居ながら、自分自身を制御することが能き無くなり、そして、だん／＼不幸になつて行く人を、幾度も見たことがあるんだ」

公爵アンドレエーが、非常な熱心な調子で話した様子を見て、ピエールは、さういふ思想は、公爵の父親から公爵に吹き込まれたのだと考へざるを得無かつた。彼は公爵に何の返答も爲無かつた。
 「さういふ風で、僕の憂ふるのは、——人間の威權、良心の平和、統潔の爲めであつて——彼等の背部や頭の爲めでは無いんだ、後者は、君が何う殿らうとも、剃らうとも、何時も尙且元の儘の同なじ背部と頭で居るんだからね」
 「いゝや、いゝや、何うしたつて其様なことは無いよ。僕は決して君に同意しない」と、ピエールは云つた。

(十二)

夕方、公爵アンドレエーとピエールは、馬車に乗つて、荒涼丘へと駆けた。公爵アンドレエーはピエールを見守つて居て、自分が上機嫌であることを見せるやうな談話で以つて、幾度も沈黙を破つた。

野を指しながら、彼は、自分がその地面の管理方に就て爲しつゝあつた改良のことをピエールに話した。ピエールは、唯だ一綴の言語ばかりで答へて、陰氣な沈黙を守つて居た、そして、自分自身の考案の裡に沈んで居るのらしかつた。

ピエールは、公爵アンドレエーは不幸であり、考が間違つて居り、眞の光明を知つて居無いのだから、ピエールは、彼に助力して、彼の眼を開けさせ、彼を引き上げて遣るべきだと思ひ廻らして居た。が、彼が云ふべき事柄を熟考しだすや否や、彼は、公爵が一語か、一議論で、彼の教理の裡の有らゆる物を滅却して了ふだらうと、先見した。で、彼は、始めることを慮れ、自分の最も大切な神聖なものを多分嘲笑的に爲る

ことになるのを慮れた。

「いや、何うして君は左様思ふんだ？」と、ビエールは頭を下げて、突つかゝる牡牛のやうな態で、直ぐ云ひ始めた。「何うして君は左様思ふんだね？ 左様思つてはいけ無いんだ」

「左様思つて、何のことを？」と、公爵アンドレエーは、驚いて、尋いた。

「人生のことさ。人間終局の目的のことなんだ。それは、其様な筈は無いんだ。僕も往時には、君のやうに思つて居たが、僕は救はれたんだ、何でだと君は思ふね？——共済組合のお蔭なんだ。いや、笑ふべきことぢやア無いよ。共済組合は、僕が想像して居たやうな、宗教の一派でも無ければ、唯だの宗教上の儀式でも無いんだ、共済組合はね、人間の最高の永遠の方面の最も善い唯一の表現なんだ」

で、彼は、自分が理解した通りに、共済組合の主意を公爵アンドレエーに説明し始めた。

彼は、共済組合は、基督教の教理から、その政治上及び宗教上の桎梏を除いたもので、即ち平等、同胞、愛の教理なのだと言つた。

「人生に於て眞の意義を持つものと言つては、唯だ吾々の神聖な結社があるばかりなんだ、餘は悉皆夢なんだ」と、ビエールは云つた。「君、この結社以外は、總て虚言と虚偽で充たされて居るんぢやア無いかね、で、僕は、君のやうな惻怍な心の善い人にとつては、唯他人を害さ無いやうにだけ骨折りが、人生を渡つて行くより外爲方が無いことも、君に同意する。けれども、君、吾々の確信を君も持つやうに爲給へ、吾の結社に入り、君の身體を全然吾々に委し、吾々に指導させ給へ、さうすれば、君自身直ぐに、僕が感じたやうに、その元は空で見え無くなつて居る大きい見え無い連鎖の一部であることを感じるだらう」と、ビエールは、自分の前方を眞直に見ながら、云つた。

公爵アンドレエーは、黙まつてビエールの言語に耳を傾けて居た。五六度、彼は、車輪の音の爲めに言語を聞き兼ねた、で、彼は自分が聞き漏らした言葉を繰り返すやうにビエールに頼んだ。公爵アンドレエーの眼の裡で燃えて居た光から、そして、公爵の沈黙から、ビエールは、自分の言語が無益で無かつたことを、それから、公爵アンドレエーが彼を遮りも爲さず、彼が言つた事を笑ひも爲無からうといふことを、見た。

二人は、水が岸から溢れて居る川へ達した、そして、渡船でそれを越さなければなら無かつた。馬車や馬を待たせて置いて、二人は渡船で越した。

公爵アンドレエーは、欄干に肘を掛けて、落陽に輝つて居る水の廣がりを見詰めて居た。

「で、君はそれを何う思ふね？」と、ビエールが尋いた。「何故君は黙まつて居るね？」

「僕が何と思ふかといふんだね？ 僕は、君の言つた事を聞いたのさ。それは結構だね」と、公爵アンドレエーは言つた。「けれども、君は、吾々の結社へ入れ、さうすれば、吾々は、人生の目的、人間終局の目的、それから、宇宙を支配する法則を、お前に教へてやらうと云ふんだね。が、その吾々といふのは何ういふものなんだい？——人間だらう？ 何うして君等はさういふことを總て知つて居るんだい？ 君等が見る事柄を、僕一人が見ることが能き無いといふのは何ういふ譯なんだい？ 君等は此世に於て善や眞の支配を見るんだ、併し、僕はそれを見無いんだ」

ビエールは、公爵を遮ぎつた。「君は未來の世を信するかね？」と、彼は尋いた。

「未來の世をね？」と、公爵アンドレエーは繰り返した。

が、ビエールは、返答を爲る間隙を與へ無かつた、そして、この繰り返しを否定的の返答に取つた、彼は

過去に於て、公爵アンドレーエの無神論的意見を知つて居たのだから、一層直ぐさう取つて了まつたのだ。

「君は、この世では、善と眞の支配を見ることは能き無いと云ふんだね。僕もこれまではそれを見無かつたんだ、そして、人が、吾々のこの世を萬事の終局と見る場合には、それを見ることは能き無いだよ。地上では、此所のこの地上では「ビエールは、四邊の廣々とした土地を指した」何の眞理も無い——悉皆虚偽と奸悪なんだ。けれども、世界には、全世界には、眞理の領地がある。吾々は今だけで云へば、地の兒なんだ、けれども、永遠で云へば、全宇宙の兒だ。僕は、自分がその大きい、調和のある全體の一部であることを、僕の靈の裡で感じ無いだらうか？、僕は、その裡に神、高い力——君はそれを何と呼んでも宜い——が現はされる、物のその大きい無数の集合の裡で、その一粒、低い物から高い物に上つて行く間の一段を自分が成して居ることを感じ無いだらうか？。僕が植物から人間へまで上つて行く階段を瞭乎見るとすれば、何で僕は、その階段が僕の所で断れて、忽然先方へ行か無いのだと、想像すべき譯があるだらう？。僕は、何物でもこの宇宙では消え失せるものは無いんだから、僕が消え失せる筈は無いと感じ、何うしても僕は何時までも存在するのだらうし、何時も存在し來つたのだ、と感じるんだ。僕は、僕の傍に、僕の上に、幾つもの靈があつて、彼等の世界には眞理があると感じるんだ」

「左様、それはヘルデルの論だ」と、公爵アンドレーエが云つた。「だが、ねえ君、僕を論服するのは、それぢやア無い、けれども、生と死、それが僕を論服する所のものなんだ。僕を論服する所のものは、僕に取つて親愛な、僕と密接に結び着けられた者があつて、それに對して、僕が間違つた取扱を爲し、それを償はうと思つて居る場合に」(公爵アンドレーエの聲が震へた、そして、彼は顔を背けた)「不意にその者が苦しみ、苦痛を生じ、そして、存在し無く……なるのを見ることなんだ。それは何の爲めだ？。それに對する何の答

も無い筈は何うしても無いんだ。で、僕が信ずるのは、何かこの世界に……。それが、僕を論服するものなんだ、それが僕を論服したものなんだ」と、公爵アンドレーエが云つた。

「全くそれだ、全くそれだ」と、ビエールは云つた。「僕が云はうと爲て居るのは、丁度その事なんぢやア無いか」

「いや、僕は、唯だ、僕が未來の世の必要を確信せしめられるのは、議論に由つては無く、人が何人かと手を携へて行つて居るうちに、全く不意に、その何人か、彼方の何處でも無い所へ滑り去つて了まつて、君は、その奈落に面して、それを見下しながら、取り残される時に於てなんだと、云ふだけなんだ。で、僕はその奈落に眺め込んだ……」

「で、そんなら、それが左様なんだ。其所には、彼方があり、何人かあるぢやア無いかね。彼方といふのが未來の世で、何人か神なんだ」

公爵アンドレーエは答へ無かつた。馬車と馬は、最早迅うに、向ふ岸へ渡されて、轅に馬が着けられた、そして、太陽は地平線の下に半ば沈んで居て、夕の霜が渡場の水溜をキラ／＼させて居た、が、ビエールとアンドレーエは、従僕等や、馭者等や、渡守等の驚いたことには、尙且渡船の裡に立つて、尙且話を爲て居た。

「神があるとすれば、未來の世があるとすれば、眞もあり、善もある譯なんだ、で、人間最高の幸福は、さういふものに達する爲めに骨折ることなんだ。吾々は生き無ければなら無い、愛さ無ければなら無い、信じ無ければなら無いんだ」と、ビエールは云つて、「吾々は、今日地のこの團塊の上に生きて居るばかりでは無く、彼所で有らゆる物の裡に生きて居たし、又永久に生きて行くんだからねえ」(ビエールは空を指さし

た。

公爵アンドレエーは、渡船の欄干へ肘を凭たせて立つて居た、そして、ビエールの談話に聞き入りながら、水の青んだ廣がりの上の太陽の赤い反射に眼を見据ゑて居た。ビエールは話し止んだ。其所には全くの沈黙があつた。渡船は最早餘程前に止まつて了まつて居た、そして、唯だ流の渦旋が、船底を微弱な音で叩くのみであつた。公爵アンドレエーには、水の叩く音が、ビエールの言語に合唱して、「それは眞理だ、それを信じろ」と云ひ續けて居るかのやうに思はれた。

公爵アンドレエーは溜息した、そして、晴々しい小兒のやうな、優しい眼容でビエールの——朋友たる公爵アンドレエーの優越をばまだ臆病に知覺しては居ながらも、勢ひ込んで、大得意になつて居る——顔をジロジロ見た。

「左様、若しさうであつて呉れさへすればねえ」と、彼は云つた。「が、まア、行つて、入らう」と、公爵アンドレエーは云ひ添へた、そして、渡船から出ながら、ビエールが彼に向つて指した空を見上げた、と、アウステルリッツ以來、始めて、アウステルリッツの戦場で倒れて居ながら見たやうな氣高い永遠の空を見た、そして、長いこと睡つて居た何物か、これまで彼の裡に有つて居た尙善き何物か、不意に彼の心の裡に、嬉しい若々しい感で覺醒した。

その感は、公爵アンドレエーが人生の日常状態に立ち歸るや否や、消え去つて了まつた、が、彼はその感——それを發展させる方法は知ら無かつたけれども——尙且自分の裡にあることを知つて居た。ビエールの訪問は、公爵アンドレエーに取つて、一時代を劃した、即ち、それから、外面的には變化は無かつたが、内界では新生活が始まつたのだ。

《十三》

公爵アンドレエーとビエールが、荒涼 丘の家の大玄関へ乗り附けた時は、最早暗かつた。二人が乗り込んで行くうちに、公爵アンドレエーは、笑顔で、裏口の方で起つて居た混雑に對して、ビエールの注意を促がした。佩囊を背負つた腰の曲がつた老婆と、髪の長い矮漢が、乗り込んで來た馬車を見て、門へ逃げ返つた。二人の女が、彼等の後から駆け出た、そして、四人とも怖けた顔で馬車を見返りながら、裏口から内へ駆け込んで行つた。

「彼奴等はマアシャの「神の人々」なんだ」と、公爵アンドレエーが云つた。「奴等は吾々を僕の父親だと思つたんだ。マアシャが父親の命令に従は無いのはこの事一つなんだ。父親は、彼様いふ巡禮どもを追ひ拂へと、家の者どもに命じて居るんだ、けれども、マアシャは奴等を迎へ入れるんだよ」

「けれども、神の人々といふのは一體何なんだね？」と、ビエールは尋いた。

公爵アンドレエーは、答へる間隙が無かつた。家僕どもが、二人を出迎へに來た、で、彼は、老公爵が何處に居るのか、直き歸ることになつて居るのか、尋ねた。老公爵は未だ町に行つて居た。そして、今にも歸つて來るだらうといふのであつた。

公爵アンドレエーは、父親の家で彼の爲めに何時でもチャンと準備が出来て居る彼自身の部室々々へビエールを伴れて行つた、そして、自分は小兒部室へと行つた。

「妹の所へ行かう」と、ビエールの所へ歸つて來て、公爵アンドレエーが云つた、「僕は未だ妹に逢は無いんだ、彼女は、今隠れて、神の人々と一緒に居るんだ。一つ驚かしてやれ、彼女は、恥かしかるだ

らう、が、君は神の人々を見る事が能きるだらう。面白いもんだよ、實に」

「一體「神の人々」といふのは何だね？」と、ビエールが尋いた。

「行つて見りやア解かる」
公爵嬢マリイヤは確に顫動した、そして、二人が入つて行くといふと、顔が斑に赤くなつた。聖畫立の前に燈を置いた引籠もつた部屋の裡に、沸茶器の後、公爵嬢の傍に、修道士の法衣を着た、長い鼻の、長い髪の若者が坐つて居た。その近くの低椅子には、小兒のやうな顔に謙遜な顔付を爲た皺くちやの瘡せた老婆が坐つて居た。

「アンドレー、何故貴下は私に知らせてくださら無かつたの？」と、公爵嬢は、穩かな非難を以て、云つて、雛鳥の前の母鶏のやうに、自分の巡禮たちの前に立つた。

「善くおいでくださいました。お目にかゝれて眞個に嬉しうございます」と、公爵嬢は、ビエールが、その手に接吻して居るうちに、彼に云つた。公爵嬢は、彼の小兒の時分彼を知つて居た、そして、今はアンドレーとの彼の交誼や、彼の不幸な結婚や、そして、何より彼により、彼の親切さうな率直な顔が、公爵嬢を彼の方に好意的に傾ぶかした。公爵嬢は、その美しい、輝やく眼で、ビエールを見た、そして、「私は貴下が大好きだ、けれども、何卒、私の朋友どもを笑つてくださいますな」と、彼に云ふやうに見えた。

「やア、イヴァヌーシカが此所に居るね」と、公爵嬢は、若い巡禮を指して、微笑みながら云つた。

「アンドリュウシヤ」と、公爵嬢マリイヤは、懇願するやうに、云つた。

「ねえ、君、彼は女なんだぜ」と、アンドレーは、ビエールに佛蘭西語で云つた。

「アンドレー、後生ですから」と、公爵嬢マリイヤが繰り返した。

公爵嬢アンドレーの方では、巡禮に對する皮肉な調子、公爵嬢マリイヤの方では、弱いながらも彼等の味方を爲る、といふのが、この問題に對する二人の、何時もくの、最早長くお極りになつた位地であつたことは明白であつた。

「いや、お前」と、公爵嬢アンドレーは云つて、「反つて、ビエールにお前と此の若者との懇親な譯を説明してやつたんだから、お前が私に禮を云ふべき筈ぢやア無いか」

「へえ？」と、ビエールは、好奇心と眞面目とで（それに對しては、公爵嬢マリイヤはビエールに向つて特に有り難く思つた）イヴァヌーシカの顔を眺めた、イヴァヌーシカは、自分が議論の問題に爲つたのを見て狡猾さうな眼で、皆衆を眺めて居た。

公爵嬢マリイヤは、自分の朋友どもの爲めに、當惑を感じるには寸毫も及ば無かつた。彼等は全然平氣であつた。老婆は眼を下けた、が、横眼で竊然新來の人々をチヨイ／＼見た、そして、下皿へ茶杯を伏せ、その側へ嚙りかけの砂糖の塊を置いて、椅子に身動きせず坐つて、今一杯羞められるのを待つて居た。イヴァヌーシカは下皿から吸ながら、眉の下から、その狡猾さうな女らしい眼で、男たちを窺いて居た。

「何處へ行つて来たね、キイフかね？」と、公爵嬢アンドレーが老婆に尋いた。

「左様でございます、旦那様」と、談話を爲度い氣になつて居た老婆は、答へた、「丁度聖降誕日に、後生好く、聖さまたちからの奇驗な天の神秘を拜むことが能きましてございます。それで、今、旦那様、コリヤアジンから大變な御祝福が現はされましてございますよ」

『で、イヴァヌーシカもお前と一緒だったのかね？』

『私は單獨で参りました、恩人様』と、イヴァヌーシカは、低音で話さうと試みながら、云つた。「ユウ、オヴァで、ペラゲウシカと一緒にたばかりでございます……」

ペラゲウシカは同行者を遮つた、その老婆は、自分が見た事柄を話し度くつて堪ら無いらしかつた。「ヨリヤアジンは、旦那様、大變な御祝福が現はれましてございますよ」

『何だね、新たな遺物かね？』と、公爵アンドレーエーが尋いた。

『もし、アンドレーエー』と、公爵嬢マリヤは云つた。「その物語はお爲でないよ、ペラゲウシカ」

『いえ……いえ、お嬢様、何で彼方様にお話し申さずに置ませう。私は彼方様をお好き申して居ります。彼方様は、神様にお選ばれました善い紳士でいらつしやいます。彼方様は、私の恩人様でございますよ、何時か、私に十留くださいました、私は記憶えて居ります。私がキイフに居りました時に、狂氣の巡禮のキリウウシヤ——眞個に神の人でございますして、冬も夏も、跣足で居るのでございますが——それが私に、何故お前はお前の行くべき所へ行か無いのだと申しました、コリヤアジンへ行け、其所には、奇驗な聖像、貴い御聖母が現はされたのだ、と申しました。さう云はれましたので、私は尊い人々に暇乞を致しまして、参りました……』

衆皆黙まつて居た、唯だ巡禮の女だけが、規則正しく呼吸を吸ひ込みながら、調子の揃つた聲で、話し進んだ。「私は参りました、旦那様、しますと、人が斯う申しました、大きい祝福が示された、没薬の滴が御聖母様のお頬から滴れた……」

『さア、それで宜いよ、それで宜いよ、それは後で私に話してくださいよ』と、公爵嬢マリヤが、

赤くなつて云つた。

『私に一つ問はしてください』と、ピエールが云つた。「お前自分でそれを見たのかね？」と、彼は尋いた。

『眞個、旦那様、私自身がそれを拜む價值があるものと見られたのでございます。眞個に神々しい輝が天の光のやうにお顔ぢうに行き渡りまして、そして、聖母様のお頬から、此様な、此様な滴が……』

『いや、だが、それは詐欺に違ひ無い』と、老婆の物語をツクツク聞いて居てから、ピエールは率直に云つた。

『おや、貴下、飛でも無いことを仰しやいます』と、助力を求めにと、公爵嬢マリヤに振り向きながら、ペラゲウシカは、慄然とした態度で云つた。

『奴等は人を欺ますんだ』と、ピエールは繰り返した。

『主エス・キリスト様』と、十字を切りながら、巡禮女が云つた。「もし、其様なことを仰しやるものではございませんよ。さういふ風に信じ無い將官様がございまして、「修道士たちが欺すのだ」と仰しやつたのでございますが、さう仰しやるや否や、直ぐ盲目に爲つておしまひなすつたのでございます。しますと、夢をご覧なさいました、ベチエールスキイの聖母様がお出でになりましたして、「私を信じろ、癒してやるから」と、仰しやいました。で、將官様は、「聖母様へ伴れてつて呉れ、伴れてつて呉れ」と、お家の方へ一牛懸命にお頼みなさるのでございました。私がお話し致しますのは、奇驗な眞實の事でございます、私は自分で拜みましたのでございます。その方は、人々に伴れられて、盲目のまゝで、聖母様の前へ出ましたと、お傍へ行つて、平伏して、「何卒お癒してください、私は貴方にさし上げます」と、その方は申しました、「皇帝から頂いたものを」。私は、それを見ましたのでございますよ——星のやうなものが彫つてあるものでございました。で——

その方は眼が開きました。ちやアア、ごさいませんか。旦那のやうに仰しやるのは罪の深いことでごさいませぬ。罰が當ります」と。巡禮女は、諭すやうに、ビエールに云つた。

「何うして？ 勳章が聖像に懸かつて居たかね？」と、ビエールが尋いた。

「で、人々は聖母を將官には爲無かつたかね？」と、公爵アンドレエーは、微笑みながら、云つた。

ペラゲユウシカは、不意に蒼くなつて、手を投げ上げた。

「旦那様、旦那様、それは罪の深いことでごさいませぬ、貴下には坊ちやんがおありではございませんか」と、老婆、不意に白から眞赤に變つて、云つた。「旦那様、貴下の仰しやつたことに對しては、神様何うぞお宥しく下さいまし」。老婆は、十字を切つた。「主よ、彼をお宥しく下さい。お嬢様、これは何うしたことでございますか……」と、老婆は、公爵嬢マリイヤに振り向いた。老婆は起ち上つた、そして、殆ど泣きながら自分の佩囊を纏め始めた。明かに、老婆は、其様な怪しからんことを云ふ人々の居る家で、接待を受けたのを恐れもしたし恥もしたと同時に、それからは、その家の接待を受けられ無くなつたことを惜んで居るのであつた。

「貴方がたは、何ういふ積りで此様なことを爲したんですよ？」と、公爵嬢マリイヤが云つた。

「何故貴方がたは私の所へ來たんですか……」

「いや、俺は眞實は戯言を言つたんだよ、ペラゲユウシカ」と、ビエールは云つた。「公爵嬢、實際、彼女に腹を立てさせる積りぢやア無かつたんです。別に何といふ事無しに、云つたんです。氣になすつちやア行けません、戯言なんですから」と、彼はオツ／＼微笑み、そして自分の罪を消さうと骨折しながら、云つた。「悉皆私が悪いんです、けれども、兄様は其様な積りで云つたんぢやアありません、全く戯言です」

ペラゲユウシカは未だ疑はしさうに爲て居た、が、ビエールの如何にも心から後悔した顔容や、公爵アンドレエーのペラゲユウシカからビエールへと見廻はした如何にも優しい顔容で、老婆は、漸次落着かせられた。

(十四)

巡禮女は、なだめられた、そして、再談話を爲るやうに引出されて、手が香の香氣が爲るやうに爲つた位にまで神聖な生活を爲たアムフィロヘイ師のことや、老婆自身が、最近にキイフへ詣つた時に、自分の知合の修道士たちが、墓洞の鍵を貸して呉れたので、幾個かの乾麴麴を携つて、聖僧たちの墓洞の裡で二日二晩送つたことなどを長々と話した。

「私は、一つの傍で少し祈り、讃歌を歌ひ、それから、他の方へと参りました。私は睡てしまひました、それから又、行つて、貴い御遺物に接吻いたしました、お嬢様、其所の静さ、其所の有り難さと申しましたら、眞個に、再と此の世に出て参ります氣が誰でも無くなつてしまふ位なのでございましたよ」

ビエールは、眞面目でツク／＼と老婆の物語を聞いて居た。公爵アンドレエーは部室を出て行つた。で、神の人々には茶を出し放しに爲て置いて、公爵嬢マリイヤはビエールと一緒に公爵の後を追つて、客室へ行つた。

「貴下は眞個に親切な方ですね」と、公爵嬢はビエールに云つた。

「いや、私は彼の女の感情を傷ける積りは實際無かつたんです、私は彼様いふ感情が善く解ります、私は彼様いふ感情を非常に貴びます」

公爵嬢マリイヤは、黙まつて、彼を見た、そして、懐かしさうに微笑んだ。

「私は往時から貴下を知つて居ます、私は兄様のやうに貴下を思ふんですよ」と、公爵嬢は云つた。「アンドレエーの様子を貴下何うお思ひなすつて？」と、公爵嬢は、自分の優しい言語に何とも答へる間隙をピエールに與へ無いで、急いで尋いた。「何うも心配で堪まり無いんですよ。身體は冬は好かつたんです、けども、この春傷口が又開いたんです、それで、醫者は、相當の治療を受けに行けといふんですよ。それに、精神上の心配もあるんです。兄は、私も女のやうな性格ぢやア無いんですから、悲を涙で慰めることが出来るんぢやアありません。それを何時も心の裡で堪へて居るんです。今日は、陽氣で機嫌が好いんです。けども、それは、貴下が居てくださるからなんです、兄が此様な風なことは滅多に無いんですわ。貴下から外國へ行くやうに兄に勧めてくださると、眞個に有り難いんですがねえ。兄には活動が必要なんです、この靜な規則正しい生活は兄には善く無いんですよ。誰も其所には氣が付か無いんですけども、私には善く分つて居ますわ」

十時頃に、家僕たちは、近付いて来る老公爵の馬車の鈴の音を聞いて、昇降段へ飛び出した。公爵アンドレエーとピエールも又昇降段へ出て行つた。

「彼は誰だ？」と、老公爵が、馬車を下りて、ピエールを見て、尋いた。

「やア、善く来てくださつた、接吻なさい」と、その若い客が誰なのか知るといふと、彼は云つた。

老公爵は、機嫌が好かつた、そして、ピエールには、非常に愛想が好かつた。

晩食前、公爵アンドレエーは、父親の書齋へ戻つて行くと、老公爵はピエールと熱心に議論して居た。ピエールは、戦争が全く無くなる時代が来るだらうといふことを、主張して居た。老公爵は、彼を擁護して居

た、が、機嫌好くやつて居るのであつた。

「人間の血管から血を抜いて了まつて、その代りに水を入れ給へ、さうすれば、戦争は全く無くなるぢやらう。老婆の囁語ぢや、老婆の囁語ぢや」と、彼が云つて居る所であつた、が、それでも、彼はピエールの肩を愛しんだ風で叩き、公爵アンドレエーが、明かに談話に加はる氣の無い様子で、老公爵が町から携つて來た書類に眼を通して居た卓子へ行つた。老公爵は彼の傍へ行つて用談を始めた。

「都督、伯爵ロストオフの奴め、自分の受持兵の半分も送つて來居らん。町へ來て、私を食事に喚ぶのが好いと考へ居つたんぢや——十分な食事を奴に喰はしてやつたわい……で、これ、これを見てくれ……おい、お前」と、老公爵は子息に云つて、ピエールの肩を叩き、「お前の朋友は實に面白い男ぢやな、私は好ぢや。私を十分に熱しさせた。世間にやア氣の利いたことを云ふ奴は多いが、聞く氣にやアならん、けれども、この男は愚劣なことを云つて、それで、私のやうな老人には面白いぢや。さア、駈けて行かつしやい」と、彼は云つた。「多分私も晩食と一緒にやることになるぢやらう。今一つ議論しますかな。私の愚痴娘の公爵嬢マリイヤと友達になつてやつて下さい」と、彼は、戸口からピエールに叫んだ。

ピエールは、荒涼 丘を訪問して始めて、自分と公爵アンドレエーとの交誼の心持好さを十分に認めることが能きた。その心持好さは、朋友其人と自分との關係の裡よりか、朋友の家内ぢや、一家ぢやと自分との關係の裡に、より多く表はれて居たのであつた。ピエールは人々を此れ迄殆ど知ら無かつたに拘らず、彼は直ぐに、氣の荒い老公爵に對しても、溫和しい氣の弱い公爵嬢に對しても、古くからの朋友のやうに感じたのであつた。彼等は彼を好いた。彼が巡禮どもに對する彼の親切で自分に親しませた公爵嬢マリイヤが、最も晴々した表情で彼を見たばかりで無く、小さい公爵ニコライ——老公爵は一歳の幼兒を左様呼んで居

た——が、ビエールを見ると微笑んで、傍へやつて来た。ミハアイル・イヴァアニイチや、マドモアゼル・プウリアンヌも、ビエールが、老公爵と談話を爲て居ると、微笑みながら彼を見た。老公爵は、晩食にやつて来た、それは、明白にビエールが居る爲めであつた。老公爵は、ビエールが荒涼丘に逗留した二日間とも、彼に對して非常に愛想が好かつた、そして、又逗留に来て呉れと頼んだ。ビエールが去つた後、家内ぢうが集まつた時に、何處の家でも新しい客が歸つた後では何時もやるやうにビエールの評判を爲始めた、そして、珍らしい事に、衆皆が、彼に取つて善いことばかりしか云は無かつた。

(十五)

今度賜暇から歸つて、ロストオフは、自分をデニイソフや、自分の聯隊へ、結び付けて居る繋束力が何れほど強いものであるかを、始めて感じ、且、それを認めた。

ロストオフが聯隊に達した時に、彼は、莫斯科の自分の家へ達した時に感じたのに餘程近い感覚を経験した。彼が、彼の聯隊の扣鈕を掛け無い制服を着た驃騎兵を始めて一人見た時、赤つ髪のデメンティエフを認め、栗毛の馬どもの繋繩を見た時、ラヴリウシカが嬉しうに、主人に「伯爵がお出ですぞ」と叫び、寢床で睡て居たデニイソフが、髪を全然クシヤクシヤになつたまゝで、土小舎から駆け出て来て、抱擁し、そして、將校たちが、新來者を歓迎しやうと周圍に集つて来た時——ロストオフは、自分の母親が、自分を抱擁し、それから、自分が、父親や、妹たちを抱擁した時と同じ感覚を感じた、そして、喉へ上つて来る喜悅の涙が、彼の物を言ふのを妨げた。

聯隊も又一つ家庭であつた、親の家と同じな何時までも變ら無い懐かしい貴い家庭であつた。

聯隊長に届を爲てから、元の通り自分の中隊の勤務を充てられ、當番や、徵發の勤務を爲、聯隊の種々な小さい利害に携はり、そして、一つの狭い、變へることの能き無い框の裡へ釘付けにされて、自由を失なつて了まつたやうに感じた後で、ロストオフは自分が嘗て父親の屋根の下で感じたと同じやうな、平和の感や、道徳上の據所のあるといふ感や、此所で落着いて居られるといふ感覚や、自分の居るべき場所に居るのだといふ感覚を持つたのであつた。此所には、彼が、自分の適所を知ら無いで、自由な選擇を爲るのに間違をやつたやうな、自由な世界の彼の混雜なんぞは寸毫も無かつた。その人とは明白な云合せを爲て置くが宜いとか、悪いとかいふやうなソオニヤなどは一人も居無かつた。此所では、此方へ行くか、彼方へ行くか、何方にするかといふ選擇を許されることは無かつた。此所では、毎日二十四時間を其様な種々な風に使ふやうなことは無かつた。自分に取つて近くも遠くも無いといふやうな何うでも宜い人々が無数に居るのでは無かつた、此所には、彼の父親との漠然とした何の極りも無い金銭上の關係などは寸毫も無かつた。ドロオホフに對する彼の恐ろしい負の記憶は少も無かつた。

聯隊では、何も彼も明晰で單純であつた。世間ぢうが、二つの不等な部分に分たれて居た、一つは、吾々のパヴログラアド聯隊で、他は——その餘の全部であつた。そして、その大きい餘のものに對しては、何の交渉も無かつた。聯隊内では、何も彼も善く知れて居た。この男は中尉で、彼の男は大尉、此の男は好人間だが、彼の男は左様で無い、が、究局る所、誰も彼も戦友であつた。酒保は貸で物をよこした、俸給は四月目四月目に來るのであつた。考慮とか、選擇とかの必要は寸毫も無かつた、唯だパヴログラアド聯隊で賤しいと考へられて居た事を爲さへし無ければ宜かつたのだ、そして、機會が來た時に、極められ且命ぜられた極く明瞭な事をやりさへすれば宜かつたのだ、乃ち、それで結構であつたのだ。

聯隊の生活の極つた規定に再服従してしまつて、ロストオフは、疲れた人が横になつて憩む時と同なじやうな愉快と安堵の感を持つた。聯隊の生活が、ロストオフに取つてはこの戦役に於てのなかく、大きい安堵であつた、といふのは、ドロストオフに負けてから（その事に對しては、彼を慰藉さめやうとする家族の骨折に拘らず、彼は自ら宥ふことが能き無かつたのだが）、彼は往時のやうな勤め方は爲すに、善い行状と、全く善い軍人、善い將校、即ち善い人間であることゝで以て、自分の過失を償はうと決心した、所でさういふ善い人間になるといふのは、世間では難かしいことであるのだが、聯隊の裡では極く能き易い爲事であつた。ロストオフは、自分の博奕の負債を五年内に兩親に拂ひ返さうと決心した。彼は、これ迄一萬留送つて貫つて居た、今、彼は唯だ二千留だけを取つて、残餘は取ら無いで置いて、兩親からの負債がそれで消えるやうにしやうと、決心したのであつた。

引續いた退却や、進軍や、ブルツスクとか普魯西領アイラウなどでの戦闘の後で、吾軍はバルテンスタイン附近に集中した。彼等は皇帝の到着と、新たな戦役の開始を待つて居た。

バアヴログラアド聯隊は、軍の中の千八百〇五年の戦役に加はつた部隊に屬して居るので、兵の補充が十分に能きるまでといふので、露西亞に止まつて居た、で、この戦役の最初のうちの戦闘には間に合はなかつた。この聯隊は、ブルツスクや普魯西領アイラウの戦闘には少しも加はら無かつた、そして、戦役の後半に於て、戦場で軍に合して、ブラアトフ枝隊に附かせられた。

ブラアトフ枝隊は、本軍から獨立して行動して居た。數回バアヴログラアド驃騎兵は敵との小戦に加はつた、捕虜を取つた、そして、一度などは、元帥ウーデーノオの馬車を奪つたこともあつた。四月には、バア

ヴログラアド驃騎兵は、數週間、全然破滅した人の居無い或る獨逸の村の附近に營舎した、そして、その地點から寸毫も動か無かつた。

雪解けて、泥濘で、寒かつた、氷が河の上で破れた、道路は通れ無かつた、數日間、馬に遣る秣も無ければ、人の糧食も無かつた。糧食の輸送が駄目なのを見て、兵卒どもは、馬鈴薯でも見付けやうと、捨てられた、人の居無い村の周圍へ散らばつた、が、其様なものさへ極く、僅しか見付から無かつた。

何も彼も食ひ盡くされて了まつた。で、その地方の總ての住民が通けて了まつたのだ、残つて居たものどもは乞食より甚かつた、で、さういふ者どもからは何も取る物が無かつた。それ所か、兵卒たちが、元來は憫隱の情などに動かされるもので無いのに、往々自分等の最後の食料をさういふ住民に遣つた位であつた。

バアヴログラアド聯隊は、戦闘では、負傷者として唯だ二人を失つたのみであつた。が、饑餓と病氣とで兵の半分を失つた。病院では彼等が必らず死ぬるのであつたので、熱病や、悪い食物から来る膨大などを病んで居る兵卒どもが、病院へ行くよりはましたといふので、弱い身體を引摺りながら、隊伍に加はつて居て、尙且任務を捨て無かつた位であつた。

春が來るといふと、兵卒どもは、何故だかマリヤの甘根と彼等の呼ぶ、地から生出て來るアスバラガスのやうな植物を見つけた、で、彼等は、野や草場をさまよひ廻つて、このマリヤの甘根（その癖太く苦かつた）を探した。彼等は、この毒な根を食ふことは固く禁ぜられて居たに拘らず、それを劍で掘つて食つた。春になると、手や、脚や、顔の脹れる新な病氣が兵卒の間に流行りだした。醫者たちは、その原因をこの根を食ふことに歸した。が、禁制に拘らず、デニイソフの中隊の兵卒どもが、マリヤの甘根を殊に多量食つた、といふのは、彼等は、この二週間は、最後の乾菓をチビく出して居て、一人に唯つた半封度だけしか與へず、

そして、貯蔵の最後の分の馬鈴薯は、芽を吹いて、腐つて居たからであつた。馬も又、この二週間は、家々の藁屋根を食せられて居た、彼等は恐ろしく瘠せて居た。そして、未だ、房になつて延びだして居た毛むくじやらの冬毛で、蓋はれて居た。

さういふ缺乏の状態に拘らず、兵卒も將校も、全く平常の通りな生活を爲て居た。全く平常の通りに、今は蒼い膨れた顔と裂けた制服でありながら、驃騎兵たちは、點呼には整列し、糧秣の徴發に出、馬の手入れを爲、自分たちの武器を磨き、馬糧の代りに、屋根から藁を引摺つて來、そして、食事の時は、大釜の周圍に集まり、其所から、腹を満たし得ずに、自分たちの食物の悪いことや、空腹に就て冗談を云ひながら、起ち上がるのであつた。全く平常の通りに、任務明けの間暇には、兵卒どもは燎火を焚き、その前で裸體になつて身體を暖め、烟草を飲み、芽の出た腐つた馬鈴薯を拾つて來て、それを焼き、そして、ポイチュムブキンやスヴォオロフの戦役の物語か、恰愴なアリヨオシヤや、僧たちの爲事師のニコオルカの昔話を、話したり、聞いたりした。

將校たちは、平常通りに、二三人宛一緒に、家根の無い破れた家に住つて居た。古參の將校たちは、藁や馬鈴薯や、兵卒全體を支へて行く手段を捉まへやうとすることに、一生懸命に掛つて居ると、若い連中の方は何時もある通りに、或るものは、骨牌で(食ふ物は何も無かつたけれども、金錢は多量あつたのだ)、他のものは、一層無邪氣な遊戯、鐵環戲や、九柱戲で、時を費やすのであつた。戦役全般の原因に就ては殆ど何の談話も無かつた、これは、一つには、確なことは何も知れて居無かつたのと、今一つには、戦争が盲く行つて居無いのだといふ感が何と無く有つたのとの爲めであつた。

ロストオフは、前の通り、デニイソフと一緒に居た。そして、二人の間の友誼の結目は、二人の賜暇以來、

尙一層固くなつて居た。デニイソフは、古參の將校が自分より下の將校に示す優しい愛情からの外、ロストオフの家族の誰に就ても話さ無かつた、ロストオフは、ナタアシヤに對する古い驃騎兵の向ふ見ずの熱情が、二人の友誼を強めることに餘程力あるものであることを感じた。

デニイソフが、ロストオフを庇護しやうとして居て、能きるだけ稀にしきや危険に彼を露さ無いやうに骨折り、そして、戦闘の後で、安全で無事にロストオフが歸つて來るのを見るのが擬ふ方無き嬉しさであつたことは、全く疑ひが無かつた。

或る時徴發に出で、糧食を探しに入つた捨てられた破れた村で、ロストオフは、年取つた波蘭人と小さい孩兒を抱へて居るその娘を見出した。二人は衣服も食物も無かつた。二人は歩いて他所へ行く力も無くなつた。又乗り物で行く手段も無かつた。ロストオフは、自分の宿舎へ二人を伴つて來、自分の居る方へ置いてやり、そして、老人が癒るまで二三週間食はして遣つた。ロストオフの僚友の一人が、女の談話が出た時に、ロストオフはなかく敏速い男だと云ひ、彼が救つた奇麗な波蘭女を僚友たちにも紹介し無いのは怪しからんと云つて、その問題でロストオフを嘲弄し始めた。

ロストオフは、その戯言を侮辱と取つた、そして、デニイソフが決闘にならぬやうにするのがなかく、骨が折れた位の甚いことを相手の將校に向つて云つた。その將校が歸つてしまふと、ロストオフの波蘭女に對する關係に就ては自分では何も知つて居無かつたデニイソフは、餘り性急だと云つて、ロストオフを叱り始めた、すると、ロストオフはデニイソフに斯う答へた――

「何とでも云ひ給へ……。僕には彼の女が妹のやうに、思はれてなら無いんだ、彼様なことを云はれると何れ程厭な心持が爲るか、一寸と云ひ様が無い位なんだよ……それはね……うん、丁度斯うなんだ……」

デニイソフはロストオフの肩を叩いた、そして、ロストオフを見ずに部室の裡を彼方此方と歩き始めた、デニイソフは、感情が激すると、何時もさう爲るのであつた。

「君たちロストオフ家の奴等は誰も彼も何といふ面白い痴者の集合なんだらう」と、彼は云つた。ロストオフはデニイソフの眼の裡に涙が出て居るのを見た。

(十六)

四月には、軍は皇帝の到着の報で昂奮させられた。ロストオフは、皇帝がバルテンスタインで行なつた觀兵式に參列することは能き無かつた、バアヴログラアド驃騎兵は、バルテンスタインから忽然遠方の前面の前線に居たのであつた。

彼等は野營を爲て居た。デニイソフとロストオフは、兵卒が二人の爲めに地面に掘つた、木の枝や、芝で屋根を葺いた土小舎に住んで居た。小舎は、兵卒の間にその時分流行りだしたばかりの型に従つて造られたものであつた。幅一エル半、深さ二エル、長さ三エル半の塹壕が掘られた。その塹壕の一端に昇降段が掘り開けられた、そして、それが、入口にも入路にもなつて居た。塹壕その者が部室であつた、そして、その裡に、運の好い將校たち、例へば大尉などが、昇降段から離れた向ふの端に積重ねてある板を持つて居た——これが卓子であつた。塹壕の兩側に土が積み上られた、その小高い所が、二つの寢臺と長椅子を成して居た。屋根は、人が真中では真直に立て、寢臺では、卓子の近くへ動いて行きさへすれば、坐ることが能きるといふやうな風に拵へてあつた。

彼の中隊の兵卒どもに好かれて居たので、何時も贅澤に暮らして居たデニイソフは、屋根の前面の部分

板を釘付けに爲せた、そして、その板へ破れて居るが併しセメントで接合で窓硝子を嵌めさせた。極く寒い時には、彼等は、兵卒の燄火から真赤な火を、曲けた鐵板へ入れて持つて来て、昇降段の傍へそれを置いた。(デニイソフは小舎のその部分を客室と呼んで居た)で、これが、デニイソフやロストオフの所へは何時も幾人か来て居た將校たちが、襦袢一枚限りで何時も坐つて居た位、部室を暖かくしたのであつた。

四月に、ロストオフは當番であつた。徹夜の後で朝八時に歸つて来て、熱い火を取りに遣り、雨の徹つた下衣を代へ、祈禱を云ひ、茶を少許飲み、身體を暖め、自分の居周圍や、卓子の上を片付け、そして、風に露されて居た赤い顔で、襦袢一枚で、頭の後へ手を組み合せて、仰向に臥て居た。彼は、自分の最近の偵察行動に對して、昇級することは確實だと思ひ廻らしながら、心持の好い默想に耽つて居た、そして、デニイソフの歸つて来るのを待ち兼ねて居た。彼はデニイソフと談話を爲度かつたのだ。

彼は、小舎の後で、確に焦立つて居るらしいデニイソフの響渡る怒號り聲を聞いた。ロストオフはデニイソフが誰に云つて居るのか見やうと思つて、窓へ行つた、と、給養係のトプチエーソフを見た。

「あの根を腹へ詰め込ましたしちやア不可と、お前に云ひ付けたいぢやア無いか——奴等がマリヤの何とか彼とか云つてるやつなんだ」と、デニイソフは怒號つて居た。「おい、ラザアルチュックが野で抜いて居たのを、俺が自分で見て来たんだぞ」

「私は命令を出しましたんです、貴下、奴等が一向聞きませんのです」と、給養係は答へた。

ロストオフは再寢臺に臥た、そして、満足して思つた、「今は彼奴に何でもやらして置け、奴がガミク／＼云つてる間に、俺の方は爲事を終つて了まつて、斯うして此所で臥て居るんだ——あゝ、結構だ」

壁越しに、彼は、今給養係の外に誰か、物を云つて居るのを聞くことが能きた。デニイソフの素速い惡

漢の侍僕、ラヴルウーシカが、糧食が来はせぬかと見張りに出て居る間に見た乾葉や牛などの或る輸送隊のことを何かデニイソフに話して居た。

再ロストオフは、先より少し遠方でデニイソフの叫聲と、「鞍だ、第二分隊」といふ言語を聞いた。

「何處へ行くのかな？」と、ロストオフは思った。

五分してから、デニイソフが小舎へ入つて来た、泥だらけの足で寢臺の上へ這ひ上り、腹立たしさうに煙管を點け、自分の物を悉皆其邊へ播き散らかし、鞭と劍を着けて、小舎を出やうと爲した。何處へ行くのかといふロストオフの間に對して、彼は腹立たしさうに、漠然と、爲る爲事があるのだと答へた。

「神も見そなはせ、それでは、そして、吾優渥なる皇帝も」と、デニイソフは出て行きながら、云つた。ロストオフは小舎の外で、泥濘の裡を撥ねかして行く五六匹の馬の蹄の音を聞いた。ロストオフは、何處へデニイソフが行くのであつたかを見出さうとは寸毫も爲無かつた。自分の隅で、すっかり暖まつて、睡入つて了まつた。そして、夕方になつて、艱然と小舎の外へ出た。

デニイソフは未だ歸つて居無かつた。天氣は好くなつて居た、直ぐ隣の小舎の傍で、將校が二人で、大笑ひを爲ながら、杭の代りに大きい萊根を和かい泥濘のなかへ突込んで、鐵輪戲をやつて居た。ロストオフはその仲間へ入つた。勝負の眞中で、將校たちは、自分たちの方へ乗り付けて来る幾つかの輸送馬車を見た、瘠せた馬に乗つた十五人ほどの驃騎兵がその後から隨いて来た。驃騎兵たちに衛られた輸送馬車は繫繩の所まで乗り附けた、そして、驃騎兵の一群がそれを取り圍いた。

「あれ、見給へ。デニイソフは何時もブツ／＼云つて居たんだが」と、ロストオフは云つた、「到頭糧食が来たぢやア無いか」

「それにしても、宜い時さ」と、將校たちは云つた。「兵卒どもがさぞ喜ぶことだらうなア」驃騎兵たちの少し後を、デニイソフが、二人の歩兵將校と談話を爲ながら、一緒に乗つて来た。ロストオフは彼等を迎へに行つた。

「貴下に注意しときますが、大尉」と、將校の一人、怒つて居るのが明白な、瘠せた小男が、云つて居た。

「いや、僕は云つたぢやア無いか、何うしたつて渡さ無いよ」と、デニイソフは答へた。

「貴下の罪になりますぞ、大尉。暴動ですぞ——自分の軍の輸送物を奪つて了まふなんて。僕等の兵はこの二日何も食ふ物が無かつたんです」

「俺の方のは二週間何にも無かつたんだい」と、デニイソフが答へた。

「これは強奪です、貴下の罪になりますぞ、貴下」と、聲を高くして、歩兵將校が繰り返した。

「けれども、何時まで人を困らせるんだい？おい？」と、不意に凄まじい權幕になつて、デニイソフが怒號つた。「罪を負ふのは俺なんだ、君等ぢやア無い、痛い目を見んうちに宜い加減にしろ。歸れ」と、彼は、將校たちに向つて叫んだ。

「宜しい」と、小さい將校が、寸毫も恐れず、去かうとも爲無いで、怒號り返した。「強盗だ、確に……」

「畜生、無事なうちに、駈足で歸れ」で、デニイソフはその將校の方へと動いた。

「宜しい、宜しい」と、將校は脅迫的に云つた、そして、馬を振り向けて、鞍の上で揺れながら、躍で行つて了まつた。

「犬が垣根に跨がつて居る、犬が命懸で垣根に跨がつて居る」と、デニイソフは、その後から呼んだ——騎兵が馬に乗つた歩兵將校に拂ひ得る一番酷い侮辱であつた、で、ロストオフの傍へ乗り付けて、彼は噴飯

した。

「輸送品を奪つて来た、歩兵から暴力で奪つて来たんだ」と、彼は云つた。「何うして兵を餓死させることが能きるものか」

驃騎兵たちが奪つて来た軍需品は、歩兵聯隊に宛てられたものであつた。が、輸送品に護衛が無いことをラヴルウーシカから聞いて、デニイソフと彼の驃騎兵は、暴力で食料を奪つて来たのであつた。乾葉が兵卒に多量に分けられた、彼等は、他の中隊へもそれを分けた位であつた。

次の日、聯隊長はデニイソフを呼びよこした、そして、自分の眼へ、廣げた指を當て、云つた――

「私は此の事件を斯の通りに見るんだ、宜いかね、私は何も知らんのだ、だから、何の處分も爲んのだ、けれども、君は本部へ行つて、其所の兵站部へ行つて、巧く辯解して置くが宜いよ、そして能きれば、それだけの食料に對して受領書を出しとき給へ。左様で無いと、歩兵聯隊の方からの請求が成り立つといふと、少し騒ぎになつて、面白く無い結末になるかも知れんからね」

デニイソフは、忠告通りに爲やうといふ誠實な所存で、聯隊長の所から司令部へ眞直に行つた。

晩方、彼は、ロストオフがその朋友の様子で前には一度も見たことの無いやうな様子で小舎へ歸つて来た。デニイソフは物が云へ無かつた、そして、唯だハア／＼喘いで居た。ロストオフが何うかしたのかと、聞くといふと、唯だ微弱な、皺まれた聲で、断片な罵詈雑言と脅嚇を云ふことが能きたばかりであつた。

デニイソフの状態に驚かされて、ロストオフは、衣服を脱いで、水を飲んで、醫者を呼んだら宜からうと、彼に云つた。

「俺を、強奪行爲として軍法會議に附さうと云やアがるんだ――あゝア。今少し水を呉れ。――俺を軍法

會議で罰するなら罰して見ろ、俺は屹度、俺は屹度悪黨どもをやつ付けて見せる、屹度皇帝に申しあけるんだ――水だ」と、彼は云つて居た。

聯隊の醫者は、血を取るのが必要だと云つた。深皿一杯の黒血がデニイソフの毛むくじやらの腕から取られた、そして、彼は其所でやつと起つた事件を話し得るまでに回復した。

「俺は彼所へ着いた」と、デニイソフは云つた。「おい、お前たちの長官の居る所は何處だ？」と、俺は尋いた。奴等が教へて呉れた。「何卒ぞお待ちくださいませんか。」「僕は用で来たんだ、三十露里以上も遠方から来たんだ、待つ時間が無いんだ、直ぐ取り次いでください。」「宜しい、が、大盜賊奴が出て來やアがつた、而も、奴俺に講釋を聞せよと思やアがつたんだ。」「それは強奪だ」と、奴が云やアがるんだ。

「強盜は」と、俺は云つた。「自分を養ふ爲めに食料を奪る人間では無くつて、さういふ物を取つて自分の衣囊を満たす奴なんだ。」「お黙まりなさい。」「宜しい。」「兵站官に受領書を出しなさい、けれども、事件は、總司令部へ報告することになりませう」と、奴が云ふんだ。俺は、兵站官の前へ行つた。内へ入る。卓子に坐つて……誰だ？。いや、實に驚くぢやア無いか。……吾々を餓死させやうと爲たのは誰だと思ふ？」と、デニイソフは、卓子が殆ど顛覆り返つて、その上の杯が踊つた程の烈しさで、針を立てた腕の拳で叩いて、

怒號つた。「テリヤアニンだ……何だ、吾々を餓死させやうと爲たのは貴様か？」と、俺は云つた、で、鼻柱に一つ食はしてやつた、それは、眞向に當つたんだ、で、それから、今一つ、斯う……やア……貴様は何々だ……で、俺は奴を擲り付けたんだ。が、なか／＼面白かつたな、實に」と、デニイソフは、意

地の悪い得意の微笑で、黒い口鬚の下から白い齒を見せながら怒號つた。「他の奴等が俺を引き離さ無かつたら、俺は奴を殺すんだつたんだ」

「何故左様怒るんだい、静にして居給へ」と、ロストオフが云つた。「再も出て来るぢやア無いか。待ち給へ、繻帯し無けりやアなら無いんだから」

デニイソフは繻帯された、そして、寢床へ入れられた。次の日、彼は、落着いて勢が好くなつて起きた。が、正午頃に、聯隊の副官が、デニイソフとロストオフの一緒に居る小舎へ嚴つかしい陰鬱な顔でやつて来て、前の日の事件を取り調べる聯隊長から大隊長デニイソフに宛てた公文書を、残念さうに、二人に見せた。副官は、事件は甚だ不幸な方向を取りさうだと二人に話した、軍法會議が開かれる筈であつて、掠奪や、軍規違反に關して嚴重な處分が行はれて居るこの際だから、卒伍に落される位で終結になれば、先づ倅だらうと云つた。

被害者側からの訴告は、大隊長デニイソフは、輸送品を奪ひ去つた後で、何の原因も無く、酔拂つた状態で、兵站部長の所へ来て、彼を盜賊と呼び、彼を擲ぐりさうに爲、そして、外へ伴れ出されると、役所へ跳び込んで、二人の官吏を攻撃し、その一人の腕を挫いた、といふのであつた。

ロストオフから尙尋ねると、それに答へて、デニイソフは、笑ひながら、誰か他の奴がこの事件には干與はつて居るらしいのは確實であるが、事件は實に下ら無い愚劣くしいことなので、自分は何の種類の法庭も決して恐はし無い、で、悪黨どもが、自分に喧嘩を爲掛けやうとするのなら、自分は、其奴等が容易に忘れることが能き無いやうな返答を其奴等に與へてやるのだと云つた。

デニイソフは、その事件に對しては、斯ういふ無頓着な風で、話した。が、彼を善く知つて居たロストオフは、彼は、心の裡では（彼は他の人々からそれを隠して居たけれども）、軍法會議を恐れて居て、不幸な結末を持つことが明白に確であつたその事件を甚く氣に爲て居るのに、氣が付かぬ譯には行か無かつた。書類

が毎日來だした、通知が軍事裁判所から來た、そして、デニイソフは、次席の將校の命令の下に彼の中隊を置いて、五月の一日に、兵站部での喧嘩の取調を受けに、師團本部に出頭し、召喚を受けた。

その前日、ブラアトフは哥薩克兵の二聯隊と驃騎兵の二中隊を以つて、敵の偵察を企てた。デニイソフは何時もの向ふ見ずの勇氣で、戦線の先頭を乗つた。佛蘭西の狙撃兵が撃つた彈丸の一つが、彼の脚の上部の肉の多い部分に中つた。他の時であつたら、何うしたつて、デニイソフは其様な微少とした傷で聯隊を離れは爲無かつたらう、が、今は、得たり賢しと、それを司令部に出られ無い語托に爲た、そして、病院へ入つた。

(十七)

六月に、フリイドランドの戦があつた、バアヴログラアド驃騎兵はそれには加はら無かつた。その後、直ぐ休戦に爲つた。

朋友の居無いのを苦しく感じ、彼が去つた以來何の音信も得無かつたロストオフは、朋友の傷と彼の難件の成行が心配になつた、で、彼は、休戦を好い機會に、病院へデニイソフを訪ねて行く爲めに、休暇を貰つた。

病院は、露西亞と佛蘭西の軍隊に二度劫掠された小さい普魯亞の町に在つた。田舎が非常に心持好く見える夏の天氣でさへ、この小さい町は、その破れた屋蓋や、垣、その汚い街や、襤褸の住民、それから、その邊をさまよつて居る病氣や酔拂ひの兵卒どもで、著しい陰鬱な對照を表して居た。

病院は、庭に破された垣の殘餘のある、窓框や硝子が所々破れて居る石の家であつた。繻帯した、蒼い澎

れた顔の數人の兵卒が、庭の日向で歩いたり、坐つたりして居た。

ロストオフは、戸口を入るや否や、自分の周圍に、病院や、腐つて行く肉の悪臭のあるのに気が付いた。階段の上で、彼は葉巻を喫へた露西亞人の軍醫に出會つた。その後から露西亞人の助手が隨いて來て居た。

「一遍に左様方々へは行けはせん」と、醫者は云つて居た。「晩にマカアル・アレキセイイチの所へお出、私は彼所に居るから。助手は尙何か尋いた。いや、君が宜いと思ふやうにやり給へ。何うだつて別に變りがあるものかい」

醫者は、階段を上つて來るロストオフを見つけた。

「何の用ですか、貴下」と、醫者は云つた。「何の用で此所へお出なすつたね？。窒扶斯に罹り度くつて、彈丸に中てられ無かつたんですかい？。此所は傳染病院ですぜ、貴下」

「何うして？」と、ロストオフは尋いた。

「窒扶斯ですよ。入れば誰でも死にますよ。吾々二人、マケエーフと私だけが、(彼は、助手を指した)、此所ではまだ倒れ無いで居るんです。吾々、醫者、五人が最早今までに此所で死んで居るんです。新任者が來るや否や、一週間経たなうちに倒れましたよ」と、醫者は、如何にも満足した態で、云つた。「獨逸の醫者どもを呼びに遣つたんですが、吾々の同盟者はこの爲事を好まんです」

ロストオフは、其所に傷で臥て居る驃騎兵の大隊長デニソフに逢ひ度いのだと譯を云つた。

「知りませんな、分かりませんよ、貴下。私は三つの病院を私一人で見えて居るですからねえ——四百人以上の患者なんです。善いことには、普魯亞の慈善な婦人たちが、珈琲や外科用布を送くつて呉れます——一月に二封度づ、——で無からうものなら、吾々は何うにも爲やうが無くなるんです」と、彼は笑つた。「四百

人ですよ、で、まだ新患者がドシ／＼やつて來やがるんです。四百人だね、左様だらう？。おい？」と、彼は助手に振り向いた。

助手は迷惑さうであつた。彼は、確に多辯の醫者が早く歸つて呉れれば宜いと思つて居て、ぢれ込みながら待つて居るのらしかつた。

「少佐デニソフ」と、ロストオフは繰り返した。「モリテンで負傷した人です」

「その人は死んだと思ひます。ねえ、マケエーフ？」と、醫者は無雜作に助手に尋ねた。が、助手は醫者の言語を保證し無かつた。

「背の高い、赤つ毛の男ですか？」と、醫者は尋いた。

ロストオフはデニソフの人相を説明した。

「その人は此所に居ました、その人は居ました」と、醫者は、戯けたやうに、云つた。「何うも死にましたな、けれども、念の爲めに見ませう。名簿が有ります。君が持つてるかねえ、マケエーフ？」

「名簿は、マカアル・アレキセイイチの所に有ります」と、助手は云つた。「けれども、將校室の方へおいでなすつて、御自分でお捜しなすつたら宜いでせう」と、彼は、ロストオフに振り向いて云つた。

「いや、おいでなさらん方が宜ござんすぜ、貴下」と、醫者は云つて、「貴下御自身此所に居無ければならんやうに爲るかも知れませんぜ」が、ロストオフは點頭を爲て、醫者に別れ、案内を助手に頼んだ。

「後で私を怨んでは不可せせんよ、宜しいか」と、醫者は下の階段から、上向いて叫んだ。

ロストオフと助手は廊下へ行つた。病院の悪臭は、ロストオフが鼻を摘んで、進む勇氣を回復する爲めに一寸と立ち止まら無ければなら無かつた位、その暗い廊下で強かつた。戸が右の方で開いた、そして、其

所から、襯衣一枚限りしか着て居無い、裸の足の、瘡せた黄色い男が、撞木杖を突いて、跛足を引きながら出て来た。戸柱に凭たれて、キラ／＼した心配さうな眼で近寄つて来る人々を見詰めた。ロストオフは戸の裡を一寸と見たりも、病人や負傷者が、薬や外套を敷いて、床に臥て居るのが見えた。

「裡へ入つて見て宜いんですか？」と、ロストオフは尋いた。

「御覽になるだけのことは無いでせう」と、助手は云つた。が、助手が入らせるのを明白に厭がつて居るらしかつたが爲めに、反つてロストオフは兵卒室へ入つて行つた。廊下で少し慣れた悪臭が、此所では一層強かつた。此所では、悪臭が違つて居た、一層烈しかつた、そして、廊下のも此所から来るのだと嗅ぐことができた。

大きい窓から来る日光に明るく照らされた長い部屋に、病人や負傷者が、真中に通路を開けて、壁の方を枕にして、二列に臥て居た。その大部分は人事不省であつた、外来者の入つて来たのに寸毫も気が付か無かつた。知覺のある者どもは、起きるとか、瘡せた黄色い顔を擧げるとか爲た、そして、衆皆、助力、批難、他人の健康に對する羨望の何れも同なじ表情で、凝乎とロストオフを眺めた。

ロストオフは、部屋の真中へ行つて、開いた戸から續いた部屋々々を覗いた、そして、兩側に同なじ状態を見た。彼はヂツと立つて、黙まつて身邊を見廻した。彼は、斯ういふ状態を見やうとは全然思ひ掛け無かつた。彼の直ぐ前に、真中の空いた所を横切つて、何にも無い床の上に、髪が鉢の形に圓く刈つてあるのだから多分哥薩克兵だと思はれる病人が臥て居た。この哥薩克兵は、大きい腕と脚を伸ばせるだけ伸ばして、仰向に臥て居た。顔は、眞赤で、眼は、白眼しきや見え無い位、頭の裡へ全然沈んで居、尙一層赤かつた脚や手には、血管が紐のやうに現て居た。その男は、終始床へ頭を打つ／＼けて居、そして、何か云つて、絶え

ずそれを繰り返して居た。ロストオフは、その男が云つて居たことを聞いて、彼が繰り返して居た言語を聞き別けた。その言語は「飲む物——飲む物——飲む物」といふのであつた。ロストオフは、病人をその居場所へ戻して、水を遣る人は誰か居無いかと見廻した。

「此所で病人の世話を爲るのは誰かね？」と、彼は助手に尋いた。その途端に、兵站部附の兵卒、病院の従卒が、次の部屋から入つて来た、そして、練兵の時の歩調で進みながら、ロストオフの前で直立した。

「今日は、貴下」と、この兵卒はロストオフに向つて眼をギョロ／＼させながら、明白にロストオフをその係りの長官と間違へたらしい態度で、叫んだ。

「彼を元の座へ伴れてけ、水を遣れ」と、ロストオフは哥薩克兵を指して、云つた。

「畏まりました、貴下」と、兵卒は、尙一層強く眼をギョロ／＼させ、身體を眞直にしながら、丁寧に云つた、が、左様爲やうと動きは爲無かつた。

「いや、此所では何うにも爲やうは無いんだ」と、ロストオフは思つて、眼を落した、そして、彼は、去つて了まはうと思つた、が、右の方から自分の上に向けられた意味あり氣な眼容に氣が付いた、で、彼は、その方を見返つた。殆ど隅の所に、軍服の外套の上に坐つて、骸骨のやうに瘡せた、厳格な黄色い顔の、剃ら無い半白鬚の年取つた兵卒が居た。彼は、ロストオフを凝乎と見て居た。老兵卒の隣りの男が、ロストオフを指しながら、老兵卒に何か囁いて居た。ロストオフは、老人が自分に何か頼まうと爲て居るのだと見た。彼は近寄つた、と、老人が身體の下に隻脚しか曲けて居無いのを見た、今一つの方は膝の上から斷り去られて居たのだ。老人の他の側の、彼から少し離れた所に、平たい鼻に蠟のやうな蒼白さがあり、未だボツ／＼赤い所のある顔の、眼の眼瞼の裡へ落込んだ若い兵卒の動か無い形が、頭を後反して横たはつて居た。

ロストオフは、平たい鼻の兵卒を見た、と、戦慄が自分の背筋を走り降つた。

「やア、其者は死んで……」と、彼は助手に云つた。

「吾々は、幾度願つたか知れませんが、貴下」と、老兵卒は、下顎に戦慄を持つて云つた。「あの男は今朝早く死にました。吾々も人間です、犬ではありません……」

「直に始末するよ、伴れてかせる、伴れてかせる」と、助手は急いで云つた。「行きませう、貴下」

「行かう、行かう」と、ロストオフは急いで云つた、そして、眼を落し、身體を縮こめ、自分の上に見据ゑられた多くの責るやうな羨やんだ眼の列の間を、見られずに通つて了まはうと骨折りながら、彼は部室を出た。

(十八)

助手は廊下をつけて行つた、そして、間に開いた戸のある三つの部室の、將校室へロストオフを案内した。その部室々々には寢臺があつた、將校たちは、その上に、坐つて居るのもあれば、臥て居るのもあつた。或る者は病院服で部室の裡を歩いて居た。

將校室でロストオフに出會つた最初の人は、隻腕を無くして居る瘠せた小男であつた。その男は、夜帽と病院服で、短かい煙管を齒の間に喫へて、最初の部室を歩いて居た。ロストオフは、ツクツクとその男を見ながら、何處でその男を見たことがあるのか、憶ひ出さうと骨折つた。

「神の御意で、妙な所で再お目に掛るぢやアありませんか」と、小男が云つた。「ツウシンです、ツウシンです、シーニングラアベンの後で貴下方を伴れて歸つたことを記憶しておいで、すかね？。到頭一片切り取ら

れたです、それ……」と、彼は、微笑みながら、自分の病院服の空の袖を見せて、云つた。「貴下が捜しに来たのはヴァシイリ・ドミツリエヴィイチ・デニイソフ——此所での僕の同居人——ですかね？」と、ロストオフが逢ひ度いのは誰であるかを聞いて、彼は云つた。「此方、此方」で、彼は、幾人かの笑つて居る聲が聞えて来た次の部室へとロストオフを案内した。

「能く、彼の人たちは此様な所に居られたものだア、而も笑つて居るなんて」、兵卒室で彼れ程甚かつた屍骸のやうな臭氣を未だ忘れず、兩側から自分を見送つたあの多くの羨んだ眼や、落ち窪んだ眼の若い兵卒の顔やを、未だ周圍に見て居るやうな氣が爲て、ロストオフはさう思つた。

デニイソフは、それが晝の十二時であつたのに、蒲團を頭まで全然被ぶつて、寢床で睡て居た。

「やア、ロストオフ。何うだね、何うだね」と、尙且聯隊に居た時と同じ聲で叫んだ。が、ロストオフは、この何時もの快活と威張との後に、何か新たな險惡な制へ付けた感情が、デニイソフの言語や、調子や、顔の表情の裡から覗き出して居るのに氣が付けて、悲しかつた。

傷は、一寸としたのであつたのに、負傷後最早六週間経つて居ても、未だ癒ら無かつた。顔は、病院の裡の總ての顔のやうに、同じ膨れた蒼い色であつた。が、それは、ロストオフを驚かしは爲無かつた、ロストオフを驚かしたのは、デニイソフが彼に逢つたのを喜んで居無いで、デニイソフの微笑は強て造つたものであることであつた。デニイソフは、ロストオフに、聯隊の状態も、戦争の全體の進行に就いても、何にも尋ね無かつた。ロストオフがそれを話すといふと、デニイソフはそれには耳を貸さ無かつた。

ロストオフは、聯隊や、病院の壁の外に行はれて居るその他の自由な人生の物語が少しでも出るのをデニイソフが厭がつて居るのにも氣が附いた。デニイソフは、前の生活を忘れて、兵站部の官吏との自分の喧嘩

のみに興味を持つやうにと骨折つて居るらしかつた。

その事件が何ういふ事に爲つて居るか、ロストオフが尋いたのに答へて、デニイソフは、手早く枕の下から、兵站部長から受取つた照會書と、自分の返答の下書を引張り出した。彼は、自分の返答を読み始めて居るうちに漸次熱心に爲つた、そして、特に、彼が自分の敵に答へた酷しい皮肉な言辭に、ロストオフの注意を喚んだ。外部の自由の世から新しく来た人として、ロストオフの周圍に集まつて来て居たデニイソフの病院朋友たちは、デニイソフが彼の返答を読みだすや否や、漸次に、他所へ行き始めた。さういふ人々の顔から、總てさういふ紳士たちはこれ迄幾度と無くその物語を聞かされて、今は最早飽き／＼して居るのだと推量し得られた。唯だデニイソフの直ぐ隣りの人、肥つた槍騎兵が、陰氣さうに顔を顰めて、烟管を吹しながら、自分の薬蒲團の寢臺に坐つて居たのと、小男の、隻腕のツウシンが、不賛成さうに頭を振りながら聞いて居るばかりであつた。讀んで居る眞中で、槍騎兵はデニイソフを遮ぎつた。

「僕の云ふのは斯うなんです」と、ロストオフに振り向いて、彼は云つて、「單に皇帝に哀願すべきですよ。今丁度、世間の噂では、非常な賞が與へられる際だといふんですからね、必然有されると思ふんです」

「俺に皇帝に哀願しろなぞとは」と、デニイソフは、聲に彼の往時の力や火を投げ込まうと骨折りながら、云つた、が、その聲は無能力な短氣の言表のやうに響いた。

「何の爲めなんだ？。俺が盜賊で、もあつたら、俺は、慈悲を願ふさ、けれども、何だ、俺は、盜賊だもの。化けの皮を剝で遣らうと爲た爲めに召喚されてるんぢやア無いか。審問するなら爲て見ろ、俺は誰も怖くは無いんだ、俺は立派に皇帝と吾が國に盡くして来たんだ、俺は盜賊ぢやア無い。で、俺を卒伍に貶すなんて……宜いかね、僕は奴等に眞向から云つて遣つたね、それ、ね、僕は斯う奴等に書いたんだ、「若し、自

分が官有物の盜賊であつたとすれば……」

「それは巧く書けてる、それは疑ひ無しだ」と、ツウシンが云つた。「けれども、要點は其所ぢやア無いよ、ヴァシイリ・ドミツリイチ」と、彼もロストオフに振り向いて、「從ふべきものにやア従は無きやアなら無いんだ、所が、このヴァシイリ・ドミツリイチはそれをやら無いんだ。おい、君、検査官が、君に取つてなかく大事件になりさうだと、君に云つたぢやア無いか」

「うん、大事件なら大事件にならせて置くさ」

「検査官が君の爲めに願書を書いて呉れたぢやア無いか」と、ツウシンは續けて、「で、君はそれに記名して、この方に頼んでそれを出して貰ふが宜い。必然、この方も（彼はロストオフを指した）、司令部に勢力を持つておいでなんだらう。斯様な好機會は又と無いぜ」

「けれども、僕はへいこらくして廻ら無いと云つたぢやア無いか」と、デニイソフは遮ぎつた、そして、自分の返答を読み續けた。

ロストオフは、ツウシンや他の將校たちが呈言した方針が一番安全だと本能的に感心はしたが、デニイソフに勧めて見やうとは爲得無かつた。彼はデニイソフの助力になることが能きたら、嬉しからうと思つた、が、彼はデニイソフの頑強な意志と、眞直な性急な氣質を知つて居た。

一時間の餘も續いたデニイソフの皮肉な返答の朗讀が終ると、ロストオフは何にも云は無かつた、そして、最も沈んだ心持で、再自分の周圍に集まつて来たデニイソフの朋友等と一緒に、日の殘餘を費した。彼は、自分の知つた事柄を彼等に話した、そして、他の人々の話す物語を聞いて居た。デニイソフはその晩ぢう陰鬱な沈黙を續けて居た。

その晩遅くなつて、ロストオフが辭し去らうとする時分に、彼は、何か頼まれて行く用は無いかと、デニイソフに尋いた。

「左様、一寸と待つて呉れ」と、デニイソフは云つた。彼は他の人々を見廻した、そして、枕の下から紙を取り出して、インキ壺の有る窓へ行つて、坐つて書き出した。

「石の扉に頭を打つ、けたつて何の役にも立たんやうだ」と、窓から来て、ロストオフに大きい封筒を渡しながら、彼は云つた。それは、検査官が下書を爲て呉れた皇帝に宛た請願書であつた。その裡では、デニイソフは、兵站部の失態に就ては何にも云はずに、單に慈悲を願つたのみであつた。

「それを出して呉れ、何うも……」。彼は云ひ切ら無かつた、そして、強て擬つた弱々しい笑顔で微笑んだ。

(十九)

聯隊へ歸つて、聯隊長にデニイソフの事件の状態を報告してから、ロストオフは、皇帝に宛てた書面を持つて、テイルシットへと乗つた。

六月の十三日に、佛蘭西と露西亞の兩皇帝がテイルシットで會した。ポリイス・ヅルベエツコイは自分が附いて居た高位の人に、テイルシットに止まる筈になつて居たその人の隨員の間へ自分も加へて呉れと頼んで置いた。

「豪傑を見度いですから」、彼は、自分がこれ迄は、他の誰も同なじやうに、何時もボナバルトと云つて居たナポレオンを指して、さう云つたのであつた。

「ボナバルトのことを云ふのかね?」と、その將官は、微笑みながら、ポリイスに云つた。

ポリイスは不思議さうに自分の將官を眺めた、そして、直ぐに、それが調戲の試験であるのを見た。

「私は公爵、皇帝ナポレオンのことを申すんです」と、彼は答へた。微笑を以て、將官はポリイスの肩を叩いた。

「君は出世するぞ」と、彼は云つた、そして、ポリイスを伴れて行つた。

ポリイスは、兩皇帝の會見の日に、ニエメンに居た僅な人々のうちであつた。彼は皇帝の字章のある袂を見、向ふ岸に沿うて佛蘭西の近衛兵の間を過ぎるナポレオンの進行を見、ナポレオンの到着を待ちながら、ニエメン河の岸の旅亭で黙まつて坐つて居る皇帝アレクサンドルの悲しさうな顔を見た。彼は、兩皇帝が小舟に乗つたのや、ナポレオンが最初に後へ達し、速く前へ歩いて行つて、アレクサンドルを迎へて、彼に自分の手を與へたのを見た、それから、兩皇帝は、假屋の裡へ入つて見え無くなつた。

さういふ高貴な社會へ入つてからは、常に、ポリイスは、自分の周圍に過ぎて居ることを非常に注意して見て居て、悉皆それを書き留めて置くのを習慣に爲た。テイルシットでの兩皇帝の會見の間、彼は、ナポレオンに隨いて居る人々の名を尋き、その人々が着て居た制服のことを尋ね、そして、高位の人々の言語を注意して聞いて居た。兩皇帝が假屋へ入つた時に、彼は自分の時計を見た、そして、アレクサンドルが出て來た時に、又それを見るのを忘れ無かつた。會見は一時間と五十三分續いた、彼は、その晩、彼が歴史的大事件だと感じた所の他の事實の間へこの事を書き留めた。

兩皇帝の隨員は少数であつたので、兩皇帝の會見の場合にテイルシットに居るといふことは、軍務に於て成功を貴ぶ人にとつては、非常に大切なことであつた、で、この特權を得ることに成功したポリイスは、自分の位地は其以後は全く確だと感じたのであつた。

彼は唯だ知られたばかりでは無かつた、彼は、認められた、善く知られた人物になつたのだ。二度彼は皇帝その人の前へ使に遣られた。で、皇帝は親しく彼を知つた、そして、宮廷ちうが、彼等が彼を新しい人間だと考へて、最初のうちに往つたやうに、最早彼を見下して立ち離れて居るやうなことは無かつた、反つて、彼が居無ければ、それに氣が付いて驚く位であつた。

ボリイスは、波蘭の伯爵ジイリンスキイといふ今一人の副官と一緒に宿を取つて居た。巴里で教育された波蘭人のジイリンスキイは、佛蘭西人を心から好いて居る富裕な男であつた、そして、ティルシットに彼等の止まつて居るうちは殆ど毎日、佛蘭西の近衛や佛蘭西の高級司令部の將校たちが、ジイリンスキイやボリイスと一緒に晝食を爲したり、朝食を食つたのであつた。

六月の二十四日に、ボリイスが宿所を共にして居たジイリンスキイは、自分の佛蘭西の知人たちに晩餐を饗して居た。この晩餐には、ナポレオンの侍従武官の一人——正客——と、佛蘭西の近衛の數人の將校たち、それから、ナポレオンの扈從の古い佛蘭西の貴族の若い青年が來た。

その同じ晩に、ロストオフは、闇に乗じて認められずに通り過ぎるやうに爲て、平服でティルシットへ來て、ジイリンスキイとボリイスの居る宿所へ行つた。

ロストオフは、全軍の人々がさうであつたやうに、總司令部やボリイスの心に起つたナポレオンや佛蘭西人に對して——彼等を敵から友に更へて了まふ——感情の革命を経て居ることから甚く遠かつた。

軍では、誰でも未だ「ボナバルトや佛蘭西人に對しては、同なじやうな憎惡、恐怖、侮蔑の混合した感情を有つて居た。ホンの此頃、ロストオフは、ブラアトフの哥薩克兵の將校と、若しナポレオンが捕虜になつたら、皇帝として取扱かはるべきか、罪人として取扱かはるべきか、孰れだらうといふ問題を論じたのであつた。

つた。

唯だホンの少し前、ロストオフは、道路で負傷した佛蘭西の大佐に出會つた、そして、その人に向つて、正當な皇帝と罪人のボナバルトとの間には何の平和も結ばれるべき筈では無いと主張したのであつた。

左様であつたので、ロストオフに取つては、彼が前哨線から今とは全然異つた眼で何時も見て居た制服を着た佛蘭西の將校たちを、ボリイスの宿所で見るのは、餘程奇異な心持が爲た。

彼は佛蘭西の將校を見るや否や、彼が何時も敵を見るといふと經驗した戦争、敵對のその感情が、直ぐに彼を襲つた。彼は、入口で立ち止まつて、ズルベツコイが其所に住まつて居るか何うか、露西亞語で尋いた。ボリイスは、廊下で聞かれぬ聲を聞いたので、その人に逢ひにと出て行つた。ロストオフを認めた最初の利那は、ボリイスの顔には當惑の態様が表はれた。

「やア、君でしたか、好く、好く來てくださつた」と、彼は、それでも、微笑みながら、ロストオフの方へ動きながら、云つた。が、ロストオフは、ボリイスの最初の衝動に氣が付いて居た。

「惡い時に來たやうだね」と、彼は云つた、「僕は來無い方が宜かつたんだ、けれども、大切な用があるもんだからね」と、彼は、冷然と云つた……。

「いや、其様なことは無いよ、唯だ僕は君が聯隊を離れて居るのに驚いたゞけなんだ。今直ぐ行くよ」と、ボリイスは、自分を呼ぶ聲に答へて云つた。

「惡い時に來たんだね」と、ロストオフは繰り返した。

當惑の表情は最早ボリイスの顔から消えて居た、明白に、考へ直し、何う爲るかといふ思案を極めたらしく、彼は非常に落着いた態でロストオフの兩手を撃つた、そして、次の部室へと伴れて行つた。ロストオフを

ツクムとまじろぎもせず眺めて居るボリスの眼は、何か蓋のやうな物——習俗的生活の青眼鏡がその上に掛つて居るかのやうに、何か薄羅でも覆はれて居るやうであつた。

「いや、まア、其様な下らんことは云つこ無し、君が来るのに善いも悪いもあるものかね」と、ボリスは云つた。彼は、ロストオフを晚餐の出て居た部屋へ伴れて行つて、彼の名を云ひ、彼は文官では無く、ボリスの昔からの朋友の、驃騎兵の將校なのだと言明して、客たちにロストオフを紹介した。伯爵ジョリスキイ、伯爵N・N、大尉S・Sと、ボリスは、客を名指して云つた。ロストオフは、佛蘭西人を睨め、不承々に點頭を爲し、そして、黙まつて居た。

ジョリススキイは、自分の團居に此の知ら無い露西亞の外来者を加へることを明白に好ま無い態で、ロストオフに向つては何にも云は無かつた。ボリスは、新來者の爲めに起された一座の氣兼に氣が付か無かつたやうであつた、そして、彼は、ロストオフを迎へたと同なじ愛想の好い落着や、眼に薄羅を掛けたやうな眼付で、談話をはづませやうと骨折つて居た。

佛蘭西人特有の丁寧さで、佛蘭西の將校の一人が、頑強な沈黙で坐つて居るロストオフに振り向いた、そして、彼は多分皇帝を見る爲めにテイルシットへ來たのだらうと、ロストオフに云つた。

「いや、私は用で來ました」が、ロストオフの短かい返答であつた。

ロストオフは、ボリスの顔で不満の様子を見付けた刹那から、佛然として居た、で、機嫌の悪い人の常であるやうに、誰も彼も、自分を敵視の眼で見居て、自分が誰もの邪魔になつて居るやうに、ロストオフには思はれたのであつた。そして、實際、彼は誰もの邪魔に爲つたのだ、談話が再始まつた時に、一座全體の談話の裡から、彼一人は除物に爲つて居た。

何で彼の男は此所に坐つて居るのだらう？といふのが、彼の上に向けられた客たちの眼が尋いた疑問であつた。彼は起ち上がつて、ボリスの所へ行つた。

「でも、お邪魔になるね」と、彼はボリスに低聲で云つた、「僕の用を聞て呉れ給へ、さうすれば、僕は去くから」

「いや、いや、寸毫も其様なことは無いよ」と、ボリスは云つた。「けれども、君は疲れて居るんなら、僕の部屋へ來て、横になつて、憩み給へ」

「うん、實際……」

二人はボリスが睡る小さい部屋へ行つた。ロストオフは、坐らずに、苛々しながら直ぐ話し始めた——その事件の責が幾干かボリスにもありでもするかのやうに。彼は、デニソフの困却のことをボリスに話し、ボリスが自分の將官に頼んでデニソフの爲めに皇帝に取りなして貰ひ、そして、その將官の手からデニソフの上書を取り次いで貰ふやうに爲て呉れるか、何うか尋いた。

二人限りになつた時になつて始めて、ロストオフは、ボリスの顔を真正面に見るのが極まりの悪い心持のするのが瞭乎と自分に分つた。ボリスは脚を組み合せ、右の手の細つそりした指を左の手で叩きながら、將官が部下の者の持つて來た報告を聞くやうに、或る時は、傍を見、次には、眼に薄羅を掛けたやうな前と同じ眼付でロストオフの顔を真正面に眺めて、ロストオフの物語を聞いて居た。ボリスが左様する度毎、ロストオフは不安を感じた、そして、眼を落した。

「左様いふ風な事件の話聞いたことはあるよ、皇帝はさういふ事件に對しては甚く厳しくなさるんだ。陛下の前まで持ち出さん方が宜からうよ。僕の考ちやア、直接に軍團の司令官に訴へた方が宜いと思ふね……」

「だが、一般に云ふと、僕の信ずる所では……」
 「では、君は何にも爲て呉れるのは厭なんだね、左様なら左様と云ひ給へ」と、ロストオフはボリイスの顔を見て、殆ど叫ぶやうに云つた。

ボリイスは微笑んだ。

「いや、決して左様ぢやア無い、僕は僕で能きだけのことはやる、唯だ僕の想像では……」
 その途端に、二人は、戸口で、ボリイスを呼ぶジイリンスキイの聲を聞いた。

「では、彼方へ行き給へ、行き給へ……」と、ロストオフは云つた、そして、晚餐を断つて、小さい部室に一人残つて、次の部室の陽氣な佛蘭西人の饒舌り聲を聞きながら、長い間彼方此方と歩いて居た。

(三十)

ロストオフは、デニイソフの爲めに執成を爲るのには最も不適當な日にティルシットに到着したのだ。彼は平人服を着て居たし、又許可を得ずに、ティルシットへ来たのだから、自分自身で當局の將官の所へ行くといふことは、全然問題に爲ら無かつた、所で、ボリイスは、その氣は有つたにしよう、ロストオフが到着した翌日に左様することは能き無かつた。

その日、即ち六月二十七日に、平和の假條約が調印された。兩皇帝は勳章を與へ合つた、アレクサンドルはレジョン・ドンヌールを受け、ナポレオンは聖アンドレエーの一等勳章を受けた、そして、その日は、佛蘭西の近衛の一大隊がブレオブラアゼンスキイの一大隊を響應する日と極られて居た。兩皇帝がこの宴會

に親臨する筈であつた。

ロストオフはボリイスに對して、甚く心持悪く不安に感じたので、後者が晚餐の後で一寸と状態を見に来た時には、彼は眠て居る態を爲た、そして、次の日は、ボリイスに逢ふのを避ける爲めに、朝早く去つてしまつた。

フロクコオトと圓帽子で、ニコライイは、佛蘭西人や、その制服を眺めたり、露西亞と佛蘭西の兩皇帝が宿つて居る街や家を善く見たりしながら、町をブラ／＼歩き廻つた。市場で、彼は、宴會の爲めに置かれた卓子や、其他の準備を見た、街々では、露西亞と佛蘭西の旗を交叉した、AとNの大きい組合文字の附いた掛線を見た。家々の窓にも、旗と組合文字があつた。

「ボリイスは俺に助力して呉れる氣は無い、俺は奴に頼まうとは思は無い。その方の問題はそれで結局だ」と、ニコライイは思つた、「奴と俺との交誼は最早これ限りだ、が、俺は、デニイソフの爲めに俺の能きだけのことを悉皆やつた上で無ければ、特に、皇帝の手許に手紙を上げた上で無ければ、此所を去ら無いぞ。皇帝へ……陛下は此所においでなんだ」と、何時の間にかアレクサンドルが宿にして居た家へと返つて来て居たロストオフは思つた。

鞍を置いた馬が幾匹か入口に立つて居た、そして、隨員は、明白に、来て来る皇帝を待ち受ける爲めらしく、其所へ乗り付けて居た。

「最早直きに陛下にお目にかゝれるだらう」と、ロストオフは思つた。「直接に手紙を上げて悉皆お話し申すことが能きなんだつたらなア……奴等は實際俺がフロクコで居るといふんで俺を拘束すもんだらうか？ いや、決して左様な筈は無い。陛下は、何方に道理があるかお解りになるだらう。陛下は何も彼もお解りに

なる、何も彼も御承知なんだ。陛下ほど公平で寛大な人が何處に有り得るだらうか？。それに、奴等が、此所に居るので俺を拘束するとした所で、何が構ふものか？」と、ロストオフは、家へ入つて行く將校を眺めながら、思つた。「や、人が入つて行くぢやア無いか。あゝ、其様なことは悉皆馬鹿々々しいことだ。俺は行つて、自分で皇帝に手紙を渡さう、俺を斯う爲せるのは、ブルベエツコイが悪いんだ」

で、不意に、彼が自分に能きやうとは、決して思ひ掛け無かつた決心で、ロストオフは、衣囊の手紙を手まさぐりながら、皇帝の宿になつて居た家へズン／＼戻つて行つた。

「いゝや、此度こそは、何うしても、アウステルリッツの後でやつたやうに機會を逸しはし無いぞ」と、皇帝に出會ふのは今か／＼と思ひながら、そして、その考で心臓へ血の突つ掛けて來るのを感じながら、ロストオフは思つた。「俺は脚下に平伏し、そして、懇願しやう。陛下は俺を引き起し、俺の話を悉皆聞いてくだすつて、その上に俺に禮を仰しやるだらう。私は善を爲ることが能きものが嬉しい、不公平を直すのが一番嬉しいことだぞ」と、ロストオフは、皇帝が彼に云ふだらうと、想像した。で、彼は、自分の上に向けられた不審さうな幾つもの眼には構はずに、階段を上つて行つた。廣い階段は入口から眞直に上へと付いて居た、右に閉まつた戸があつた。下、階段の下に、地下室へ行く戸があつた。

「誰を探して居るんですか」と、誰か、彼に尋いた。

「陛下へ手紙、請願書を上げに」と、ニコライは、聲に戦慄を持つて、云つた。

「請願書——當番の將校へ、此方、何卒」(ロストオフは下の戸へと指された)。「併し、受理され無いでせうよ」

この冷淡な聲を聞いて、ロストオフは自分の爲て居る事柄を思つて、甚く狼狽を感じた、何時皇帝に出會

ふかも知れぬといふ考が、非常に誘惑的で、又それ故に、非常に恐ろしくつて、彼は直ぐ逃げ出さず思つた位であつた、が、従者が彼を迎へて、彼の爲めに掛りの將校の部室の戸を開けた、そして、ロストオフは入つた。

白下袴の、長靴の、ホンの今着たばかりらしいバチイスト麻布の襯衣の、三十歳位の、脊の低い、肥つた男がこの部室に立つて居た。侍僕がその男の後で、奇麗な、新しい、絹の刺繍のある下袴鈞を扣鈕で留めて居た、その下袴鈞が何うしてだかロストオフの注意を引いた。肥つた男は、續いた部室の中の誰かと談話を爲して居た。

「好い姿ですよ、そして、今が彼の女の盛の初まりなんです」と、彼は云つて居た、が、ロストオフを見ると、言語を斷つて、顔を擧げた。

「何の用です？。請願書かね？……」

「何だね？」と、次の部室の誰か尋いた。

「又請願書なんです」と、下袴鈞の男が答へた。

「後で來いと云つて呉れ給へ。陛下が直きにお出かけなんだ、吾々はお出無きやアならんのだから」

「後で、後で、明日。最早遅い……」

ロストオフは振り返つた、そして、行かうと爲た、が、下袴鈞の男は彼を止めた。

「誰からのですか？。貴下は誰かね？」

「少佐デニソフから」と、ロストオフは答へた。

「貴下は誰かね——將校？」

「中尉 伯爵ロストオフ」

「何といふ大膽なことですか。その筋を経てお出しなさい。さア、お歸りなさい、行き給へ……」で、その男は、侍僕が渡した制服を着始めた。

ロストオフは再廣室へ出て行つた、そして、此度は、禮装を爲た多數の將校や將官たちが其所に居るのを見た、で、彼はその真中を通つて行か無ければなら無かつた。

自分の大膽さを咄ひながら、今にも皇帝に出會つて、彼の前で恥を搔かされて、拘束の下に置かれるかも知れぬといふ考の爲めに、氣絶しさうに爲り、自分の行動の如何にも異式であることに今は十分に氣が付いて、それを悔みながら、ロストオフは華麗な衣服の隨員の群の間を、伏眼になつて、家の外へと通つて居た、と、聞き慣れた聲が彼を呼んだ。そして、手が彼を引き止めた。

「おい、君、フロックコウトで此所で何を爲て居たんだね？」と、第二低音の聲が尋いた。

それは、この戦役の間に、皇帝の特別な寵遇を得た、そして前にロストオフが勤めて居た師團の司令官であつたことのある騎兵の將官であつた。

ロストオフはギョッとして言ひ分けを爲やうと爲始めた、が、將官の人の好い、機嫌の好さうな顔を見て、彼は片側へ動いた、そして、昂奮した聲で事件を悉皆話して、將官も知つて居るデニイソフの爲めに執成して呉れと將官に頼んだ。

將官はロストオフの物語を聞くと、嚴かしさうな顔で頭を振つた。「氣の毒だ、彼の勇敢な男の爲めに實に氣の毒だ、手紙を我輩に渡し給へ」

ロストオフが手紙を將官に渡し、デニイソフの困却を悉皆話し切る間も殆ど無い位に、拍車の急ぎ足の音

が階段で聞こえた、そして、將官はロストオフの側を離れて、昇降段へと動いて行つた、皇帝の隨員の紳士たちは階下へと駆け下りて、各自の馬へ行つた。アウステルリッツの時と同なじな馬丁が、皇帝の馬を引いて来た、そして、階段で、ロストオフには直ぐそれと知れた軽い足音が聞こえた。認められる危険を忘れて、ロストオフは、町の物見高い人々と一緒に、昇降段の直ぐ傍へ動いて行つた、そして、二年振り、再び彼は自分が崇拜して居る顔容——同なじ顔、同なじ眼容、同なじ歩き振り、尊嚴と柔和の同なじ結合を見た。……そして、皇帝に對する熱心と尊信の感が、往時の力その儘で、ロストオフの胸の裡へ起つて来た。

皇帝は、ブレオブラアゼンスキイ聯隊の制服を着て、白い鹿皮の下袴で、長靴を穿き、ロストオフの氣が付か無かつた勳章（それは、レジョン・ドヌウルであつた）を着けて居た。彼は小脇に帽子を抱へ、白い手袋を箱めながら、昇降段へ出て来た。彼は立ち止まつて、一瞥で身邊に光輝を注ぐかのやうに、見廻した。將官の中の誰かに彼は二言三言云つた。彼は又、ロストオフの師團の前の司令官を認めた、それに向かつて微笑み、そして、彼を喚び寄せた。

隨員全體が後へ下がつた、そして、ロストオフは、その將官が少しの間皇帝と談話を爲て居るのを見た。皇帝は、將官に少し何か云つた、そして、自分の馬の方に一歩行つた。再、隨員や、ロストオフも加はつて居た街の見物人の群集が、皇帝の傍へと動いた。鞍へ手を掛けて靜然と立ちながら、皇帝は騎兵將官に振り向いた、そして、衆皆に聞せる積りらしい態度で聲高に、「私にも爲やうは無いよ、將官、私にも爲やうは無いよ、法は私より復に強く大きいものだからね」と云つた、で、彼は、鎧に足を掛けた。將官は謹んで頭を下けた、皇帝は鞍に身體を据ゑて、街を駆け上つた。ロストオフは熱心で物狂はしくなつて、群集と一緒にその後から駆け出した。

(三十一)

皇帝が乗つて行く先方の廣小路には、相互に向ひ合つて、右にブレオブラアゼンスキイ聯隊の一大隊、左に熊の皮の帽子を着た佛蘭西の近衛の一大隊が立つて居た。皇帝が、武器を捧げて居る兩大隊の一翼へと乗つて居るうちに、騎兵の今一つの群が反對の翼へと駈けて居た、そして、ロストオフは、その連中の先頭にナボレオンを認めた。その姿は他の誰でもある氣遣は無かつた。彼は、小さい帽子を冠ぶり、肩を横断つて聖アンドレーの綬を着け、白い直衣の上に開いた青い軍服を着て、駈けて來た。彼は、眞紅の黄金の刺繡のある鞍覆を掛けた非常な善い種の水青の亞刺比亞馬に乗つて居た。アレクサンドルの傍へ乗り附けて、彼は帽子を揚けた、と、その舉動で、ロストオフは、騎兵としての眼から、ナボレオンが馬上で拙い不確な鞍着であるのに氣が付か無いでは居られ無かつた。兩大隊は、萬歳や、皇帝萬歳を叫んだ。ナボレオンはアレクサンドルに何か云つた。兩皇帝は馬から下りた、そして、相互に手を繋り合つた。ナボレオンの顔は不愉快な偽善的の微笑を持つて居た。アレクサンドルは、親し氣な表情でナボレオンに何か云つて居た。

群集を支へて居る佛蘭西憲兵の馬の蹴るのにも構はず、ロストオフは、皇帝アレクサンドルとナボレオンの有らゆる舉動を見守つて居て、二人から一度も眼を離さ無かつた。意外な不思議な事としてロストオフを驚かした事柄は、アレクサンドルが、ナボレオンが自分と同等の者でもあるかのやうに舉動つて居たことと、それから、ボナバルトが、王者とのこの同等の親しい關係が彼に取つては自然な常習の事であるかのやうに、露西亞の皇帝に對する彼の舉動に於て平氣であつたことと、であつた。

アレクサンドルとナボレオンは、隨員の長い尾を引いて、ブレオブラアゼンスキイ大隊の右翼の方へ向けて、其所に立つて居た群集の直ぐ傍まで動いた。群集は不意に兩皇帝の極く傍に居ることになつたので、その先頭に立つて居たロストオフは、認められては大變だと恐れ出した位であつた。

「陛下、貴下の兵卒のなかの最も勇敢な男にレジョン・ドンヌウルを與へることを、お許しく下さいませんか」と、十分に一字々々亮然と發音しながら、突慳貪な、正確な聲が云つた。

それは、アレクサンドルの眼を眞正面に見上げながら物云つて居る小さいナボレオンであつた。アレクサンドルは自分に向つて云はれて居る事柄を注意深く聞いて居た、そして、頭を下けて愛嬌深く微笑んだ。

「此度の戦争で最も勇敢に働いた者へ」と、一綴々々力を入れて、ナボレオンは云ひ添へた、そして、ロストオフには如何にも厭に見えた安心と落着で、彼の前に整列して、皆武器を捧げて自分等の皇帝の顔をビリッともせずに見詰めて居る露西亞の兵卒の列を見渡した。

「陛下は、私が聯隊長の意見を尋ねるのをお許しく下さいませんか？」と、アレクサンドルは云つた、そして、大隊の司令の公爵コズロオフスキイの方へ、急いで二三歩運んだ。ボナバルトはその間に、自分の小さい手から手袋を脱つて居た、そして、それを引きもぎつて、投げ捨てた。侍從武官が、後から前へ突びだして、それを拾ひ上げた。

「誰にやる？」と、皇帝アレクサンドルは、低聲の露西亞語でコズロオフスキイに尋いた。

「陛下の御意次第で」

皇帝は、不機嫌の顔容で、顔を擧めた、そして、見廻しながら、云つた——

「おい、吾々は返答を爲無ければならんでは無いか」

コズロオフスキイは、断乎とした顔容で、列伍を見渡した、その一瞥の裡には、ロストオフまでも入れたのであつた。

「俺ちやア無いだらうか？」と、ロストオフは思つた。

「ラザアレフ」と、聯隊長は、睨めた顔で呼んだ、そして、射的場で一番の銃手であつた兵卒のラザアレフが勢ひ好く歩み出た。

「何處へ行くんだ？止まれ」と、何處へ行つて宜いのか知ら無かつたラザアレフに、幾つもの聲が囁いた。ラザアレフは、自分の隊長を恐さうな横眼で見ながら、ビタリと止まつた、そして、列の前面へ喚び出された兵卒には人が極く屢々見るやうに、彼の顔が震へて居た。

ナポレオンは、頭をホンの少し後の方へ反して、そして、何物かを探すかのやうに、小さい肥つた手をホンの少し動かした。随員の人々がその同じ刹那に何が要るのか察して、衆皆忙がしく動き出した、彼等は囁き合つて、次ぎくにと何物かを渡した、で、扈從——ロストオフがポリイスの宿で前の晩見たのと同じ者——が駈け出た、そして、突出した手の上へ恭しく頭を下けて、一瞬の間もその手を待たして置かずに、赤い綬の附いた勳章をその裡へ置いた。

ナポレオンは、それは見ずに、二つの指を押し合はせた、勳章はその指の間に有つた。ナポレオンは、眼をキヨロくさせながら、尙且自分の皇帝ばかり頑として見詰めて立つて居たラザアレフへ近寄つた。ナポレオンは、自分の今爲て居ることは自分の同盟者の爲めに爲るのであるといふことを見せる爲めであるかのやうに、皇帝アレクサンドルを見返つた。勳章を持つて居る小さい白い手が、兵卒のラザアレフの扣鈕に觸つた。ナポレオンは、その兵卒が幸福であり、賞を與へられ、世界の誰よりも傑いものとされるには、彼の

手はその兵卒の胸へ觸らうとしさへすれば、それで十分だといふことを知つて居るかのやうであつた。ナポレオンは唯ラザアレフの胸へ勳章を置いた、そして、手を落して、彼はその勳章は確にラザアレフの胸にくつ付くことを知つて居たかのやうに、アレクサンドルに振り向いた。勳章は、實際、其所へくつ附いたのであつた。

露西亞や佛蘭西の世話好きの幾つもの手が、その勳章を支へ、ラザアレフの制服へそれをくつ付けるやうに直ぐに用意して居た。

ラザアレフは、彼に對して何事かを爲て居た白い手の小さい男を陰氣な顔で見た、そして、尙且、武器を捧けて、ツンと立ちながら、「其所に立ち續けて居るべきであるのか、それとも、今去るのが貴下の意に協ふのか、或は又、何か他のことでも爲たら宜いのか？」と、皇帝に尋くかのやうに、アレクサンドルの顔を再眞直に見て居た。が、何の命令もラザアレフには與へられ無かつた、で、彼は、尙長いこと同なじ堅くなつた位地に止まつて居た。

兩皇帝は各自の馬に乗つた、そして、乗り去つた。ブレオブラアゼンスキイ大隊も分れた、そして、佛蘭西の近衛兵と混つて、彼等に向つて準備された卓子に坐つた。

ラザアレフは名譽の座に置かれた。佛蘭西や露西亞の將校たちが、彼を抱擁し、祝し、彼と握手した。將校や平民の群集がラザアレフを見る爲めばかりに集まつて來た。廣小路の卓子の周圍には、笑ひ聲や、佛蘭西、露西亞の饒舌り聲の間斷無しさめきがあつた。眞赤な顔をした二人の將校がロストオフの傍を、愉快な嬉しさうな態で、通つた。

「この宴會は何うだね、君？。器は悉皆銀なんだ」と、一人が云つて居た。「ラザアレフを見たかね？」

「うん」

「ブレオブラアゼンスキイが明日奴等に御馳走するといふ話なんだ」

「おい、ラザアレフは何といふ運の好いことだらう。生涯千二百法の年金なんだぜ」

「この帽子は何うだ、若者たち」と、佛蘭西兵の毛皮帽を着ながら、ブレオブラアゼンスキイの兵卒が叫んだ。

「エラく佳いぞ、一等だ」

「合言葉を聞たかね？」と、近衛の將校が今一人に云つた。「一昨日は「ナポレオン、佛蘭西、勇氣」だつたが、今日は「アレクサンドル、露西亞、壯大」なんだ。一日吾々の皇帝がそれを與へると、次の日はナポレオンがやるんだ。明日、皇帝は、佛蘭西の近衛の一番勇敢な奴に聖ゲオルギイを授けるんだ。爲方が無い。同なじやうに返禮を爲無きやアなら無いんだから」

ボリイも、同僚のジイリンスキイと一緒に宴會を見に来て居た。歸途で、ボリイは、家の角に立つて居るロストオフを見付けた。

「ロストオフ、今日は、彼れ限り逢は無かつたね」と、ボリイは云つた、そして、何うしたのだとロストオフに尋かすには居られ無かつた、ロストオフの顔がそれほど奇異に陰氣で困つた態に見えたのであつた。「何でも無い、何でも無い」と、ロストオフは答へた。

「君は来るかね？」

「うん」

ロストオフは、遠方から宴會を見ながら、角で可なり長く立つて居た。彼の腦裡は、何様な結論にも纏めて了まふことが彼には能き無かつた苦しい混亂で湧き返つて居た。恐しい疑念が彼の心の裡で動いて居た。彼は、容貌の變つたデニイソフ、彼の屈服、斷り去られた脚や、腕や、汚物や、病氣のある病院全體のことを思つた。彼は、屍骸の病院の臭氣を實に現然と憶ひ起して、何處からその臭氣が来るか確かめやうと四邊を見廻した位であつた。それから、彼は、白い手の——今は皇帝アレクサンドルから親しみと尊敬を以て取り扱はれて居る——彼の自ら満足したボナバルトのことを思つた。其様なら、何の爲めに幾つもの脚や腕が斷り取られ、彼の幾人もが死んだのか？。それから、彼は、賞を受けたラザアレフのことを思ひ、又罰せられて宥され無いデニイソフのことを思つた。彼は、氣が付いて見ると、自分でも恐くなる程の奇異な回想に耽つて居たのであつた。

空腹と、ブレオブラアゼンスキイ宴會の旨さうな香りがさういふ氣分から彼を喚び覺ました、彼は去る前に何か食ふ物を得無ければなら無い。彼は、朝見た旅館へ行つた。旅館には、彼が食事を爲ることがなかなか難づかしかつた程、人民や、彼のやうに平民服で來た將校たちが多數群れ集まつて居た。

彼自身の隊團の二人の將校が卓子で彼と一緒に立つた。談話は勿論平和のことに向いた。ロストオフの僚友の二人の將校も、軍の大部分と同様に、フリードリンドの後で締結された平和に對して満足して居無かつた。彼等は、若し彼等が辛抱して居たら、ナポレオンの覆滅になつたのであらう、彼の兵は糧食も彈藥も無かつたのだから云つた。

ニコライは黙まつて食ひ、そして、烈しく飲んだ。彼は、自分一人で酒を二壺明けた。彼の心の裡に働いて居る内部的の沸騰は、尙且彼を苛ら立たせ、そして、何の解決をも見出さ無かつた。彼は、自分の考に身を委せるのが恐ろしかつた、それと同時に、さういふ考から脱することが能き無かつた。佛蘭西人を

見るのは實に屈辱だと將校の一人が云つて居ると、全く唐突に、ロストオフは何の原因も無い烈しさで叫び始めた、で、非常に將校たちを驚かした。

「でも、何が一番宜いのか何うして判断が能きなんだい」と、血が突つ掛けて來るので不意にカツとなつた顔で、ロストオフは叫んだ。「何うして、君等は、皇帝の爲さる事を判決することが能きなんだい？。吾々に陛下を批評する何様な権利があるんだい？。吾々には、皇帝の目的や行爲を知ることが何うしたつて能き無いんだぞ」

「でも、僕は皇帝のことは一言も云は無かつたぜ、その將校は、ロストオフの憤激に對して、彼が酔拂つて居るからといふより外に何等の解釋をも加へ兼ねて、自分の辯解として、さう云つた。

「吾々は、外務の屬官ぢやア無い、吾々は軍人だ、唯それであるつ限りなんだ」と、彼は續けた。「死ぬと吾々に命じろ——さうすれば、吾々は死ぬんだ。で、若し吾々が罰せられるとすれば、當然吾々が悪かつたんだ、吾々がそれを判断すべきぢやア無い。ボナパルトを皇帝と認め、彼と同盟を結ぶことが、皇帝陛下の御意であるんなら、それは、良いことに違ひ無いんだ。若し、吾々が一度何でも彼でも批評し、議論するといふやうになりだしたら、吾々に取つて神聖な物といふのは何にも残ら無いやうになるんだい。さういふ風になれば、吾々はこの世に神が無い、何にも無いと云ふやうになるんだぞ」と、ニコライは、卓子の上へ拳を打つ付けながら、叫んだ。彼の言語は、彼の同伴者には、如何にも籤から棒のやうに見えた、が、ロストオフ自身の考の順は整然追つて居るのであつた。「吾々の任務を盡くし、奴等を粉微塵に切り碎いちまうのが吾々の爲事なんだ、考へることなんざア爲無いことなんだ、全くそれだけなんだぞ」と、彼は叫んだ。

「それから、飲むこと」と、喧嘩を爲る氣の少しも無かつた將校の一人が口を挿れた。
「左様だ、それから、飲むことだ」と、ロストオフは承認した。「おゝい、其所の奴、今一壘」と、彼は怒號つた。

戦争と平和上卷終

大正十四年十一月十七日印刷
大正十四年十一月二十日改版發行
大正十五年八月二十四日再版發行

著作權所有

編輯者兼
發行者

國民文庫刊行會
東京市神田區小川町一番地

右代表者

鶴田久作
東京市本郷區西片町十番地

印刷者

橫山幸七
東京市麴町區元國町二丁目九番地

印刷所

朝日印刷所
東京市麴町區元國町二丁目九番地

發行所

電話神田一八三三五番
替振東京一八五七二番

國民文庫刊行會

戰時と平和上巻

【非賣品】

(岡山製本)

444
P3

終